

5 直説法と接続法

数多の言語がムードの文法範疇を有することは 1.2.1 で記された. 特にヨーロッパ言語では, ヨーロッパ言語に限ったことではないが, これは直説法と接続法の違いという観点から扱われる. スペイン語から例を挙げる(Klein 1975:356).

Insisto que aprende

I.insist that learn+3SG+PRES+IND

‘I insist that he is learning’

私は彼が学んでいることを主張する.

Insisto que aprenda

I.insist that learn+3SG+PRES+SUBJ

‘I insist that he learn’

私は彼が学んでいることを主張する.

また他の言語, 特にアメリカの諸語とパプアニューギニアの諸言語が‘現実 {realis}’と‘非現実 {irrealis}’でラベル付けされたマーカーを有することも記された.

基本的に直説法 / 接続法と, 現実 / 非現実には類型論的な違いはなく, 両者はムードの例である(‘**現実 {Realis}**’ ‘**非現実 {Irrealis}**’)であるということを示された. しかし‘**接続法 {subjunctive}**’と‘**非現実 {irrealis}**’とラベル付けされたものの機能の違いは大きく, したがって実用的な理由からそれらは別の章 (5 と 6) で扱われるだろう. さらに 7 章ではこれらの類似点と相違点が論じられるだろう.

この章では用例のほとんどがラテン語やギリシャ語といった古典語, そしてロマンス諸語, その中でもとりわけスペイン語といった言語から挙げられる. なぜならその言語には接続法に関する膨大な論文があるからである. デンマーク語といった他のゲルマン諸語には接続法がほとんど使われていないにも拘わらず, 文語の形式において接続法の相当な量を持つドイツ語についていくつかの言及がある. しかし直説法, 間接法といった観点から有益で妥当性をもって記されている他の言語がある. 例えばアフリカのバンツ語のいくつかでは, 動詞の基本的な構造は主語, テンス, 動詞語幹, そして *-a* で終わることによってマークされている直説法と, *-e* で終わることによってマークされている接続法 (テンスの区別は接続法と共に現われるが) といったムードに関する一連のマーカーから構成されている. スワヒリ語(Steere1943:43,57)から例を挙げる.

n-me-pend-a

I-PERF-love-IND

‘I have loved’

私は愛した.

ni-pend-e

I-love-SUBJ

‘Let me love’

私に愛させてくれ.

バンツ語族の他の言語である Luale 語(Zimbabwe and Zaire- Horton1949) と非バンツ語で西アフリカの言語である Fula 語(Arnott1970:299ff)からの例は本章の後ろで挙がっている(5.1.1 と 5.4.2). またセム語族, 特にエチオピア諸語に関する議論があるが, しかしこれらについては接続法の位置づけ{status}に関する問題がある(5.4.2 参照).

5.1 主節と従属節

Jespersen(1924:314)は接続法の機能の一つとして, 接続法が従属節で用いられるムードの典型であるという点で, 単純に従属しているという機能を表すのだと記した. 実際に‘接続法’という術語は, 学術的に従属節を意味する古典ギリシャ語の *hypotaktiké* と一致しない. 確かにラテン語では接続法は非現実の概念がないと思われる従属文においても次第に使われつつある(5.5 参照).

しかし接続法はまた, 主節においても用いられ, その場所での使用は従属節での使用よりもより単純に説明される. そのような理由からまず主節が考察される.

5.1.1 主節

Lakoff(1968:172ff.)はラテン語で主節における接続法の 6 つの異なる用法を認めた. 彼女の術語は若干特異であり (あるいは少なくとも本書で用いられているものと非常に異なる), そのような理由から現在本書で用いられているモーダル範疇の観点からここでそれらは特徴づけされる. () の中が Lakoff の術語である.

Jussive ('Imperative'):

Naviget! haec summa est, hic nostri nuntius esto
sail+3SG+PRES+SUBJ this point is, this of.us message let.it.be
Virg. (*Aen.* 4. 237)

'Let him sail, this is the point, let this be our message'

指令 {Jussive} ('Imperative'):

彼に航海をさせなさい。これが重要なことがだが、これを我々のメッセージにきなさい。

Volitive ('Optative'):

Ut illum di . . . perduint (Pl. *Aul.* 785)
that him gods destroy+3PL+PRES+SUBJ
'May the gods destroy him!'

意志 {Volitive} ('Optative'):

神が彼を破滅させるように!

Obligative ('Jussive'):

Sed maneam etiam, opinor (Pl. *Trin.* 1136)
But remain+1SG+PRES+SUBJ still, I.think
'But I should still stay, I think'

義務 {Obligative} ('Jussive'):

しかし私はまだ留まるべきだと思う。

Obligative ('Deliberative'):

Quid agam iudices? (Cic. *Verr.* 5.2)
what do+1SG+PRES+SUBJ jurymen
'What am I to do, gentlemen of the jury?'

義務 {Obligative} ('Deliberative'):

私は何をすべきですか、陪審員のみなさん。

Speculative ('Potential'):

Iam apsolutos censeas quom incedunt infectores (Pl. *Aul.* 520)
now paid.off think+2SG+PRES+SUBJ when come.in dyers
'You may think they are already paid off, when in come the dyers'

推測 {Speculative} ('Potential'):

染物屋が入ってくるときには、彼らはすでに支払いをしてもらっていると、あなたは考えてもよい。

Presupposed ('Concessive'):

Sit fur, sit sacrilegus . . .
 be+3SG+PRES+SUBJ thief be+3SG+PRES+SUBJ temple.robber
 at est bonus imperator (Cic. *Verr.* 5.4)
 yet he.is good general
 ‘Though he is a thief, though he is a temple-robber . . . he is a good
 general’

前提 {Presupposed} ('Concessive') :

彼は泥棒だ、しかも彼は専門の泥棒だ…けれども彼は良い将軍である。

これらは 1.1.2 の最初の部分で議論された非主張 {non-assertive} の 3 つのタイプに関連し、認知的モダリティ対拘束的 / 動的モダリティの識別に関連付けられうる(1.1.2 と 1.3.2). 最初の 4 つは拘束的なものである (そして命題は現実化されていないため、接続法が用いられている). 最後から二番目のものは認知的なものである (話し手は命題の真実性について疑っている). 最後のものは前提の例である (何も主張されていない).

類似した例はイタリア語に見出せる(Lepschy and Lepschy 1977:223-4) :

entri pure
enter+3SG+PRES+SUBJ if.you.please
'Please come in'

どうぞお入りください。

che venga anche lui
that come+3SG+PRES+SBJ also him
'Let him come too'

彼も来させよう。

potessi venire anch'io
can+1SG+PRES+SUBJ come also I
'If only I could come too'

私も来れさえすれば。

sapessi che lusso
know+2SG+PRES+SUBJ that grand
'You should see how grand'

あなたはどんなに大きいかを見るべきだ。

che sia finito
that be+3SG+PRES+SUBJ finished

'I wonder if it's finished'

それが終わったかしらと私は思う。

sia pure come dici tu ma io non vengo
be+3SG+PRES+SUBJ perhaps as say you but I not come
'It may be as you say, but I'm not coming'

あなたの言うとおりかもしれないが、私は来るつもりではない。

最初のもは通常丁寧な命令と見做される - **命令** {Imperative} (3.4 参照). しかし動詞が二人称である本来の命令とは異なり, 用例は三人称の動詞である. 形式の面では最初のもは二番目のものと類似しており, 二番目のものは**指令** {Jussive} である. 三番目のものは願望 (意志 {Volitive}) であり, 四番目のものは義務のもう一つの例である(**義務** {Obligative}). すべて拘束的 (非現実) なものである. 最後から二番目のものは認識的なものであり, 可能性あるいは疑いの程度を表している (**推測** {Speculative}). 一方最後のものは, その前の用例のように疑いを表している**推測** {Speculative} として解釈されるかもしれないが, しかし前提された何かを指し示している譲歩として見るのが最も適しているだろう. 再びそれらは非主張の3つのタイプである.

西アフリカ言語の Fula 語(Arnott 1970:299ff)に非常に類似したものがある。驚くべきことに‘接続法’という術語が使われている。ラテン語の接続法のパラダイムと非常に類似した機能を持つ動詞のパラダイムがある(テンスの区別が欠けているが)。

指令 {directives} の 4 つのタイプを以下に挙げる.

Injunction

ngaraa
come+2SG+SUBJ
'Come on!'

インジャンクション {Injunction}

入れ！

Report for instruction or permission

minasta-na?
come in+1SG+SUBJ-INT
'May I come in?'

指図あるいは許可に関する報告 {Report for instruction or permission}
入ってもよろしいですか？

Offer or request for permission or invitations with HAA

haa njahen

HAA go+1PL+SUBJ

‘Let’s go’

HAA を伴った許可或いは招待に関する申し出あるいは要求
{Offer or request for permission or invitations with HAA}
行こう.

Obligation with SEY

sey ngurtodaa

SEY come.out+2SG+SUBJ

‘You ought to come out’

SEY を伴った義務
あなたは出てくるべきだ.

そこには命令 {Imperative}, 許可 {Permissive}, 指令 {Jussive}, 義務 {Obligative} がそれぞれある. また願望 (意志 {Volitive}) の用例もある.

Wish or prayer

njuutaa

balde

be.long+2SG+SUBJ in.days

‘May you live long!’

願望あるいは祈り {Wish or prayer}

長生きされますように！

これらすべてにおいて命題は実現されていない. 認識的な用法の例は与えられておらず (話し手は命題の真実性に疑いを持っている), しかし何も主張されていないので, 恐らく前提という観点から説明される例がある.

Expostulation or rhetorical question

njoododaa

sit+2SG+SUBJ

‘What? You sit down!’

忠告あるいは修辭的な質問 {Expostulation or rhetorical question}
何？あなたは座りなさい！

スワヒリ語で指令として用いられた接続法の用例(5.4.2 参照)は先に挙げた. バンツー語族である Luvale 語(Horton 1949:302-4)から同じ用法の例を挙げる.

tu-y-e

we-go-SUBJ

‘Let’s go!’

行こう！

va-iz-e (veze) waxi

they-come-SUBJ quickly

‘Let them come quickly’

早く彼らを来させよう。

5.1.2 従属節

従属節における接続法の使用の例は更に多様である。それらは二章と三章で議論された用法だけではなく、未来に対する言及や願望、畏怖といった他のものまで含む。そのような理由から次の二つのセクションの内容は認識的、拘束的、動的といった観点よりも、命題のモダリティと出来事のモダリティといった観点から識別されるだろう。したがって接続法をしばしば含む命令法 {imperative} に関するセクションと、明らかに従属節に動詞が現れるというだけの理由で接続法の用法を示すセクションがある。

1.1.2 で論じられたように、直説法と接続法の識別は主張 {assertion} と非主張 {non-assertion} に関連し、非主張に関する理由の一つは話し手が命題の真実性について疑いを持っているということである。しかし‘話し手 {speaker}’という語に若干曖昧さがある。主節においてそれは実際の話し手、つまり発話の発信者を明らかに言及している。以下の用例のように、命題の真実性を疑っているのはこの話し手である。

Quizá viene

maybe come+3SG+PRES+SUBJ

‘Maybe he’s coming’

恐らく彼は来つつある。

しかし以下に見られるように、従属節では関与的な‘話し手’は、主動詞の主語によって示された報告された話し手である。

María duda que sea

buena idea

María doubts that be+3SG+PRES+SUBJ good idea

‘Mary doubts that’s a good idea’

メアリーはそれが良い提案であることを疑っている。

(これは 1.1.2 の用例に手を加えたものである。実際の話し手と報告された話し手が両者とも‘私 {I}’であるため、有益ではなかった。) 概して主節における接続法の選択は実際の話し手の態度や信用などに依拠している。しかし従属節では主節における主語によって表された人の態度や信用など(主動詞によって指し示された態度や信用などに関する)に依拠している。これは以下のように前提されたことに関する接続法の使用にも当てはまる。

Le alegra que sepas la verdad
him it.pleases that know+2SG+PRES+SUBJ the truth
‘He’s glad that you know the truth’

彼はあなたが真実を知っていたら喜んだだろう。

しかし一般的に実際の話し手もまた命題が真実であることを受け入れている(これは議論の余地があるが、ここでは議論されない)。

従属節における接続法の用法の例はここで与えられない - それらは主節従属節の両方を例証する以下のセクションで見られることになる。

5.2 命題のモダリティ

5.2.1 推測

ラテン語における認識的な可能性(推測 {Speculative})を表すために用いられる接続法の例は 5.1.1 で与えられた。更なる例をイタリア語とスペイン語から挙げる。

che sia finito
that be+3SG+PRES+SUBJ finished
‘I wonder if it’s finished’

それは終わったかしら。

Quizá viene
maybe come+3SG+PRES+SUBJ
‘Maybe he’s coming’

恐らく彼は来ている。

イタリア語の例は通常従属節の接続詞(‘that’)である *che* によって紹介されているが、これらは主節の用例である。

Blauchi 語(Bybee et al. 1994:195)というまったく異なる言語の例が 4.1.1 で挙げられた.

ma bækly adda kəssa bȳzanə
1PL perhaps there someone know+1SG+SUBJ
'Perhaps we know someone there'
恐らく私たちはそこの誰かを知っている.

また接続法は信用 {belief} を表す動詞に後続する従属節の中で用いられる場合がある。しかし通常ここでは直説法と接続法という選択があり、その選択は関与的な命題の真実性に対する話し手の判断によって決められる。しがたって Butt and Benjamin(1988:228, 227)は、CREER 'believe' と PARECER 'appear', SUPONER 'suppose', SOSPECHAR 'suspect' といった類似した動詞は、躊躇や言われていることがより仮定的であるならば、接続法が後続する場合もあると述べている。同様に Lepschy and Lepschy(1977:227)はイタリア語に関して、直接法か接続法のいずれかのモードは CREDERE 'believe', PARERE 'appear', SEMBRARE 'seem' を伴って用いられる場合があるとしている。CREDERE に関して例を挙げる。

Credo che tu abbia/hai ragione
I.think that you have+3SG+PRES+SUBJ/IND right
'I think you are right'
私はあなたが正しいと思う。

イタリア語の接続法はまた、*é probabile/improbabile che* ‘it is likely, unlikely that’ と *puó darsi che, puó essere che* ‘it may be that’ のような可能性と蓋然性を表す非人称表現の後で用いられる (Lepschy and Lepschy 1975:225). またスペイン語でも類似した表現に後続する。

文語のドイツ語では若干異なる．接続法は信用 {belief} の動詞と共に用いられるが，しかし過去時制に限って共に用いられる（また言語活動動詞とも用いられる - 5.2.2 参照）．

Ich glaubte er wäre krank
I thought he be+3SG+IMPF+SUBJ ill
'I thought he was ill'
彼が病気だと私は思った。

異なる問題は信用の否定された動詞と共に用いられる接続法の用法である。これについては 5.2.3 で議論される。

5.2.2 報告

接続法は報告されたものを指し示すためにしばしば用いられる。ドイツ語では書き手あるいは話し手自身の陳述の部分ではなく、言われていることあるいは言われたことを指し示すために主節で用いられる場合がある。

Bei seiner Vernehmung berief sich H. auf Notwehr. Er
in his examination appealed H to self-defence. he
sei mit S. in Streit geraten und
be+3SG+PRES+SUBJ with S. in quarrel fallen and
habe sich von diesem bedroht gefühlt
have+3SG+PRES+SUBJ self by him threatened felt

‘In the course of his cross examination, H. pleaded self-defence. He had become involved in a quarrel with S. and had felt himself to be threatened by him’

尋問の間、H氏は自己防衛を主張した。S氏とのケンカに巻き込まれたと。そして彼はS氏に脅かされていると感じた。

ここで二番目のセンテンスはH氏が主張したことであり、書き手自身の報告の部分ではない。

ドイツ語において、従属節では接続法は過去時制における報告 {report} の動詞（また信用 {belief} の動詞も - 5.1.1 参照）を伴って通常見出される（用例は Hammer(1983:265-71)から。大部分が文語調のものである）。

Ich glaubte er wäre krank
I thought he be+3SG+IMPF+SUBJ ill
‘I thought he was ill’

彼は病気だと私は思った。

Er sagte er wäre krank
he said he be+3SG+IMPF+SUBJ ill
‘He said he was ill’

彼は病気だと彼は言った。

しかし口語のドイツ語では直説法が用いられる。

Er glaubte, ich war krank
he thought I be+3SG+IMPF+IND ill
‘He thought I was ill’

私が病気だと彼は言った.

文語で接続法は報告の現在時制の動詞と共にしばしば用いられ, 特に上記の用例の全てにおけるように, 接続詞の *dass* は用いられない. *dass* に関しては直説法で用いられる.

Er sagt, er müsse nach Hause
he says he must+3SG+PRES+SUBJ to house
'He says he must go home'

彼は家に行かなければならないと言う.

Er sagt, dass er nach Hause muss
he says that he to house must+3SG+PRES+IND
'He says he must go home'

彼は家に行かなければならないと言う.

以下のように *dass* を伴わない直説法は話し手が報告された命題を真であると受け止めていることを示す場合がある.

Er sagte, er schwimmt gern
he said he swim+3SG+PRES+IND with.pleasure
'He says he likes swimming'

彼は水泳が好きだと言う.

イタリア語は一般的に否定でも疑問でもない報告の動詞の後に接続法を用いるが(5.2.3, 5.2.4), しかし伝聞 {hearsay} (報告 {Reported3})を示す *si dice* 'one says' のあとで用いられる. 比較せよ(Lepschy and Lepschy 1997:226).

Ada dice che i soldati sono partiti
Ada says that the soldiers be+3PL+PRES+IND left
'Ada says that the soldiers have left'

アダは兵士が発ったと言う.

Si dice che i soldati siano partiti
One says that the soldiers be+3PL+PRES+SUBJ left
'They say that the soldiers have left'

兵士は発ったそうだ.

これはドイツ語にも当てはまる。

Man sagt, er sei gestorben

One says he be+2SG+PRES+SUBJ died

‘They say he’s died’

彼は死んだそうだ。

ラテン語は報告された陳述に関して接続法を用いない(7.4.1 参照)。しかしラテン語で従属節が報告されたことの部分であるならば、報告された従属節の中にある関係節は接続法の中に置かれる。

Dicit se de Gallis . . . postulare triumphum quos
he.says self from Gauls to.demand triumph whom

acie vicerit (Liv. 36.40.3)

by.battle defeat+3SG+PERF+SUBJ

‘He says he claims a triumph from the Gauls, whom he has defeated in battle’

彼は自分が戦いに負けた Gauls に勝ったと主張している。

それが話し手（実際の話し手）によって与えられている情報の部分であるならば、直説法が使われる。

Diogenes . . . dicere solebat Harpalum, qui temporibus illis
Diogenes to.say used Harpalus who in.times those

praedo felix habebatur, contra deos

brigand happy be.held+3SG+IMP+IND against gods

testimonium dicere (Cic. D.N. 3.34)

witness to.speak

‘Diogenes used to say that Harpalus (who at that time was generally thought to be a fortunate brigand) was a witness against the gods’

Diogenes は Harpalum（そのとき彼は概して幸運な山賊と考えられていた）が神に対する目撃者であると言ったものだった。

ドイツ語にもまさしく類似した状況がある(Hammer 1983:268)。

Er sagte, er bewerbe sich um diese Stelle,
 he said he apply+3SG+PRES+SUBJ self to this job
 für die er gar nicht geeignet ist
 for which he at all not suited be+3SG+PRES+IND
 ‘He said he was applying for this job, for which he is not at all suitable’

Aristides . . . nonne ob eam causam expulsus est patria
Aristides NEG INT for that cause expelled is from.country
quod praeter modum iustus esset (Cic. *T.D.* 5.36.105)
because beyond mean just be+3SG+IMPF+SUBJ
‘Was not Aristides exiled because (it was said) he was excessively just?’

Papa möchte auch gern selbst lenken, Mama will es
 Papa would too with.pleasure self to drive, Mama wishes it
 aber nicht weil es die Nerven angreife
 however not, because it the nerves strain+3SG+PRES+SUBJ
 ‘Daddy would like to drive, but Mummy doesn’t want him to because
 (she says) it is a strain on the nerves’

神田外語大学韓国語学会

Lavandera(1978:19)からのスペイン語の例は若干異なる.

Mientras que a vos no te falte nada, como
as.long as to you not you lack+3SG+PRES+SUBJ nothing as
vos decís . . .

you say

‘As long as you don’t need anything as you say . . .’

あなたの言うようにあなたが何も望まない限り…

ここで *como vos decís* は明らかに聞き手によって与えられた, 何もしないという理由を明らかに指し示している.

5.2.3 否定

接続法に関して否定 {Negative} の最も一般的な組み合わせ {association} は従属節におけるものであり, そこでは上位節 {superordinate clause} が否定される. 出来事のモダリティの中で接続法が否定命令法と共にしばしば用いられるという事実(5.4.2)や主節において非現実 {irrealis} と共に否定との組み合わせの例があるという事実(6.6.4)があるにも拘わらず, この組み合わせは主節では稀である. しかし主節における非現実を伴った接続法の例の一つは Luvale 語 (Bantu-Horton 1949:302-4)で見出せる. そこでは ‘not yet’ と訳される小詞と共に用いられる.

kanda tu-mum-on-e
not.yet we-him-see-SUBJ
‘We haven’t seen him yet’

私たちはまだ彼に会っていない.

従属節で接続法は信用や報告の否定された動詞の後に規則的に用いられるが, しかし若干異なる問題が含まれるように見えるので, そういった理由から二つのタイプは分けて扱われるだろう.

信用の動詞に関して, その動詞が否定されるならば, ロマンズ諸語において接続法は一般的に従属節で用いられる. スペイン語と比較せよ (Klein 1975:353).

Creo que aprende
I.believe that learn+3SG+PRES+IND
‘I believe that he is learning’

私は彼が学んでいることを信じている.

No creo que aprenda
not I.think that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I don't think that he is learning'

私は彼が学んでいるとは思わない。

イタリア語(Hall1964:222)とフランス語(Bloomfield 1933:273)における類似した否定された形式の例は次のようなものである。

Non credo che sia Corelli
not I.think that be+3SG+PRES+SUBJ Corelli
'I don't think that it's Corelli'

私はそれが Corelli だと思わない。

Je ne pense pas qu'il vienne
I not think that he come+3SG+PRES+SUBJ
'I don't think he'll come'

私は彼が来るとは思わない。

また接続法は、そこに形式的な否定がなくとも、疑いを表す動詞と共に用いられる。例えばスペイン語である(Klein1975:356,353)。

Dudo que aprenda
I.doubt that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I doubt that he's learning'

私は彼が学んでいることを疑っている。

このことから接続法の使用は否定によって直接決定されるのではなく、疑いを表す表現によって決定されることが示唆される。この観点において 先のスペイン語の例や対応するイタリア語によって示されたように、'not-think' が疑いの表現であり、また疑いを表す動詞が接続法をもたらすということで、接続法が用いられている。

Dubito che impari
I.doubt that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I doubt that he's learning'

私は彼が学んでいることを疑っている。

この観点は否定されていない信用の動詞に関して、接続法の使用は、5.2.1 で

記されたように、話し手が命題の真実性についていくらかの疑いを持っている
ということを示しているという事実によって支持されている。

しかしこれについて他の見解がある。 *I don't think he is stupid* は 'I think he's not stupid' として解釈されうる。これは論理学で 'negative rising' 或いは 'negative transportation' として扱われている。それは否定は従属節において起こるが、しかし主文に上がったり或いは移動したりするということを示唆している。より良い分析としては、否定のスコープの観点によるものである。最も明瞭な解釈は、 *I don't think he is stupid* の中に狭いスコープがあるということである。なぜなら従属節のみが（概念的に）否定されているからである。対照的に、あまりありそうではない解釈としては 'It's not the case that I think he's stupid' では、センテンス全体を否定する広いスコープがあるのだろう。

この点において否定命令法に関して、接続法ではなく直説法が用いられるということが関与的である。

No crea usted que es tonto
not think+3SG+PRES+SUBJ you that be+3SG+PRES+IND stupid
'Don't think that he is stupid'

彼がバカだと思ふな。

ここでの解釈は ‘not-think’, つまり ‘疑い {doubt}’ の観点ではなく, 考えない命令という観点なのである - ‘Think(not(he is stupid))’ではなく ‘Not(think(he is stupid))’である. スコープの観点からは, コントラストは (先の用例のように) 接続法に関する狭いスコープと (ここでのように) 直説法に関する広いスコープが現われる.

直説法はまた、否定疑問 {negative questions} についても見出される。

¿No es verdad que ha dicho eso?
not is truth that have+3SG+PRES+IND said that
'Isn't it true that he said that?'

彼があのように言ったのは本当ではないのか？

Butt and Benjamin(1988:227)は、否定疑問は意味論的に否定ではない。したがって直説法が用いられている。しかしスコープの観点からこの例が（狭いスコープである）‘Is it true that he didn’t say that?’を意味していないことは明らかである。

そこで信用の動詞と言語活動動詞との比較で重要なことは、接続法が狭いスコープである前者で用いられているということである。これは後に見るように、言語活動動詞には適用されない。

ロマンス語の言語活動動詞に関して, ‘say’ という動詞はそれが否定されなければ, 一般的に直説法によって先立たれる. もし直説法か接続法のいずれかが否定されるなら, イタリア語のようになる.

Dico che ha torto
I say that have+3SG+PRES+IND wrong
‘I say that he is wrong’

彼が悪いと私は言う.

Non dico che lui abbia/ha torto
not I say that he have+3SG+PRES+SUBJ/IND wrong
‘I do not say that he is wrong’

彼が悪いと私は言っていない.

ここで決定的なポイントは, そこには広いスコープがあるということである - 否定された用例の解釈は ‘It is not the case that I say he is wrong’ であって, ‘I say that he is not wrong’ ではない. 言語活動動詞については, 信用の動詞とは異なって, 接続法は否定の広いスコープがあるところで起る.

同じ状況 (同じ議論に関する) はスペイン語の ‘know’ に適用できる.

Yo sabía que él estaba ahí
I knew that he be+3SG+PAST+IND here
‘I knew that he was here’

彼がここにいたことを私は知った.

Yo no sabía que él estaba/estuviera ahí
I not knew that he be+3SG+PAST+IND/SUBJ here
‘I did not know that he was here’

彼がここにいたことを私は知らなかった.

二番目の用例は ‘I knew that he was not here’ ではなく, ‘It is not the case that I knew that he was here’ を意味している.

狭いスコープという観点 (‘not-think equals doubt’) からの説明は否定された言語活動動詞に利用できないので, 否定された言語活動動詞に関する接続法の使用について別の理由が考えられなければならない. 実際には言われていないことは主張されていないという非常に明確な答えがある. ムードの識別が現実 / 非現実 {Realis / Irrealis} という観点からなされる言語において, 否定は同様に非現実 {Irrealis} に関連付けされるということが 6.6.4 で考察されるだろう.

しかしスペイン語で ‘deny’ もまた接続法を要求するということが記される.

Niego que haya venido
I.deny that have+3SG+PRES+SUBJ come
'I deny that he has come'

彼が来たことを私は否定する。

‘deny’については、そこには（概念的に）狭いスコープがある。上記の例は‘I say that he has not come’を意味している。そして否定の広いスコープと狭いスコープは接続法に関連付けされる。

ドイツ語の状況はロマンス諸語と類似している。現在テンスの動詞が否定されるならば、接続法は現在時制の動詞についても見出される。

Er sagt, er ist müde
He says he be+3SG+PRES+IND tired
'He says he is tired'

彼は疲れていると言っている。

Er sagt nicht, er wäre müde
 he says not he be+3SG+IMPF+SUBJ tired
 ‘He does not say he is tired’

彼は疲れていると言っていない。

否定と接続法のより異なる例はラテン語の理由を表す節 {causal clauses} で見出される。これらは理由を表す接続詞として紹介されており，また一般的に直説法に続く。

Torquatus . . . filium suum quo is contra imperium in hostem
 Torquatus son his because he against rule in enemy
 pugnaverat, necari iussit (Sall. C. 52)
 fight+3SG+PLUP+IND be.killed he.ordered
 ‘Torquatus ordered his son to be executed, because he had fought
 against the enemy contrary to orders’

Torquatus は彼の息子が死刑にされることを命令した。なぜなら彼は命令に逆らって敵と戦ったからだだった。

しかし接続法は節が否定されるとき，すなわち本当の理由ではないときに用いられる。

Pugiles . . . ingemescunt non quod doleant . . . sed
boxers groan not because be.in.pain+3PL+PRES+SUBJ but
quia profundenda voce omne corpus intenditur (Cic. TD. 2.23.56)
because with.bursting voice whole body be.stretched+3SG+PRES+IND

‘Prize-fighters groan not because they are in pain, but because their
whole body is made more tense by the burst of sound’

賞金獲得に闘う者は痛みからではなく、彼らの体が轟音によって一層緊張をさせられたために唸った。

(これは 5.1.2 にあった報告された理由に関する接続法と比較される場合もある) 同じ種類の特徴はスペイン語に見出せる(Lavandera 1978:21).

Yo no lo digo porque a mi me moleste
I not it say because to me me bother+3SG+PRES+SUBJ
‘I don’t say it because it bothers me’ (i.e. ‘not because . . .’)

それが私を悩ませるので私はそれを言わない(すなわち ‘not because…’).

よりステレオタイプな表現の中に類似したものがある。

No es que no me guste
not is that not me pleases+3SG+PRES+SUBJ
‘It isn’t that I don’t like it’

私がそれを好きではないということではない。

ここでありうる理由は拒絶されている。

若干異なるが、スペイン語は関与的な行動が行われなかったことを示すために *sin que* ‘without’ の後に接続法を用いる。

Desechó el cigarrillo sin que el profesor
he.threw.away the cigarette without that the master
lo viese
it see+3SG+IMPF+SUBJ
‘He threw away the cigarette without the master seeing it’

彼はマスターがそれを見ることなしに煙草を投げた。

イタリア語(Lepschy and Lepschy 1977:225)にも類似したものがある。

È entrato senza che noi lo sentissimo
is entered without that we him hear+1PL+IMPF+SUBJ
'He came in without our hearing him'

彼は彼が入ってきたのを私たちが聞くことなしに入ってきた。

5.2.4 疑問

疑問 {Interrogative} に関して二つのポイントがある。

第一に、疑問と否定はしばしば同じ方法で機能するので、共に‘非主張 {non-assertive}’として特徴づけられる(Quirk et al 1985:83)。したがってスペイン語やイタリア語におけるように、疑問は否定と同様に接続法を引き起こす信用の動詞と言語活動動詞の例がある。

¿Cree Vd que venga?
believe you that come+3SG+PRES+SUBJ
'Do you think he will come?'

あなたは彼が来ると思うか？

sai se sia vero?
you.know if be+3SG+PRES+SUBJ true
'Do you know if it's true?'

あなたはそれが本当であるかどうかを知っているか？

これはまた、言語活動動詞の現在時制についてもドイツ語で当てはまる(5.1.2 参照)。

Sagt er er wäre müde
Says he he be+3SG+IMPF+SUBJ tired
'Does he say he is tired?'

彼が疲れていると彼は言っているのか？

スペイン語では否定疑問に関して興味深い反対の状況があり、それは直説法を用いるということがある。これは 5.2.3 で議論された。

¿No es verdad que ha dicho eso?
not is truth that have+3SG+PRES+IND said that
'Isn't it true that he said that?'

彼があのように言ったのは本当ではないのか？

二番目に、接続法はスペイン語やイタリア語のように報告された（間接的な）疑問において用いられる。そこで直説法はよりくだけた文体である。

mi chiese se fosse/era possibile

me he. asked if be+3SG+IMPF+SUBJ/IND possible

‘He asked me if it would be possible’

それが可能かどうかを彼は私に尋ねた。

直説法が直接的な疑問に用いられるにも拘わらず、ラテン語で接続法は間接的な（報告された）疑問に関して常に求められる。

Quid agis? → Rogo quid agas

What do+2SG+PRES+IND → I. ask what do+2SG+PRES+SUBJ

‘What are you doing?’ → ‘I ask what you are doing’

Rogavi pervenisset-ne Agrigentum (Cic. Verr. 2.4.12.27)

I. asked arrived+3SG+PLUP+SUBJ-INT Agrigentum

‘I asked if he had arrived at Agrigentum’

あなたは何をしているのか？ → 私はあなたがしていることを尋ねている。
私は彼が Agrigentum に到着したかどうか尋ねた。

5.2.5 前提

接続法がスペイン語で用いられ、そこでは命題（従属節の中で）は例のように前提されるということが 1.1.2 で記された。

Me alegra que sepas la verdad

me it. pleases that know+2SG+PRES+SUBJ the truth

‘I’m glad that you know the truth’

あなたが真実を知ったら私は嬉しい。

スペイン語とイタリア語の例から見られるように、イタリア語（他の言語にも）にも類似した状況がある。

Sp. Lamento que aprenda

It. Mi dispiace che impari

I. regret that learn+3SG+PRES+SUBJ

‘I regret that he learns/is learning’

私は彼が学ぶこと / 学んでいることを残念に思っている。

REGRET のような動詞は補語にある命題が前提されているという点で Kiparsky and Kiparsky(1971:245-8)が ‘現実の補語 {factive complements}’ と呼ぶものを有している。つまり話し手に真として受け止められているのである（また聞き手も真だと想定していると話してが想定している）。1.1.2 で説明したように、重要なポイントは命題は前提されているので、何も主張されておらず、またそこに非主張 {non-assertion} があるとき、接続法が使われるということである。

従属節における接続法の他の例をスペイン語とイタリア語から挙げる。

me molesta que te quejes tanto
me it.bothers that you+REFL complain+2SG+PRES+SUBJ so
‘It bothers me that you complain so much’

あなたが不満をたくさん言うことが私を悩ませる。

mi sorprende che tu dica queste
me it.surprises that you say+2SG+PRES+SUBJ that
‘It surprises me that you say that’

あなたがそのように言うことが私を驚かせる。

Givón(1994:304)によると、スペイン語で接続法は、‘sympathize’ の意味の SENTIR, ‘be surprised’ の意味の SORPRENDERSE, ‘be glad’ の意味の MOLESTARSE, ALEGRASE のような動詞と共に用いられる。イタリア語に類似した動詞がある。

同様に接続法は感情を表す（スペイン語とイタリア語）非人称構文と共に用いられる。

fué una lástima que no me lo dijeras
it.was a pity that not me it tell+2SG+PAST+SUBJ
‘It was a pity that you didn’t tell me’

あなたが私に話さなかったのは残念だ。

è peccato che sia già partit
it.is pity that be+3SG+PRES+SUBJ already left
‘It is a pity that he has already left’

彼がすでに発ったのは残念だ。

いくつかの表現について Givón は、‘感情的な反応の度合い’ によって直説法

か接続法の選択があるとしており、接続法はより強い度合いの感情を表現する。例えば ‘be shocked’ を表す HORRORIZARSE, ‘be incredible’ を表す SER INCREÍBLE である。イタリア語では Lepschy and Lepschy(1977:225)によると, ‘be sorry’ の RINCRESCERE, ‘be surprised’ の STUPIRSI, ‘be pleased/displeased’ の ESSERE CONTENTO / SCONTENTO, ‘be cross’ の ESSERE ARRABIATO などのような動詞と表現に関して文体的な選択があるという。

主張されているものに関する直説法と前提されているものに関する接続法の使用のコントラストは二つの意味で用いられうる動詞によってよく表される。スペイン語とイタリア語のペアを比較せよ(Klein 1975;Lepschy and Lepschy 1977:228)。

Siento que aprende
I feel that learn+3SG+PRES+IND
‘I feel that he is learning’

私は彼が学んでいることに気付いている。

Siento que aprenda
I feel that learn+3SG+PRES+SUBJ
‘I regret that he should learn’

私は彼が学ぶべきだと後悔している。

Si capisce che sono arrabiati
One understands that be+3PL+PRES+IND cross
‘It’s clear that they are cross’

彼らが不機嫌なのは明らかだ。

Si capisce che siano arrabiati
One understands that be+3PL+PRES+SUBJ cross
‘It’s understandable that they should be cross’

彼らが不機嫌なのは理解できない。

各々のペアの最初のもは、話し手が命題を新しい情報として表現しており、直説法が用いられている。一方二番目のものでは、話し手は共有された知識に対する話し手の態度を表現しており、接続法が用いられている。

関与的なものが感情的な態度それ自体ではなく、新しい情報がないという事実であるという強力な証拠は、‘the fact that’ である *el hecho que* の後に接続法が使用されていることによって示されている(Butt and Benjamin 1988:221)。

el hecho que España no tenga petróleo
the fact that Spain not have+3SG+PRES+SUBJ oil
explica las dificultades económicas
explains the difficulties economic
'The fact that Spain doesn't have any oil explains the economic
difficulties'

スペインが原油を持っていないという事実は経済的な難しさを物語っている。

ここで‘事実 {fact}’に対する特定の言及があるにもかかわらず、命題は主張されておらず、前提されているのである。対照的にそこで‘事実(*el hecho*)’は新しい情報であり、接続法は用いられていない(Butt and Benjamin 1988:229)。

No lo hace por de hecho que no le gusta
not it does for of fact that no her please+3SG+PRES+IND
'She doesn't do it, because she doesn't like it'

彼女はそれをしていない。なぜなら彼女はそれが好きではないからだ。

最後に、しかし極めて重要なのだが、接続法はあることが真であるということ
を許したり、受け止めるための譲歩節のなかで用いられる場合がある。これ
らはラテン語のように後続く節に対して同格にある主節(5.1.1 参照)の中にあ
ったり、従属節(斜格 {oblique})の中にあったりする場合がある。

Sit fur, sit acrilagus . . .
 be+3SG+PRES+SUBJ thief be+3SG+PRES+SUBJ temple robber
 at est bonus imperator (Cic. *Verr.* 5.4)
 yet he.is good general
 ‘Though he is a thief, though he is a temple-robber . . . he is a good
 general’

彼は泥棒だが、彼は寺の強盗だが…彼はかなりの戦略家だ。

Quamvis sis molestus, numquam te esse
 although be+2SG+PRES+SUBJ troublesome never you to.be
 confitebor malum (Cic. *T.D.* 2.25.61)
 I.will.confess evil
 ‘Although you are troublesome, I will never admit you to be evil’

あなたが面倒だとしても、私はあなたが悪いことを決して許さないだろう。

イタリア語とスペイン語から類似した例を挙げる。

sia pure come dici tu ma io non vengo
be+3SG+PRES+SUBJ perhaps as say you but I not come
‘It may be as you say, but I’m not coming’

あなたの言うとおりにかもしれないが、私は行かない。

Aunque sea difícil, lo haré
although be+3SG+PRES+SUBJ difficult it I.will.do
‘Although it is difficult, I will do it’

難しいかもしれないが、私はそれをするだろう。

譲歩されていることは主張されておらず、前提されている。そして接続法が用いられている。

5.2.6 未来

ムードが現実{realis}/非現実{irrealis}という観点から叙述される言語において、未来性はしばしば非現実としてマークされる(6.6.1)。未来性は直説法/接続法に関連しない。

ホメロスの時代のギリシャ語では以下の用例だけが主節で未来について言及する接続法の唯一の使用の例である。

ou gár po: toíous ídon anéras, oudé
not for ever such see+1SG+AOR+IND men nor
ído:mai (Hom. *Il.* 1.262)
see+1SG+AOR+SUBJ
‘I have never seen such men, nor shall I see’

私はそのような男たちを見たことがないし、これからも見ないだろう。

しかし時を表す節では過去の出来事について用いられる直説法と共に仮説的な未来の出来事を言及する接続法の幅広い使用がある。

古典ギリシャ語とスペイン語から例を挙げる（それぞれのペアの最初のものは直説法であり、二番目のものは接続法である）。

epeí dé eteleúte:se Dareíos . . . , Tissaphérne:s
when but die+3SG+AOR+IND Darius Tissaphernes
diabéllei tón Kúron (Xen. An. 1.1.3)
slanders the Cyrus
‘When Darius died, Tissaphernes slanders Cyrus’

Darius が死んだとき, Tissaphernes は Cyrus を中傷する.
epeidán dé diaprákso:mai há déomai, hé:kso: (Xen. An. 2.3.29)
when but finish+1SG.AOR+SUBJ what I want I.will.come
‘When I have finished what I want to do, I will come’
私がやりたいことを終えたとき, 私は来るだろう.

Cuando llegó en Inglaterra, vinó a ver-me
when arrive+3SG+PAST+IND in England he.came to see.me
‘When he arrived in England, he.came to see.me’

彼がイギリスに到着したとき, 彼は私に会いに来た.

Cuando se termine la guerra, volveré a
when REFL finish+3SG+PRES+SUBJ the war I.will.return to
Inglaterra
England
‘When the war ends, I will return to England’

戦争が終わったら, 私はイギリスに帰るだろう.

類似した例が場所を表す節にもある.

Dondequiera que era, me escribía
wherever that be+3SG+IMPF+IND to.me he.wrote
‘Wherever he was, he would write to me’

彼はどこにいても私に手紙を書いたものだ.

Dondequiera que yo esté, te escribiré
wherever that I be+1SG+PRES+SUBJ to.you I.will.write
‘Wherever I am, I will write to you’

私はどこにいてもあなたに手紙を書くでしょう.

古典ギリシャ語では接続法は未来を言及する現実的な条件の節 (8.3 を参照)
の帰結節 (if 節の) でも用いられる場合がある (もっとも帰結節では未来の直説

法もまた可能ではある).

eán toúto poié:is, hamarté:seis
if this do+2SG+PRES+SUBJ, err+2SG+FUT+IND
'If you do this (should do this), you will be wrong'
もしあなたがこれをするならば, あなたは悪いでしょう.

5.2.7 条件法

接続法は多くの言語では条件節の中で用いられる. 例えばラテン語では現在の接続法は次のように用いられる.

Si hoc facias, erres
if this do+2SG+PRES+SUBJ err+2SG+PRES+SUBJ
'If you did/were to do this you would be wrong'

もしあなたがこれをするなら, あなたが悪い.

しかし 'モーダルな時制' (1.4.4, 8.2)も通常含まれる. そのような理由から例文における接続法の詳細な議論が 8.3.2 で行われる.

5.2.8 他のタイプ

スペイン語には次の二つの用例の違いがある.

El que asasinó a Smith está loco
he that kill+3SG+PAST+IND to Smith is mad
'The man who killed Smith is mad'

スミスを殺した男は狂っている.

El que asasinara a Smith está loco
he that kill+3SG+PAST+SUBJ to Smith is mad
'The man who killed Smith is mad'

スミスを殺した男は狂っている.

これらの正確な解釈と asasinara という形式の正確な?位置づけはいくつか議論がされているが(Rivero1975,1977;Rojas1977を参照), しかし最初の例は特定な人を言及しているようであり, 一方二番目の例は精神異常の状態で殺すことと関連する '誰でも' の意味を持っているようである. パラフレーズすると, 'ある人 (実際にスミスを殺した人) は狂っていると私は結論付ける' と 'スミスを殺す人は誰でも異常さを表していると私は結論付ける' となる.

接続法は不定性のため用いられているようである。そのような不定性は非現実として扱われる。なぜなら特定の人間が殺人者であると主張していないからである。

わずかな違いは以下の用例における接続法の使用にある。

Busco un empleado que hable inglés
I.look.for an employee who speak+3SG+PRES+SUBJ English
'I'm looking for an employee who speaks English'

私は英語が話せる従業員を求めている。

Busco a un empleado que habla inglés
I.look.for to an employee who speak+3SG+PRES+IND English
'I'm looking for an employee who speaks English'

私は英語が話せる従業員を求めている。

最初の用例は、英語が話せる従業員（誰か）を私が求めていることを意味している。二番目は実際に英語が話せる特定の従業員を求めていることを意味している（しかし用例に見るように、その違いは特定の目的語の前の前置詞 *a* が用いられることによってマークされている）。類似した構造がイタリア語にもある(Lepschy and Lepschy 1977:229)。

Cerco una ragazza che sappia cinese
I.look.for a girl who know+3SG+PRES+SUBJ Chinese
'I am looking for a girl who speaks Chinese'

私は中国語が話せる少女を求めている。

Cerco a una ragazza che sa cinese
I.look.for a girl who know+3SG+PRES+IND Chinese
'I'm looking for a girl who speaks Chinese'

私は中国語が話せる少女を求めている。

これもまた不定性の観点から見ることはできるが、しかしまたこれは‘関係節の目的{relative purpose}’ (5.3.2)に関する接続法の使用と比較され、また願望 {wanting} を表す補文のなかで比較される場合がある。後者のものと比較すると主節の動詞によって決定され支配されるということが示唆される。より論点を明らかにするには、英語の会話体などが話し手が求めているものの部分であるから、関係詞節全体が動詞の意味論的スコープの中にあるということが言われるかもしれない。反対に直接法は関係詞節が動詞のスコープの中にあることを示している。同様にラテン語で間接話法の補文節の中にある関係詞節は、

仮に関係詞節が言われたことの部分をなさなければ(5.1.2 参照), 直接法の中にあるということが思い出されるかもしれない. これもスコープに関する事柄として見るができる一直接法は関係詞節が報告されたことの部分ではないということを示している.

5.3 出来事のモダリティ

接続法が用いられる出来事のモダリティのほとんどは指令 {Directives} の他にモーダルな動詞によって表されたものと非常に異なる。

5.3.1 指令

接続法は弱い義務 {weak obligation} という拘束的な概念を表現するのに用いられる (英語で **must** の法的過去としての等価物である *should* によって表現される(2.1.5)).

Italian

Sapessi che lusso
know+2SG+PRES+SUBJ that grand
'You should see how grand'

イタリア語

あなたはどんなに大きいか見るべきだ。

Latin

Iniurias fortunae . . . defugiendo relinquo (Cic. *T.D.* 41)
 wrongs of.fortune by.fleeing leave+2SG+PRES+SUBJ
 ‘Flee from and leave behind you the blows of fortune’

ラテン語

財産などというものから逃げ出して、離れたままでいなさい。

Latin

Sed maneam etiam, opinor (Pl. *Trin.*1136)
but remain+1SG+PRES+SUBJ still, I.think
'But I should still stay, I think'

ラテン語

しかし私はまだ留まるべきだと私は思う。

まったく異なる言語である Baluchi 語(Bybee et al. 1994:195)の例を 4.1.1 で挙げた.

a ešā bybart

3SG 3PL take away+3SG+SUBJ

‘He ought to take them away’

彼はそれらを持ち去らなければならない.

しかしこれらのうちいくつかについて問題がある. 二人称主語に関しては, ‘丁寧な命令’ (5.3.2 で議論される) として扱われるものと常に容易く区別されるものではないし, 一人称と三人称の主語に関しては指令 {jussives} と区別するのは容易くない (‘一人称・三人称命令 {first and third person imperative}’). これらは 5.4.1 で議論される. スペイン語から例を挙げる.

Tome su libro

take+3SG+PRES+SUBJ your book

‘Take your book’

本を持ちなさい.

Hablemos de otra cosa

talk+1PL+PRES+SUBJ about other thing

‘Let’s talk about something else’

何かについて話しましょう.

Que entre

that enter+3SG+PRES+SUBJ

‘Let him come in’

彼に入らせよう.

ラテン語で用いられる未完了 {imperfect} と過去完了 {pluperfect} の接続法は過去においてなされるべきことについて言及する. ここでこれらは命令 {imperative} と指令 {jussive} とは明確に区別される. そしてこれらは本質的に遂行的 {performative} であり, 現在に関連する.

sed tu dictis, Albane, maneres

(Virg. *Aen.* 8. 643)

but thou to.words Alban remain+3SG+IMPF+SUBJ

‘But thou, Alban, shouldst have kept thy word’

しかしあなた, Alban はあなたの言葉を守るべきだったのに.

Adservasses hominem (Cic. *Verr.* 65)

keep+2SG+PLUP+SUBJ man

‘You should have kept the man’

あなたはその人を守るべきだったのに.

ここに存在すると思われるそれぞれの機能は‘慎重さ {deliberative}’であり, 彼らがすべき (あるいはしなければならない) ことを慎重さをもって尋ねている.

Latin

Quid agam iudices? (Cic. *Verr.* 5.2)

what do+1SG+PRES+SUBJ jurymen

‘What am I to do, gentlemen of the jury?’

私は何をすべきでしょうか? 陪審員の皆様.

Greek

ó:moi egó pá:i bó:~? (Eur. *Hec.* 1056)

alas I where go+1SG+PRES+SUBJ

‘Ah me! Where shall I go?’

ああ, 私としたことが! 私はどこに行くべきなのか?

これらもまた過去について言及しうる.

haec cum viderem, quid agerem . . . ? (Cic. *Sest.* 19)

these when I.saw what do+1SG+IMPF+SUBJ

‘When I saw this, what was I to do?’

私がこれを見たとき, 私は何をすべきだったか?

指令 {directives} と従属節について言われていることはそれほど多くはない. 現代ギリシャ語は定動詞を伴って接続詞を使用するにもかかわらず(4.1.4 の例を参照), 例えばラテン語 *licet* ‘it is allowed’ や *oportet* ‘it is necessary’ の後のようにほとんどのヨーロッパ言語では不定詞は許可と義務の表現の後で用いられる(7.4.1 を参照).

しかしいくつかの言語ではそのような構造に関して接続法を用いる. これは西 Nilotic 諸語(Bavin1995 : 112-13)がそうである. したがって Acholi 語では接続法は許可に関する *wek* の後, 義務に関する *myero* の後, 禁止に関する *gwok* の後に用いられる. *myero* の例は次のようなものである.

myero a-ngwec-i
must I+SG-run-SUBJ
'I must run'

私は走らなければならない。

5.3.2 目的

ラテン語や古典ギリシャ語において、目的 {purpose} を表す節は接続詞に接続法を足すことでマークされる。

Haec acta res est ut ii nobiles
this done thing is that those nobles
restituerentur in civitatem (Cic. *Rosc. Am.* 51.1 49)
be.restored+3PL+IMPF+SUBJ in state

これらの貴族が身分を取り戻すためにこれがなされた。

tón gár kákon aeí déi kolázein, hin'
the for bad always it is necessary to.punish in.order.that
ameino:n e:i (Plat. *Leg.* 944d)
better be+3SG+PRES+SUBJ

'For we must punish the bad man that he may be better'

なぜならその悪い人がよくなるように罰さなければならない。

同じ種類の構造がスペイン語とイタリア語で用いられている。

Le presté el dinero para que pudiese
him I.lent the money in order that can+3SG+IMPF+SUBJ
comprar su billete
buy his ticket
'I lent him the money in order that he could buy his ticket'

彼がチケットを買えるように私は彼にお金を貸した。

ti scrivo affinché tu capisca la situazione
you I.write in order that you understand+2SG+PRES+SUBJ the situation
'I am writing to you so that you understand the situation'

あなたが状況を理解できるように私はあなたに書いている。

否定的な目的を表現する通常の方法は同じ接続詞と共に従属節に否定を用いるだけである。しかしラテン語は概して *ut* の代わりに *ne* を用いる (また稀に

ut ne のみ).

Dolabella, ne collum tonsori committeret, tondere
Dolabella lest neck to.the.barber entrust+3SG+IMPF+SUBJ to.shave
filias suas docuit (Cic. *Tusc.* 5.20.58)
daughters his taught
‘So that he should not entrust his neck to a barber, Dolabella taught his daughters how to shave’

彼は自分の首を床屋に任せないようにするため, Dolabella は彼の娘に剃り方を教えた.

同様に古典ギリシャ語では通常, 従属節中で接続詞の後で否定の *mé* を有する. しかしホメロスの時代のギリシャ語では *mé* だけを用いる場合がある.

apóstiche mé: ti noé:se:i (Hom. *Il.* 1.522)
depart lest something notice+3SG+AOR+SUBJ
‘Depart lest she notices anything’

彼女が何も気が付かなければ出発しなさい.

ラテン語の *ne* と古典ギリシャ語の *mé* はここでは接続法に関連しており, 一方それらの他の否定である *non* と *ouk* は概して直説法で使われる. そのような理由からこれらの否定形式をそれぞれ非現実 {irrealis} と現実 {realis} として扱いたくなるが, しかしそれらの使用に関する条件は複雑であり, 両方の言語において一般的な規則の例外がある (特に 5.2.3 の ‘結果{realis}’ に関する接続法を表す *non* の使い方を参照せよ). それらを詳細に扱うのは本書の範囲を超えることだが, 畏怖 {fears} (5.3.3) と否定命令 {negative imperatives}, 指令 {jussives} (5.4.2) に関する使用については取り扱う.

目的 {Purposive} はラテン語の *dum* ‘until’ のように ‘in order that’ と解釈するよりも他の接続詞として表わされる場合がある.

Expecta . . . dum Atticum conveniam (Cic. *Att.* 7. 1.4)
wait until Atticus meet+1SG+PRES+SUBJ
‘Wait until I meet Atticus’

私が Atticus に会うまで待て.

目的という概念がなければ直接法が用いられる.

Dum anima est, spes esse dicitur (Cic. Att. 9.10.3)
 while life be+3SG+PRES+IND hope to.be is.said
 ‘It is said that while there is life there is hope’

命ある限り希望はあると言われている。

目的はまた関係詞節に接続法を足すことで表わされる（伝統的には‘関係節の目的 {relative purpose}’とされている）。

Scribebat tamen orationes, quas alii dicerent (Cic. Brut. 6.206)
 he.wrote however speeches which others say+3PL+IMPF+SUBJ
 ‘However, he wrote speeches for others to give’

しかし彼は他人に与えるためにスピーチを書いた。

ここで *quas* は *ut...eas* ‘so that...them’ の機能を有する。慣用的なラテン語は従属節に代名詞があるとき、この関係詞の構文を要求する。

わずかに異なるがこの文脈で興味深いのは、Tigrinya 語(Palmer 1962:38)における構文である。そこで関係詞の後に未完了相が続く（従属節では通常の形式である）。

qwal’a zihəqqäf, zisənkäl bəhuq may
 child REL+it.be.nursed, REL+it.be.cooked dough, water
 ziməsa’ zahaqqwänsäba
 REL+it.be.drawn REL+it.be.churned milk
 ‘A child to be nursed, dough to be cooked, water to be drawn, milk to be churned’

大事に育てられた子供，料理された練り粉，汲まれた水，かき回されたミルク。

5.2.8 で ‘不定性{indefiniteness}’ の観点から扱われるいくつかの例は(‘look for’ の後の例)，目的の観点からもまた扱われる場合がある。

目的の節が指令{directives}の補文と共通する部分が多いということは注目に値する。したがって接続法と共に用いられるラテン語の *ut* と否定の *ne* は ‘in order that’ を表すために使われ，かつ注文や要求の動詞の後でも使われる。次の用例を比較せよ。

Caesar singulis legionibus singulos legatos et quaestorem
Caesar to.single to.legions single legates and quaestor
praefecit ut eos testis quisque suae virtutis
put.in.charge that them witnesses each of.his virtue
haberet (Caes. *B.C.* 1.52)
have+3SG+IMPF+SUBJ

‘Caesar put the legates and the quaestor each in charge of a legion so
that everyone might have them as witnesses of his valour’

シーザーはすべての人が彼の公正さの目撃者として将軍補佐官と審問官
を持つために支配した地域に将軍補佐官と審問官をそれぞれ置いた.

Rogat et orat Dolabellam ut de sua provincia
he.asks and he.begs Dolabella that from his province
decedat (Cic. *Verr.* 1.29.72)
withdraw+3SG+PRES+SUBJ

‘He asks and implores Dolabella to leave his province’

彼は Dolabella に彼の領土を離れるよう求め, 懇願した.

そしてまたロシア語でも不定詞は二つの節の主語が同じとき ‘欲望{want}’
と共に用いられ, そして目的のために用いられる. 一方過去時制を伴った *chtoby*
(‘that’ に *-by* という小詞を足す) は主語が異なるとき (*-by* という小詞を伴っ
た過去時制はしばしば ‘接続法’ と呼ばれる – 8.5 を参照) 両方のタイプとして
用いられる.

on khochet plavat’
he wants swim+INFIN
‘He wants to swim’
彼は泳ぎたい.
my prishli posetit’ bol’ novo
we have.come visit+INFIN patient
‘We’ve come to visit the patient’
私たちは患者を訪問しに来た.
ja khochu, chtoby vy bol’she eli
I want that-by you more eat+PAST+M.SG
‘I want you to eat more’
私はあなたがもっと食べることを望む.

chto-by nikto ne znal ob etom, nado molchát'
 that-by no-one not know+PAST+M.SG about this necessary be.silent
 'So that no-one should know about this, we must be silent'

誰もこのことについて知らないで、私たちは沈黙しなければならない。

Ngiyambaa 語(Donaldson1980:2801)には、目的を表す節のマーカー（‘目的{puroside}’は義務{Obligative}のマーカーとしても用いられる）が‘やり方を知っていること{knowing how}’/‘覚えていること{remembering}’そして‘欲望{wanting}’を表す動詞と共に従属節でも用いられるという類似した特徴がある。

ṇadhu dhi:rba-nha guruṇa-giri
 I+NOM know-PRES swim-PURP
 'I know how to swim'

私は泳ぎ方を知っている。

bura:y wagayma-giri-ṇinda gaṛa
 child+ABS play-PURP-CARIT be-PRES
 'The child wants to play'

その子供が遊びたがっている。

これは驚くべきことではない。なぜなら目的を表す節は主語が欲したり、意図することを表すからであり、それらは以下のように語彙の項目によって表わされる意図{intention}に関する補文の意味の面で非常に密接だからである。

He did it hoping/intending that they would come
 He did it so that they would come

彼は彼らがやって来るのを望みながらそれをした。

彼は彼らが来るようにそれをした。

5.3.3 願望，畏怖など

接続法は願望{wishes}と畏怖{fears}に用いられる。‘願望{Desiderative}’という術語は前者として使われるが（置き換え可能なものとして‘意志{Volitive}’があるが、これは異なる意味で用いられてきた—3.3.1を参照）、しかし後者については認められる術語はないものの、ラテン語からの形態の‘畏怖{Timitive}’になるだろう(1.7参照)。

主節における未来の願望に関して、例えばラテン語やイタリア語、ポルトガ

ル語では現在接続法が用いられる.

Ut illum di . . . perduint (Pl. *Aul.* 785)
that him gods destroy+3PL+PRES+SUBJ
'May the gods destroy him!'

神が彼を破滅させん!
Dio vi benedica
God you bless+2PL+PRES+SUBJ
'May God bless you'
あなたに神の祝福あれ.

Venha a dia
come+3SG+PRES+SUBJ the day
'May the day come!'

その日が来ますように!

5.1.1 で記したように Fula 語でも用いられる.

njuutaa balde
be long+2SG+SUBJ in.days
'May you live long!'
あなたが長生きしますように!

現在と過去に関する不可能な願望は, ラテン語とイタリア語では未完了の接続法によって表わされる.

modo valeres (Cic. *Att.* 9.22)
only be well+2SG+IMPF+SUBJ
'If only you were well'
あなたが健康でさえいてくれたら.
私が来れさえすれば.

同様に過去に関する不可能な願望は, ラテン語では大過去{pluperfect}によって表わされる.

utinam ne . . . tetigissent litora puppes (Catull. 64.171)
that not touch+3PL+PLUP+SUBJ shores ships
'Would that their ships had not touched the shore'
彼らの船が接岸しなければよかったのに.

しかしヨーロッパ諸語では一般的に, 願望は条件法と同じ形式を持っており

(これは上記の用例にも当てはまる), 従って願望は 8.4 で詳細に検討される.
従属節の中で願望と希望{hoping}の動詞の後, スペイン語は通常異なる主語があるとしても接続法を要求する(Givón 1994:286).

Quiero que venga

I.wish that come+3SG+PRES+SUBJ

‘I wish that he would come’

私は彼が来ることを望む.

Espero que venga

pronto

I.hope that come+3SG+PRES+SUBJ soon

‘I hope he comes soon’

私は彼が早く来ることを望む.

イタリア語も同様である.

Voglio che venga

I.wish that come+3SG+PRES+SUBJ

‘I wish that he would come’

私は彼が来ることを望む.

Spero che Ugo ritorni

sabato

I.hope that Ugo return+3SG+SUBJ Saturday

‘I hope that Ugo comes back on Saturday’

私は Ugo が土曜日に戻ることを望む.

ラテン語は対格と不定詞の構文(7.4.1 を参照), あるいは欲望{wanting}の接続法のいずれかを有する場合がある.

Ut mihi aedis aliquas conducatur

volo

(Pl. Merc. 560)

that to.me house some buy+3SG+PRES+SUBJ I.wish

‘I want him to rent a house for me’

私は彼が私に家を貸してくれることを望む.

Nolo me in tempore hoc videat

senex (Ter. And. 819)

I don’t wish me in time this see+3SG+PRES+SUBJ old.man

‘I don’t want the old man to see me now’

私はその老人がいま私に会うことを望まない.

ラテン語で ‘hope’ が無ければ，対格と不定詞は通常の構文となる(7.4.1 参照).

畏怖{fears}は通常スペイン語のように従属節において畏怖を表す動詞に接続法を足すことで表わされる。

Temo que haya muerto
I.fear that have+3SG+PRES+SUBJ died
'I fear that he has died'

私は彼が死ぬのを恐れている。

ラテン語と古典ギリシャ語は接続法に関して単純に *ne* と *mé* を要求する（これらは否定の目的{negative purpose}のために用いられた、おそらく‘非現実{irrealis}’の形式である－5.3 参照）。

Timeo ne laborem augeam (Cic. *Leg.* 1.4)
 I.fear work increase+1SG+PRES+SUBJ
 ‘I am afraid that I shall increase my work’

私は自分の仕事が増えることになるのを恐れている。

Dédoika gár mé: oud' hósion é:i . . . apagoreúein
I.fear for lest not righteous be+3SG+PRES+SUBJ . . . to refuse
(Plat. *Rep.* 368B)

なぜなら私は拒絶することが正しくないということを恐れているからだ。

しかし古典ギリシャ語には興味深い用法がある。そこでは畏怖の表現が怖れを表す動詞無しに単純に否定の *mé* によって先行される接続法で示されている。しかししばしばこの表現は英語の ‘I’m afraid that’ のように歓迎されざる可能性を表しているに過ぎない。

mé: dé: né:as hélo:si (Hom. *Il.* 16.128)
lest indeed ships take+3PL+AOR+SUBJ
'I'm afraid they'll take the ships'

彼らが船に乗ることを私は恐れている。

allá mé: ou tóut' e:i khalepón . . . thánaton
but lest not this be+3SG+PRES+SUBJ difficult death
ekphugeín (Plat. *Ap.* 3ga)
to.avoid
'I suspect it is not the avoidance of death that is the difficulty'

困難なことは死を避けることではないと私は疑っている。

また ‘恐らく {perhaps}’ という意味に過ぎない場合もある。

allá mé: toúto ou kaló:s ho:mologé:samen (Plat. *Men.* 89c)
but lest this not well agree+1PL+AOR+SUBJ
‘Perhaps we have not fairly conceded this’

恐らく私たちはこれを公正に認めなかった。

mé: soús diaphthéire:i gámos (Eur. *Alc.* 315)
not your ruin+3SG+PRES+SUBJ marriage
‘She may ruin your marriage’

彼女はあなたの結婚を壊すかもしれない。

ムードマーカーが無いにも拘わらず To’aba’ita 語(Ausutonesian, Solomon Islands-Lichtenberk 1995:294-8)にも類似したものがある。そこでは認識的な不確実性を表すが、また懸念をも表す形式がある (Lichtenberk は ‘懸念 {apprehensional}’ と呼び、またそれを ‘lest’ と訳した)。これも主節で用いられ、従属節では怖れを表す動詞の後に続き、また否定的な目的に関するものである。

ada keka fanga sui na’a
lest they+SEQ eat COMPLET PERF
‘They may have finished eating’ (the speaker is worried about getting food)

彼らは食べ終わったかもしれない (話し手は食料の獲得を心配している)。

nau ku ma’u ‘asia na’a ada laalae to’a baa ki keka
I I+FACT fear very lest later people that PL they+SEQ
lae mai keka thaungi kulu
go hither they+SEQ kill us+INCL
‘I am scared the people might come and kill us’

私はその人が来て私たちを殺すかもしれないと恐れている。

nau ku agwa ‘i buira fau ada wane ‘eri ka riki nau
I I+FACT hide at behind rock lest man that he+SEQ see me
‘I hid behind a rock so that the man might not see me’

私はその男が私を見ないようにその岩の後ろに隠れた。

Diyari 語(Australia-P.Austin1981:225)にも類似した例がある。

畏怖と願望は認識的なものとして最も扱われることが論じられ得る。なぜならそれらは実現しなかった出来事というよりも命題に対する態度を示しているからである。確かに Givón は希望{hopes}と畏怖を‘認識的な不安{epistemic anxiety}’とした。しかし欲望{wanting}は感情が出来事の方に向いているという点で異なるように見える。従って指令{directive}の一種である拘束的なもの{deontic}として扱われるべきであろう。‘願望{wish}’と‘欲望{want}’の比較は二つの方法においてこの点を証明するかもしれない。第一に、願望の表現は非常に明確ではないにも拘わらず、誰かに求められていることを言うことは、しばしば行動に関する指示{direction}であるということである。第二に、畏怖や希望同様、願望は現在や未来だけではなく過去についても言及し得るが、一方欲望はそれができない。

I wish John had come

I fear John came

I hope John came

??I want John to have come

私はジョンが来たならよかったのに。

私はジョンが来るのを恐れている。

私はジョンが来たならいいのに。

私はジョンが来たならよかったのに。

(最後の例は不可能ではないにしろ、非常に不自然である。) これら二つの特徴は欲望が拘束的なものとして扱われるべきであることを示唆しており、その他は認識的なものとして扱われるべきであることを示唆している。

しかし欲望{wanting}と願望{wishing}が必ずしも容易く区別されるわけではないということを認めなければならない。Givón(1994:283)はスペイン語の動詞 QUERER について二つの解釈を与えている。

Quiero que estudies más

I want/wish that study+2SG+PRES+SUBJ more

?‘I want you to study more’

‘I wish you would study more’

私はあなたがもっと勉強することを望んでいる。

私はあなたがもっと勉強することを望んでいる。

疑問符の箇所は不定詞の補語がスペイン語よりも‘より強い操作{manipulation}’であるが、スペイン語は代わりになるものを持たない。

5.3.4 結果

ラテン語で結果{results} (伝統的には‘結果{consecutive}’と呼ばれている)を表すために用いられる構造は、目的{purpose}を表すために用いられるものとほぼ同じものである。節が肯定であるなら、*ut* を接続法に加えれば両方の場合に用いられる。否定の節であるなら目的の節は *ut* の代わりに *ne* を有するが(5.3.2), 結果{consecutive}の節は *ut* の後に否定の *non* を従える。以下に例を挙げる。

Adeo turbati erant. . . ut quosdam consul manu ipse
so disturbed they.were that some consul by.hand self
reprehenderit (Liv. 34.14)
seize+3SG+PERF+SUBJ

‘They were so disturbed that the consul himself seized them by the hand’

彼らはとても散在していたので、執政官は自ら彼らを手で掴んだ。

Vulneribus confectus ut am se sustinere non posset
by.wounds weakened that still self hold.up not was.able (Caes. B.G. 2.25)
‘So weakened by his wounds that he could no longer hold himself up’

彼は傷によってとても弱っていたので、もはや持ちこたえることができなかった。

ここでの接続法の使用は研究者を悩ませるものである。なぜなら結果は本質的に事実であり、従って直接法が予想されるからである。さらにこの文脈の中で間違いなく‘現実{realis}’の否定(5.3.2)は接続法と共に現れる。Moore(1934:108)は「結果は非現実ではなく、結果的に結び付けられたもの{causally connected}であり、論理的に主節に従属しているということを接続法が示している」とした。その代り、接続法の本来の機能は従属関係をマークすることなので、ここで(以下参照)例証されていることは正確であるということが単純に論じられ得る。Hamp(1982:118)は「接続法の一般化はラテン語の現象であろう」とコメントしている。これは厳密には正しいかもしれないが、若干誤解を招く部分がある。なぜなら目的と結果を表す節の類似性は他でも見られるからである。英語でさえも *so that* は、目的を表す節は *should* が含まれる場合があるが、両方のタイプを表す。

He worked hard so that he became rich
He worked hard so that he should become rich

彼はお金持ちになるために懸命に働いた。
彼はお金持ちになるために懸命に働いた。

最初の文は二つの意味に関して曖昧である。さらに驚くことに、オーストラリア諸語には目的の使用について類似性がある。これは 3.5 でいくつか議論されたが、Yidiny 語(Dixon1977:3456)から二つの例を再び挙げることは、ためになるかもしれない。ひとつは目的を表しており、もうひとつは‘自然な結果{natural result}’を表している。

daɖa ɖuɖu:mbu gaɾbaɾbaŋalŋu ŋuɖu wawa:lna
child+ABS aunt+ERG hide+PAST not see+PURP
‘Auntie hid the child so that it should not be seen

おばさんは子供が見えないようにその子を隠した。

ŋayu burawuŋal duga:l ɖinbiɖinbi:lna
I+SUBJ Burawugal+ABS grab+PRES struggle+RED+PURP
‘I grabbed the water sprite woman and as a result she kicked and struggled’

私は水の妖精の女を掴み、結果として彼女は蹴り、もがいた。

目的と結果を表す節は、ひとつは意図された結果{intended result}を表し、もうひとつは実際の結果{actual result}を表すという点で類似しているという観点から眺めることができる様々な言語において目的と結果が密接に関連し、識別が難しい概念であると信じられていることに関する良い例がある。目的の *u* と結果の *ut* が歴史的に異なる起源を持っているという Hamp(1982)の議論が正しいとしても、否定の場合を除いてそれらが今では同じものとして見做されるということは重大なことに違いない。

しかし意図された結果と実際の結果の対立は接続法と直接法の違いによってマークされると思うかもしれないが、しかし目的を表す節と結果を表す節の主たる違いは、*ne* と *non* といった二つの否定によって成されるのである。それは接続法/直接法以上に、まるでそれらが意図された結果を表す‘非現実{irrealis}’と実際の結果を表す‘現実{realis}’を識別するマーカーであるようである。

5.4 命令と指令

命令{Imperative}と指令{Jussive}は 3.4 で簡潔に議論されたが、そこでそれらはモーダル体系の術語であった。それらは直接法/接続法というモードを持つ言語においても起るが、この点でモードの体系は厳密には二元体ではない。

5.4.1 形態論と統語

伝統的な文法ではラテン語や古典ギリシャ語における二人称と三人称の‘命

令{imperative}'を認めている(後者は指令{Jussive}の例である—3.4を参照).
古典ギリシャ語の‘命令’は‘loose’という動詞について以下のように挙げられる.

	<i>singular</i>	<i>dual</i>	<i>plural</i>
2	lú-e	lú-eton	lú-ete
3	lú-eto:	lú-eto:n	lúonto:n

古典ギリシャ語から例を挙げる.

all' ei dokéi, pléo:men, hormástho: táchus
but if it.seems sail+1PL+PRES+SUBJ set.forth+3SG+PRES+JUSS swift
(Soph. Phil. 526)

‘If thou wilt, let us sail and let him set forth with speed’

もしあなたが弱っているのなら, 船を出そう. そして速度を出して彼を先にやろう.

epímeinon, Aré:ia teúkhea dúo: (Hom. Il. 6.340)
wait+2SG+AOR+IMP of.Ares equipment put on+1SG+PRES+SUBJ

‘Wait, let me put on my war harness’

待て, 私に戦用の馬具を身につけさせてくれ.

(しかしこれらは両者とも一人称の指令の機能と共に接続法も含んでいる—5.4.2を参照)

ラテン語と古典ギリシャ語には一人称の命令/指令はないが, 他の言語ではそれらは現れる. Amharic 語からの例が以下に挙げられている. 命令は数だけではなく性によってもマークされる場合がある. 例えば口語のパラダイムにおいて性をマークするセム諸語の多くのように. また命令は古典ギリシャ語やロシア語のようにテンスではなく, アスペクトに関してもマークされている.

3.4で記したように, 命令と指令は従属節や疑問{questions}では通常起こらない. その明確な理由としては, 命令と指令は遂行的{performative}だからである. つまり話し手が実際に命令を与えているということである. しかしこれにはいくつか例外がある. 古典ギリシャ語において従属節での二人称の命令の例が一つあるが, 喜劇の中で現われているので, ことばの遊びかもしれない.

all' oísth' hó drá:son (Ar. Av. 54)
but you.know what do+2SG+PRES+IMP
‘You know what do it!’

何がそれをしなければならないのかをあなたは知っている!

同様に疑問における指令の例がある.

keístho: nómos humí:n (Plato *Legg* 801d)
 lay.down+3SG+PRES+JUSS law for.us
 ‘Shall the law be laid down for us?’

法は我々のために犠牲にされるべきか？

Amharic 語(Ethiopian Semitic-Cohen 1936:179-80)では指令が現れるのは疑問において普通に見いだせる。

ləwsada-w
 take+3SG+JUSS-it
 ‘Must he take it?’

彼はそれを取らなければならないのか？

mən ləwsad
 what take+1SG+JUSS
 ‘What shall I take?’

私は何を取りましょうか？

しかし上記の訳が示しているように、このことはむしろ、これらの指令は恐らく指令{Jussive}としてではなく、ヨーロッパ諸語における接続法以上に拘束的な義務{Obligative}として見做されているということを示している。5.4.2 において指令{Jussive}と接続法の関係に関する更なる議論がある。

同様に命令は拘束的にモーダルなもの(must have など)のように、命令が過去時制について言及できるということは考えられないだろう。しかし Syrian Arabic 語(Cowell1964:36)では過去時制の命令のように極端に見える構文がある—命令と共に完了の形式である KAN ‘to be’ を使っているが、意味としては ‘should have’ である。

kənt kol lamma kənt fəl-be:t!
 be+2SG+PERF eat+IMPF when be+2SG+PERF in.the-house
 ‘You should have eaten when you were at home’

あなたは家にいるとき食べるべきだった。

5.4.2 接続法

イタリア語とスペイン語において接続法は丁寧な命令{polite command}として命令{imperative}の代わりに用いられるが、それは三人称において用いられるのである。

entri pure
enter+3SG+PRES+SUBJ if.you.please
‘Please come in’

どうぞお入りください。

Tome su libro
take+3SG+PRES+SUBJ 3SG+poss book
‘Take your book’

本をお取りください。

しかし接続法はまた、5.3.1 で記したように弱い義務を表すために二人称主語と共に用いられる。

ラテン語と古典ギリシャ語では接続法は否定の命令{negative commands}で用いられる。もっともラテン語と古代ギリシア語は命令法もまた使うことがあるが、再び否定の *ne* と *me* の例を挙げる。

Latin

Ne sis patruus mihi (Hor. Ser. 2.3.88)
not be+2SG+PRES+SUBJ uncle to.me
‘Don’t come the uncle with me’

ラテン語

私と一緒に叔父が来ないようにしてくれ。

Greek

mé: thé:sthe nómon me:dena (Dem. 3. 10)
not place+2SG+AOR+SUBJ law none
‘Do not pass any law’

ギリシャ語

いかなる法律も通すな。

接続法はスペイン語でも同様に用いられる（イタリア語では用いられない）。

No hablas con él
not speak+2SG+PRES+SUBJ with him
‘Don’t talk to him’
彼に話しかけるな。

従属節に関して、ラテン語は接続詞の *ut* を伴って、或いは稀だが伴わずに用いる。否定については *ne* を用いる。

Rogat et orat Dolabellam ut de sua provincia
he.asks and he.begs Dolabella that from his province
decedat

(Cic. *Verr.* 1.29.7)

withdraw+3SG+PRES+SUBJ

‘He asks and implores Dolabella to leave his province’

彼は Dolabella に彼の領土を離れるよう頼み, 懇願する.

Oppidanos hortatur, moenia defendant

(Sall. 7.56)

townsmen he.urges walls defend+3PL+PRES+SUBJ

‘He urges the townsmen to defend the walls’

彼は町内の人にその壁を守るよう促している.

sisque imperavit ne quod omnino telum in hostes
and.to.his.men ordered that.not any altogether weapon in enemies

reicerent

(Caes. *B.G.* 1.46.2)

throw.back+3PL+IMPF+SUBJ

そして部下にすべての敵に対して飛び道具を撃ち返さないように命令した.

しかしいくつかの動詞, その中でも注目に値するのが IUBEO ‘I order’ に関しては対格と不定詞が用いられる—7.4.1 参照.

cum . . . eos . . . suum adventum expectare

since them his arrival to.wait.for+PRES+INFIN

iussisset

(Caes. *B.G.* 1.27)

he.had.ordered

‘since he had ordered them to wait for his arrival’

彼は彼の到着まで待つように彼らに命令したからだった.

イタリア語とスペイン語には非常に類似した接続法の用法がある.

Gli hanno ordinato che tacesse

to.him they.have ordered that be.quiet+PAST+SUBJ

‘They ordered him to be quiet’

彼らは彼に静かにするよう命令した.

Le mandaron que les-siguiera

him they.ordered that them-follow+3SG+PRES+SUBJ

‘They told him that he should follow them’

彼らは彼に自分たちについて来るべきだと話した.

しかし両言語では不定詞が使われる場合もある.

Gli hanno ordinato di tacere
to.him they.have ordered PREP be.quiet+INFIN
'They ordered him to be quiet'

彼らは彼に静かにするよう命令した.

Le mandaron seguir-les
him they.ordered follow+INFIN-them
'They ordered him to follow them'

彼らは彼に自分たちについて来るべきだと話した.

接続法に取って代わられる構文としての不定詞の構文の用法は 7.4.1 で詳細に議論されるであろう.

接続法は(概念的に) 指令{jussive}としても同様に用いられる. 一人称の例は古典ギリシ語とスペイン語からのものである.

all' ei dokéi, pléo:men, (Soph. Phil. 526)
but if it.seems sail+1 PL+PRES+SUBJ
'If thou wilt, let us sail'

もしあなたが弱っているなら出航しよう.

Levantemo-nos
raise+1 PL+PRES+SUBJ-1 PL+REFL
'Let's get up'

起きよう.

イタリア語とスペイン語の三人称の例は以下のものである.

Che venga anche lui
that come+3SG+PRES+SUBJ also him
'Let him come too'

彼にも来させろ.

Que entre
that enter+3SG+PRES+SUBJ
'Let him come in'

彼に入らせろ.

非ヨーロッパ諸語において指令としての接続法の使用はすでに Hausa 語, バ

ンツー諸語である Swahili 語と Luvale 語について例証した. 5 章のはじめと 5.1.1 の部分から再び例を挙げる.

haa njahen
HAA go+1PL+SUBJ
'Let's go'
行こう.
ni-pend-e
I-love-SUBJ
'Let me love'
私を愛せ.
va-iz-e (veze) waxi
they-come-SUBJ quickly
'Let them come quickly'
彼らを早く来させろ.

5.4.1 のセム語では指令に関するいくつかの議論があった. 実際に形式的にそして概念的に指令{Jussive}として扱われ得る形式は時には接続法のようにであり, また数名の研究者によって接続法として扱われている. 特にそれらは従属節で起こる.

したがって Syrian Arabic 語について Cowell(1964:345ff)は, 以下のように願望法{optative} (つまり 指令{Jussive}) として機能する場合がある Amharic Jussive と類似した形式について '接続法' という術語を用いている.

n-rūh ʕas-sinama
1PL-go+SUBJ to.the cinema
'Let's go to the cinema'
映画に行こう.

この '接続法' は '奨励{exhortation}, 願望{wish}, 畏怖{fear}, 意図{intension} などといったものの明白な表現' に関して従属節の中で用いられる. 付け加えて, モーダルなものとして述べられるすべてのものではないが, 'must', 'may', 'be able', 'know how to', 'forget to' やその他多くのものに関して見出される. 用例を挙げる.

ʔana bəddi ʔərzaʕ ʕal-be:t
I I.want I.go+SUBJ to.the-house
'I want to go home'
私は家に帰りたい.

la:zəm ʔufi bwaʃdi
must I.keep+SUBJ to.promise.my
‘I must keep my promise’
私は約束を守らなければならない。

この指令{jussive} (或いは ‘接続法’) はヨーロッパ言語の接続法と似ている点がある。ヨーロッパ言語ではそれが命令の否定として用いられる (Cowell 1964:345).

ruh
go+2SG+IMP
‘Go!’
行け!
la truh
not go+2SG+JUSS
‘Don’t go!’
行くな!

しかし従属節で最も一般的に用いられている形式に関してそこには同一性がない。Tigre 語 (Ethiopian Semitic) では指令は目的のために用いられる (Leslau1945:200).

ʔəttu ʔəgəl lətraʃ
to.him in.order.that complain+3SG+JUSS
‘in order to complain to him.

彼に不満を言うために。

非常に関連性のある言語の Tigrinya 語では、用いられるのは未完了である。 (Leslau1941:142).

məʔənti kət-bälləʃ
in.order.that-eat+3F.SG+IMPF
‘so that she could eat’
彼女が食べられるように。

Amharic 語は通常、間接的な命令で未完了を用いる (Cohen1936:304).

ənd-imatu azzaza
that-they come+IMPF he.ordered
‘He ordered them to come’
彼は彼らに入るよう命令した。

しかし上位節の動詞自体が命令の中にあるなら、指令が用いられうる(Cohen 1936:357).

yəzazwaccaw yəmtu
order.them they.come+JUSS
'Order them to come'
彼らに入るよう命令せよ.

(これは確かに直接的な発話ではなく、直接的な発話は命令{imperative}の‘Come’を要求するだろう)

恐らくこれは Nahuatl 語 (Aztec-Andrews 1975:52,384)において ‘願望法 {optative}’ というムードを記すのに最適な場である。Nahuatl 語は数と人称に関するマーカーを持ち、現在と過去時制の両方を持つ。これは現在と過去に關与する願望 {wishes} について用いられる。しかし Andrew は「命令 {commands} を与えることの目的に関する特別な命令法はない。命令文 {command sentence} と奨励文 {exhortation sentence} は單純に願望の文なのである」と付け加えている。これはより接続法に似ているということと、指令 {jussive} や命令 {imperative} としていたる所で扱われる表現 (願望 {desiderative} も) が接続法だけで指し示されているという言語の例が与えられるということをおそらく示唆している。

5.5 従位接続詞としての接続法

接続法は典型的に従属と関連することが先(5.1)で示唆された。通常そこ（接続法？）には同様に関係した概念的に非現実のいくつかの特徴があり、その上時には単に従属のマーカーのように見える。後期ラテン語の例で見られるように、これはラテン語で次第に当てはまるようになった。

Pugnatum . . . incerto Marte, donec proelium nox
it.was.fought with.uncertain Mars until battle night
dirimeret (Tac. H. 4.35)
break off+3SG+IMPF+SUBJ
'The fight went on indecisively until night broke it off'
夜が戦いを打ち切るまでその戦いは勝負がつかずに続いた。

接続法の使用は、非現実の観点からあらゆる動機が欠如しているように見える場合がある他の例がある．例えばラテン語では単に従属節の異なる種類を区別するために、時々用いられる．例を挙げると接続詞の *cum* は英語の *as* のよ

うに ‘when’ または (理由の) ‘since’ を意味することに用いられ得る.

As I was going to the shop, I saw John

As I was going to the shop, I couldn't wait

私は店に行く途中でジョンと会った.

私は店に行くので待てない.

ラテン語はこれら二つの意味を区別するために直接法と接続法を用いる.

Cum haec leges, consules habebimus (Cic. Att. 5.12.2)

when these read+2SG+FUT+IND consuls we.shall.have

‘When you read this, we shall have consuls’

あなたはこれを読むとき, 私たちは相談しなければならない.

Quae cum ita sint, Catilina, perge quo

which since thus be+3PL+PRES+SUBJ Catiline proceed whither

coepisti (Cic. Cat. 1.5)

you.began

‘Since this is so, Catiline, pursue the course you have begun’

これはそうなので, Catiline, あなたが始めた講座を続けなさい.

しかしここで ‘since’ が分かち合われた知識を示すことと, またこれは非現実によってマークされている前提{presupposition}の他の例であるという議論がなされ得る.

そこにはまた以下の例でムードの対立がある.

Ante quam pro L.Murena dicere instituo, pro

before that for L.Murena speak begin+1SG+PRES+IND for

me ipso pauca dicam (Cic. Mur. 1)

me self few let.me.say

‘Before I begin to speak for L.Murena, let me say a little on my own behalf’

L.Murena の弁護を私が始める前に, 私のために少し言わせてくれ.

Ante quam veniat in Pontum, litteras ad

before that come+3SG+PRES+SUBJ in Pontus letter to

Cn. Pompeium mittet (Cic. Agr. 2.20.53)

Cn. Pompeius he.will.send

‘Before he arrives in Pontus, he will send a letter to Cn. Pompeius’

彼が Pontus に着く前に彼は執政官 Pompeius に手紙を送るだろう.

しかし問題は二番目における接続法の使用ではなく、最初の例における直接法の使用である（未来を言及する両者については 5.2.6 を参照）。それは直接法を保障する出来事の切迫性かもしれない。

同様に Fula 語について Arnott(1970:3056)は接続法は (i) 楽しむこと {enjoying}, (ii) 望むこと {wishing}, (iii) 畏れること {fearing}, 気を遣うこと {taking care}, (iv) 要求すること {requesting}, (v) 許すこと {permitting} あるいは賛成すること {agreeing}, (vi) 引き起こすこと {causing} あるいは取り決めること {arranging} といった動詞と共に用いられるだけではなく、節の他のタイプについても用いられると示している。従って(Arnott 1970:310-11), たとえ節が概念的に現実 {realis} であっても接続法は *haa* ‘until’, *dooke* ‘before’ などを要求する。

be-ŋgaɗay ka remuki haa be-timmina
‘They continue farming until they finish’
 彼らは終わるまでに耕し続けている。
d’ooke be-njottoo, ’o-’yami gorko ’on . . .
‘Before they arrived, he asked the man . . .’
 彼らが到着する前に彼はその人に尋ねた…

同様に Mangarayi 語(Australia-Merlan 1982:178,184)といった非常に異なる言語において、‘非現実 {irrealis}’ とラベルづけされる接頭辞があるが、そこでは認識的モダリティとして用いられるが、それはしばしば唯一従属節のマーカーでもある。

a-ɲani-yug
IRR-talk-AUX
‘He might talk’
 彼は話すかもしれない。
gawa-j muyg jaŋ? ya-ma-ɲ
bury-PAST-PUNCT dog die IRR-AUX-PAST-PUNCT
‘He buried the dog when it died / that died’
 彼は犬が死んだとき / 死んだ犬を埋めた。

5.6 他の可能性

今まで考察したものは直接法の形式のセットと接続法の形式のセットの違いであった。しかし二つのムードのいずれかの中に更なる体系があるかもしれないという可能性は十分あり得る。

Swahili 語(そして他のバンツー諸語も)では、接続法は直接法のようにテンス

ーアスペクトとしてマークされない。そこには現在進行{present continuous}や過去, 未来, 結果{consecutive}, 条件{conditional}などに関する他のセット以外に接続法に関する形式のひとつのセットがある. Swahili 語は英語のモダリティの体系あるいは証拠的なものの体系のように他のモダリティの体系を持たないようである. ここでは非現実{irrealis}のマーカーは一つしかないが, 現実{realis}のマーカーが体系を成しているという点において, モーダル体系に関して見出されるものと反対のものがあるように見える.

Maasai 語(東アフリカー-Tucker and Mpaayei 1955:61ff.,96ff)では少なくとも接続法に関して従属節を作る動詞によって決められているものを除いてマーカーの選択が自由ではないにも拘わらず, 接続法にいくつかのタイプがあるという点において, そこには反対の状況であるように見えるかもしれないものがある. これらの異なる形式は ‘接続法(a)’, ‘接続法(b)’, ‘不定法(a)’, ‘不定法(b)’, そして ‘N-tense’ としてラベル付けされており, そこには (少なくとも) 5つの述部のクラスがある.

- (i) ‘Let’ takes either of the two subjunctives.
 - (ii) Verbs of wanting, liking, disliking, etc. (including ‘ought’), take the N-tense.
 - (iii) Infinitive (a) is used mostly after verbs of motion, but also after verbs of liking, ‘help’, ‘do again’, ‘do in the near future’, ‘start’, ‘repeat’, ‘do early in the morning’.
 - (iv) Infinitive (b) is used with ‘get to do’, ‘know how to’, ‘finish’, ‘be able to’, ‘dare’.
 - (v) Either infinitive (b) or the present tense is used after ‘refuse’, ‘be afraid’, ‘forget’, ‘lack’.
- (i) ‘Let’s’ は二つの接続法のうち, どちらかを取る.
 - (ii) 欲望{wanting}, 好きなこと{likikng}, 嫌悪{disliking}など(‘義務{ought}’も含む)は N-tense を取る.
 - (iii) ‘不定詞(a)’ はほとんど感情を表す動詞の後ろに用いられるが, 好きなことや ‘助ける{help}’, ‘再びする{do again}’, ‘近い未来する{in the near future}’, ‘始める{start}’, ‘繰り返す{repeat}’, ‘早朝にする{do early in the morning}’ といった動詞以外で用いられる.
 - (iv) ‘不定詞(b)’ は ‘させる{get to do}’, ‘やり方を知っている{know how to}’ ‘終える{finish}’, ‘できる{be able to}’, ‘あえてする{dare}’ と共に用いられる.
 - (v) ‘不定詞(b)’ かあるいは現在時制は ‘拒絶{refuse}’, ‘恐れる{be afraid}’, ‘忘れる{forget}’, ‘欠如{lack}’ といった後に用いられる.

6 現実と非現実

多くの言語, とりわけアメリカ原住民やパプアニューギニアの言語においてモードは現実{realis}と非現実{irrealis}といった文法のマーカーの観点から区別されるということが 1.2.1 で記された. その違いは類型論的範疇の**現実と非現実**の両マーカーがそうであるように, 基本的には直接法と接続法の違いのようなものであるが, そこには章を分けて議論するのに十分は違いがある. しかしそれらには明確な違いが常にあるわけではない—この議論については 7.1 を参照せよ.

6.1 結合的にマークすることと非結合的にマークすること

現実と非現実のマーカーの機能には基本的に二通りある. ある言語ではそれらの主たる機能は他の文法的範疇と共起することである. またある言語では現実と非現実は主に単独で現われたり, それ自身が特定の概念的な範疇の唯一のマーカーであるというものである.

Amele 語(Paupuan-Roberts1994:372)から例を挙げると, 非現実のマーカーは未来のマーカーが文中で現在であるときはいつも求められる.

ho bu-basal-en age qo-qag-an
pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-FUT
'They will kill the pig as it runs out'

彼らは豚が逃げる時, それらを殺すだろう.

対照的なもうひとつのパプア諸語である Muyuw 語(Bugenhagen 1994:18, 私信からの引用)では非現実のマーカーはそれ自体が未来を指し示すものである.

yey b-a-n Lae nubweg
I IRR-1SG-go Lae tomorrow
'I will go to Lae tomorrow'

私は Lae に明日行くだろう.

Amele 語の例には非現実と未来といった二つの文法マーカーの間に統語的な関係があり, 一方 Muyuw 語の例には未来性を指す非現実という特定の文法マーカーがあるという点で, これらは厳密には類似していないように見えるかもしれない. しかし類型論的な観点から, それらは未来性という共通した概念的特徴が非現実という文法範疇に関連しているという点で類似しているのである.

これら現実と非現実の異なる機能は結合{joint}と非結合{non-joint}というマーカーという観点から区別されるだろうし, また結合マーカーは他の文法的なマーカーと(義務的に)共起するものである.

しかしそこには二つの重要な留保がある。第一に、いかなる言語のムード体系でも結合あるいは非結合のどちらかが優先的であるとするマーカーを通常含んでいるにもかかわらず、その区別は両方の特徴が一つの言語でしばしばあらわれるという点で明確ではない。したがって体系それ自体を‘結合’あるいは‘非結合’として言及することが便利なきときもある。第二に、非結合の体系は構文が現実あるいは非現実としてマークされるだけでなく、マークされない場合(6.5.2 参照)もあるという点で厳密には二元体ではないということがしばしばある。現実 / 非現実の区別に関するさらなる問題は、いくつかの言語で現実と非現実のマーカーがムードの例(しかし 6.5.3 参照)というよりも一見明らかにモダル体系のように見えるさらに広い体系のなかの他のマーカーと共起するという事実である。

Oklahoma で話されている Caddo 語について Chafe(1995:351-9)は、動詞の代名詞的な接頭辞は現実あるいは非現実のいずれかとして区別される場合があり、その選択はこれらの代名詞的な接頭辞の前に現れる文法マーカーのセットによって決まると報告している。非現実の接頭辞は、否定、禁止、義務、条件を示す文法マーカーと共に接続詞の中で用いられ、また‘そぶり{simulative}’、‘稀なこと{infrequentative}’、‘称赞{admirative}’を表す接頭辞と共に用いられる(‘単純な否定{simple negative}’の前置詞に加えてそこには‘長くはない時{not for a long time}’を表す‘一時的な否定{temporal negative}’もあり、そして条件{conditional}に加えて‘一般的な条件{general conditional}’と‘否定の条件{negative conditional}’がある)。

kúy-t'a-yibahw

NEG-1+AG+IRR-see

‘I don’t see him’

私は彼に会っていない。

kaš-sah?-yibahw

PROH-2+AG+IRR-see

‘Don’t look at it’

それを見るな。

kas-sa-náy?aw

OBL-3+AG+IRR-sing

‘He should/is obliged to sing’

彼は歌うべきだ。

hí-t'a-yibahw

COND-1+AG+IRR-see

‘If I see it’

もし私がそれを見るなら。

dúy-t'a-yibahw

SIMULAT-1+AG+IRR-see

'As if I saw it'

まるで私がそれを見たように.

wás-t'a-yibahw

INFREQ-1+AG+IRR-see

'I seldom see it'

私はめったにそれを見ない.

hús-ba-?asa-yik'awih-sa?

ADM-1+BEN+IRR-name-know-PROG

'My goodness he knows my name'

おや, 彼は私の名前を知っている.

Chafe は用例を挙げていないが, 現実の接頭辞は現在または過去の状態や出来事を言及する表現と共に現れるということを含意している. また現実の接頭辞は未来を表す二つのマーカーと共に現れる ('未来' と '意志未来{future intension}') である).

ci-yibahw-?a?

1+AG+REAL-see-FUT

'I'll look at it'

私はそれを見るだろう.

ci-yibahw-ča?

1+AG+REAL-see-FUT.INT

'I'm going to look at it'

私はそれを見るつもりだ.

しかし現実と非現実のそれぞれは他の文法的なマーカーを伴わず単独で現れる, つまりこれが非結合{non-joint}である. 非結合の非現実の接頭辞は(yes-no) 疑問を示す.

sah?-yibahw-nah

2+AG+IRR-see-PERF

'Have you seen him?'

あなたは彼に会ったことがあるか?

非結合の現実の接頭辞は命令を示す.

yah?-yibahw

2+AG+REAL-see

'Look at it'

それを見ろ.

したがって Caddo 語の体系は全部ではないにしろ結合{joint}が圧倒的なのである.

非結合の体系は Manam(Papuan 語については Lichtenberk1983, Bugenhagen 1994:9-11 で議論されている)語で見出される. その体系は Manam 語で二元体である—Lichtenberk(1983:181)は「現実と非現実の対立はすべての語末の動詞が二つのムードのうち一つに特定されなければならない(主語 / ムード接頭辞によって)」という点において Manam 語の動詞の体系で決定的となる」と述べている. 現実は (i) 過去の出来事, (ii) 現在の出来事, (iii) 習慣的な出来事で用いられる.

u-nóʔu

1SG+REAL-jump

‘I jumped’

私は飛んだ.

úra i-pura-púra

rain 3SG+REAL-COME-RED

‘It is raining’

雨が降っている.

ʔi-zen-zén

1PL.EXC.REAL-chew betel-RED

‘We (habitually) chew betel-nuts’

私たちは(習慣的に)ビンロウの実を噛む.

非現実は (i) 未来の出来事, (ii) 命令{commands}, 忠告{exhortation}や警告{warnings} (‘lest’), (iii) 反現実の出来事と (iv) 慣習もしくは習慣的な行動の連続で用いられる.

úsi né-gu mi-ásaʔ-i

loincloth POSS-1SG 1SG+IRR-wash-3SG+OBJ

‘I will wash my loincloth’

私は私の腰布を洗うだろう.

go-moanáʔo

2SG+IRR-eat

‘Eat’

食べろ.

gáu u-rére nóra boʔaná-be go-púra
 1SG+IRR 1SG-want yesterday SIM-FOC 2SG-come
 ‘I wish you had come yesterday’

私はあなたが昨日来てくれたらよかったのと思う。

úma ga-ʔoáriŋ-i ʔái ga-pólo-ø
 garden 1PL.EXC+IRR-clear-3SG+OBJ tree 1PL.EXC+IRR-fell-3PL+OBJ
 ‘We clear (the bush for) a (new) garden, we fell the trees’

私たちは（新しい）庭のために灌木をきれいにした。私たちは木を切り倒した。

そこにはここで記されている一つの重要なポイントがある。他の文法的マーカーと現れるというように、マーカーが結合である場合、現実あるいは非現実として特徴付けされているものの他に他のマーカーと関連する概念的な特徴に付け加えるものがないという点で冗長である。対照的に非結合のマーカーは概念的特徴の唯一の表示であり、したがって冗長ではない。しかし体系の中にあるすべての項目が結合（冗長な）あるいは非結合（冗長ではない）であるということはめったにない。さらに時折現実あるいは非現実が同一の文法的なマーカーと共に現れたり（例えば中央 Pomo 語における未来{Future}のように-6.5.1 参照）、異なる意味を表すものと共に現れたり、結合にも拘わらず冗長ではない場合がある。冗長性に関する議論は 7.3 で行われる。

6.2 術語

‘現実’と‘非現実’という術語は明白であるにもかかわらず、‘現実’と‘非現実’という術語が‘直接法’や‘接続法’といった伝統的な術語の代わりに文法的術語として適用されてきたことは、おそらく少し不幸なことであった。Bybee *et al.*(1994:236)は適切な意味において、その術語が最初に使われたのは 1970 年以前の彼らのコーパスには見られず、Capell and Hinch(1970)によるオーストラリア諸語の Maung 語の分析で最初の例があったと報告している。

一貫性に対する関心という点で‘直接法’と‘接続法’、‘現実’と‘非現実’のいずれかといったデータの両方のセットに関して、好んで前者である術語の唯一のセットを使ってきたのは賢明に思えたかもしれない。しかし両者の考え方が確固として確立されている現在ではこれはおそらく非実用的であり、さらに二つの現象を分けて扱うのはいくつかの利点がある（それらの異なる術語に関して別の章で扱う）。

しかしこの結果、‘現実’と‘非現実’は少なくとも三つの意味で用いられ得るという点で不幸にも術語の問題がある。

第一に術語は‘事実{factual}’と‘非事実{non-factual}’、あるいは‘現実{real}’

と‘非現実{unreal}’ (1.1.1 参照)よりもむしろ概念的特徴を言及するために用いられる場合がある。Givón(1994)はこれらの術語をスペイン語の接続法の分析で使っていることを念頭においてもよい。第二にその術語は形式上の文法範疇に対してラベル付けするのに言語学者によって用いられている。第三に仮に直接法 / 接続法と現実 / 非現実がムードの文法的なマーカーとして見做されるならば、関連する類型論的（汎言語的）な範疇として‘現実{Realis}’と‘非現実{Irrealis}’を認めることが適切だろう。

1.7 で論じたように類型論的に明白な範疇とそれに関連する概念的な特徴を区別するために用いられる術語については問題がない。なぜなら類型論的な範疇は最初の文字を大文字にすることによって示され得るからである。したがって**現実**と**非現実**という類型論的範疇は現実と非現実の概念に関連している。言語固有のカテゴリーの名前としての術語と、概念的な特徴に対する名づけとしての術語の間での混乱がありうるが、必要な場合には、‘概念的な現実{notionally realis}’と‘概念的な非現実{notionally irrealis}’と言うことによってその混乱を裂けることができる。

1.5 で簡潔に論じられた他のポイントがある。6.1で論じられた結合と非結合の体系における範疇は類型論的に非常に類似しており、それらに同じ術語を用いるのが便利である。したがって Manam 語(6.1)で‘未来{future}’が‘命令{command}’や‘反現実{counterfactual}’と文法的に区別されないにもかかわらず、それを類型論的範疇である**未来{Future}**の例として扱うのはそれでも妥当である。しかし一般的に著者は未来が現実あるいは非現実のマーカーとの共起するためか、または現実あるいは非現実マーカーによって未来が表わされるためかのいずれかで未来のような範疇が現実または非現実‘である’ということによって事実を表現する。これは明らかに文法的なレベルと概念的なレベルが混在している。しかしこれは結合と非結合の両方の事実を組み合わせ方が明確で、そして有意義であるため許容されるかもしれない。

さらになるポイントがある。‘非現実’という術語は‘推定{dubitative}’のような術語の使用がより適切であるモデル体系において、複数ある術語の一つの名前としていくつかの言語の記述で用いられている。Ngiyambaa 語 (Donaldson 1980:160,162)の記述から例が見出されるが、そこで‘非現実’は拘束的、認識的の両方で用いられている‘目的{purposive}’として同じ体系の中に現れるが、またその認識的な用法は本質的には**推定{Deductive}**である (1.4.5, 2.1.2 と 4.1 参照)。

Irrealis

yurun-gu nidja-l-aga

rain-ERG rain-CM-IRR

‘It might/will rain’

雨が降るかもしれない/降るだろう。

Purposive

ɲadhu bawuŋ-ga yuwa-giri

I+NOM middle-LOC lie-PURP

‘I must lie in the middle’

私は中央に横たわらなければならない。

yuruŋ-gu ɲidja-l-i

rain-ERG rain-CM-PURP

‘It is bound to rain’

雨が降るに違いない。

これはムードとしての非現実の扱いに関連しない。術語ここではモーダルな体系（現実 / 非現実のムードの体系よりも）における術語を言及するために用いられている。

6.3 形態論と統語論

6.3.1 形態論

現実と非現実のマーカーはしばしば語や接語、接辞のいずれかといったように単独で孤立した形態である。Kiowa 語(Oklahoma-Watkins 1984:171)もそうであり、そこでは単数の接尾辞²がある。

hàgyà à-bá-²ɔ.

perhaps 1SG-go-IRR

‘Maybe I’ll go’

おそらく私は行くだろう。

Maricopa 語(6.5.3 参照)にも類似したマーカーとして *-ha* がある。

ny-aay-ha

1/2-give-IRR

‘I will give it to you’

私はあなたにそれをあげるだろう。

非結合マーカーに関してパプア諸語に類似した状況がある。Bugenhagen(1994:36)によれば、そのような言語の8つのうち、そのマーカーは主語やムードに関する動詞の接頭辞、主語やムードに関する代名詞、動詞の接頭辞（ムードに関してのみ）、動詞接頭辞の小詞、文頭を表す小詞である。

しかしいくつかの言語ではいくつかの文法範疇の累積した具現形のマーカーがある。したがって Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:352-3)では (i) 一人称、

二人称, 三人称そして ‘脱焦点化{defocussing}’ といった人称, (ii) 動作主, 受動者, そして受益者といった文法的な関係(Palmer 1994 参照), その他に (iii) 現実と非現実といったものが同時に存在するマーカの接頭辞がある. 全体の体系の一部分は次のようになる.

Realis prefixes

	agent	patient	beneficiary
First person	ci-	ku-	ku-
Second person	yah?-	si-	si-

Irrealis prefixes

First person	ʔa-/ʔi-	ba-	ba-
Second person	sah?-	saʔa-	saʔu-

実際には 48 通りの可能性がある. しかし上の表の受動者と受益者に関する 1 番目～三番目のペアの形式上の同一性によって表わされているようにいくつかの重複{syncretism}がある. これはおそらくこの種類の具現形の累積が接続法をどこか連想させるという点において驚くべきことである. Sapir(1922:94)によって記述され, Mithun(1999:5)によって議論された Takelma 語(Southern Oregon)の体系は直接法 / 接続法にさらに類似している. ここでは6つの ‘時制－モード{tense-modes}’ がある－‘アオリスト’, ‘未来’, ‘可能性{potential}’, ‘推量{inferential}’, ‘現在命令{present imperative}’, ‘未来命令{future imperative}’.

それぞれの動詞は ‘run’ に関して *yowo-*と *yu-*, ‘come’ に関して *baxam-*と *baxama-*またその他といったように, 二つの語幹の形式を有する. 最初の語幹である ‘派生して拡張された語根の形式’ は, アオリストについて用いられ, 時制モードで最もよく使われるものである. 二番目の語幹である ‘一般的でより基本的な動詞語幹’ は ‘それほど重要ではない時制－モード’ について用いられる. Sapir の用例は残念なことにわかりにくい.

Aorist	tʰomōm	‘He killed him’
Imperative	dō ^u m	‘Kill him’

今となってはアオリストは過去の出来事や現在, そして近接未来{immediate future}を言及するのに用いられ明らかに現実だが, 一方他のものはすべて潜在的に非現実である. そして現実 / 非現実の区別は語幹の選択においてマークされる. この種類の冗長なマーキングは屈折する言語ではまったく一般的ではないということはない. 例えばラテン語では人称－数のパラダイムもまた異なる

にも拘わらず（さらなる議論は 7.1 を参照）, ‘love’ に関して未完了相について *am-*, 完了相については *amav-*のように, さらに驚くことに ‘carry’ に関して未完了相と完了相で *fer-*と *tul-*, 未完了相と完了の時制そしてムードについて異なる語幹がある.

さらなる可能性はかつて Oregon で話された Alsea 語(Buckley 1988: 未刊行の原稿からの引用, Frachtenberg 1918)のように二重のマーキングがあるということである. ここでの区別は現実の *mis*

と非現実の *sis* という補文標識によって両者がマークされおり, Mithun(1999:175)によれば, 現実{Realis} / 非現実{Irrealis}の累積した具現形と起動相{Inchoative}や完了相{Completive}である接辞によって両者がマークされている(ページは Buckley を参照).

temúhu mis-axa wi'l-x (12)

and then REAL+COMPL-back come-REAL+COMPLET

‘And then, after she came back’

そして後に彼女は帰ってきた.

mis-iłx múhu' łáq'-s-t-əx (19)

REAL+COMPL-3PL+SUB at last cross-?-STAT-REAL+COMPLET

‘When they finally got across’

彼らはついにいくわしたとき.

sips tqaiáld-i (21)

IRR+COMPL+2PL+SUB want-IRR+COMPLET

‘If you desire it’

あなたがそれを望むなら.

í'mst tém-in tqaiált-əx sis

thus and-1SG+SUB want-REAL+COMPLET IRREAL+COMPL

kexk-ái'-m

(13)

assemble-IRR+INCH-INTR

‘For that reason, I want [the people] to reassemble’

そのような理由で私は（その人たちを）再び集めたい.

他に二つの可能性がある. 第一に現実と非現実のマーカーに加えてマークされていない構文がある言語がある(6.5.2 で議論される). 第二に現実にはマークされない場合がある（第二章と第三章で提示されたタイプのモーダル体系が通常あるように）. Tolkapaya Yavapai 語と Mojave 語の可能な用例は 6.3.3 と 6.6.5 で議論される.

6.3.2 連結された節

Chafe(6.1)によって提示された Caddo 語の用例では, 結合のマーカ―は単独の節に現れるだけでなく, 単独の語にも現れる. (否定と非現実の) 用例を再掲する.

kúy-t' a-yibahw
NEG-1+AG+IRR-see
'I don't see him'
私は彼に会わない.

しかしこれらの結合マーカ―が複文の分離した節に関連するアメリカ先住民言語とパプア諸語がある.

そのような言語の一つである中央 Pomo 語(Pomoan, N.California – Mithun1999:176-7, cf Mithun 1995:368-73)もまたモーダル体系を持っている(1.2.1, 2.2.3 参照). ここで現実 / 非現実の区別は連結された節(そのうちの単独のタイプだが, 連結するものは 'and', 'while', 'then' などに訳されるだろう)のなかで行われる. 最初の節において動詞は (i) 現実 / 非現実, (ii) 同じ出来事かあるいは異なる出来事のいずれかを言及する連結された節を示す '同じもの{same}' / '異なるもの{different}', (iii) 現実に限るが, 同時に起こる出来事と連続して起こる出来事の区別をするための '同時{simultaneous}' / '連続{sequential}' といったものの累積した具現形であるマーカ―を持っている. 現実と非現実の選択を決定する共起する文法範疇は最後の節のなかにある. したがって以下の例の中で命令{imperative}と条件{conditional}の範疇は二番目の節で起こり, これらは最初の節において動詞が非現実としてマークされることを決定する(それぞれ same + irrealis と different + irrealis).

qhá č̣ni-ʔel dó-č̣hi mú'tya-l
water bread-the make-SEMEL-SAME+IRR 3PL-PAT
qa'-wá-č̣'-ka-m
biting-go-IMP+PL-CAUS-IMP
'Make the water bread and invite them to eat it'
水のパンを作りなさい. そしてそれを食べるために彼らを招きなさい.
me'n mí-hla, mú'l ʔa' ʔhá'ʔ le ʔa'
so say-DIFF+IRR that 1+AG sit-COND 1+AG
'If she said that, I'd stay longer'
彼女がそれを言うなら私はもっと長く留まるだろう.

次の用例は二番目の節で現在と過去のマーカ―を示し, 最初の節で現実のマーキングを示している(same+simultaneous+realis と different+sequential+

realis).

ʔa· Edna-to čá·l yó·h-du-n híntil-ʔel
 1+AG Edna-PAT house-to go-PERF-IMPF-SAME+SIM+REAL Indian-the
 ča·nó·d-an-ya mú·tu
 talk-IMPF-IMPF-PERS.EXP 3+PAT
 ‘I go to Edna’s house and talk Indian to her’

私は Edna の家に行って彼女にインディアンという言葉話を話した。

to· meʔ ʔ-né·ya-w-li míya· mé
 1+PAT such by.gravity-set-DEFOC-PERF-DIFF+SEQ+REAL 3+POSS father
 dá·ʔ-du-w čhó-w
 like-REFL-IMPF-PERF not-PERF

‘I was nominated and his father didn’t like it’ (‘When I was nominated, his father didn’t like it’)

私が推薦されて彼の父親はそれを好まなかった。

(私が推薦されたとき彼の父親はそれを好まなかった)

Roberts(1990:371-5)で述べられているように、パプア諸語の Amele 語に類似した状況がある。しかし重要な違いの一つは、現実 / 非現実のマーキングが連結された節で起こる (‘節の連鎖{clause chaining}’) にも拘わらず、そこでは節が異なる主語を持っている。再び最初の節 (Roberts の術語では‘中間{medial}’) の動詞は現実 / 非現実 (現実 / 非現実, 数と人称, ‘異なる主語’ に関するマーカーによって累積的に) としてマークされるが、一方最後の節の動詞は共起する文法範疇 (人称と数に関して累積的に) に関してマークされる。次の用例は最初の節の動詞に現実がマーキング (人称と数, 異なる主語と共に) することを例証しており、そして最後の節の動詞に過去と現在 (加えて人称と数) のマーカーを例証している。

ho bu-busal-en age qo-in
 pig SIM-run.out-3SG+DS+REAL 3PL hit-3PL+REM.PAST
 ‘They killed the pig as it ran out’

彼らは豚が逃げたのでその豚を殺した。

ho bu-busal-en age qo-igi-na
 pig SIM-run.out-3SG+DS+REAL 3PL hit-3PL-PRES
 ‘They are killing the pig as it runs out’

彼らは豚が逃げるので殺しているところだ。

同様に他の例は中間の節で非現実のマーキングを示しており、最終節で未来

と命令のマーキングを示している。

ho bu-busal-eb age qo-qag-an
 pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-FUT
 ‘They will kill the pig as it runs out’
 彼らは豚が逃げたら殺すだろう。
 ho bu-busal-eb age qo-ig-a
 pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-IMP
 ‘Kill the pig as it runs out’
 豚が逃げたら殺せ。

これらの例はムードが連結された節の最初の部分（‘中間{medial}’の節）でどのようにマークされるのかを示しているが、これらの例は二番目の節（最後{final}の節）で文法的なマーカーに依存している。（関連する範疇の完全なリストは 6.4 参照）

連結された（‘連鎖された{chained}’）節の訳はそれらが斜格の従属節（一時的なもの{temporal}, 目的{purpose}, 条件{conditional}など）と ‘and’ や ‘but’ といった等位節の両方を含むことを示唆している。Amele 語では少なくとも（しかしおそらく他の言語でも）これら二つのタイプの節は従属している中間の節が動かされ得るという点—最後の節に挿入されるのかあるいはその後に移されるのか—で統語的に区別され得る(Roberts 1994:13-15)。これは次の例から見ることができる。

ho qo-qag-an nu dana age h-oiga-a
 pig hit-3+PL-FUT PURP man 3PL come-3PL-TOD.PAST
 ‘The men came to kill the pig’

その人たちは豚を殺しに来た。

従属している *ho qo-qag-an nu* ‘to kill the pig’ は移動され得る。

dana age ho qo-qag-an nu h-oiga-a
 man 3PL pig hit-3+PL-FUT PURP come-3PL-TOD.PAST
 ‘The men came to kill the pig’

その人たちは豚を殺しに来た。

dana age h-oiga-a ho qo-qag-an nu
 man 3PL come-3PL-TOD.PAST pig hit-3+PL-FUT PURP
 ‘The men came to kill the pig’

その人たちは豚を殺しに来た。

対照的に等位については移動できない。

ho busale-i-a qa dana age qo-iga-a
 pig run.out-3SG-TOD.PAST but man 3PL hit-3PL-TOD.PAST
 ‘The pig ran out, but the men killed it’

豚は逃げたがその男は豚を殺した。

6.3.3 補語になる節

最後のセクションでは複文の特別な種類について扱う。そこでは二つの節がムードをマーキングする決定が含まれるが、しかし現実 / 非現実のマーキングもまた斜格の節と補語になる節（直接法 / 接続法も同じように）の両者である従属節のより一般的なタイプのなかで見出される。したがって Mojave 語 (Yuman, Arizona-Munro 1976:54-5)では、非現実の接尾辞は ‘非現実{unreal}をマークするための従属節の動詞あるいは仮説的な状況：欲望{desire}, 条件{conditional}, 義務{obligations}, 反現実{counterfactuals}, 時には未来{occasional futures}’ に現われる。斜格と補語の節の例は次のようなものである。

huwal^ʔəpay ya-ʔ-aʔa:v-θ ʔ-ʔahot-e
 Walapai x-l-understand-IRR l-good-FUT
 ‘If I learn Walapai, I’ll be all right’
 もし私が Walapai を学ぶなら、私は満足だろう。
 humič ʔatay iyu'-h-a'r-pč
 children more have-IRR-want-TENSE
 ‘She wants to have more children’
 彼女はもっと子供を持ちたがっている。

かつて Oregon(Bucklay 1988 と Frachtenberg 1920)で話されていた Alsea 語からの類似したペアが 6.3.1 で挙げられた。

sips tqaiáld-i (24)
 IRR+COMPL+2PL+SUBJ want-IRR+COMPLET
 ‘If you desire it’
 もしあなたがそれを望むなら。

i.mst tém-in tqaialt-əx sis
 thus and-1SG+SUB WANT-REAL+COMPLET REAL+COMPL
 kexk-ái-m
 assemble-IRR+INCH-INTR
 ‘For that reason, I want [the people] to reassemble’
 そのような理由で私は（その人々を）再び集めた。

(42)

パプア諸語には類似した補語になる節の多くの例が存在する。これらの言語において非現実の機能を示している一覧表で、Bugenhagen(1994:36)は広範囲なムードマーキングに関して6つの言語のうちすべてが‘欲望{want}’、と‘危惧{lest}’に関して非現実を使用し、一方5つは‘目的{purpose}’、‘能力{ability}’、‘義務{obligation}’に関してムードマーキングを用いることを示している。Manam 語と Sursurunga 語から‘欲望{want}’の例を挙げる。

tamá-gu i-rére go-púra záma
 father-1SG 3SG+REAL 2SG+IRR-come tomorrow
 ‘My father wants you to come tomorrow’
 私の父はあなたが明日来ることを望んでいる。
 iau nem ngo i-na han ur Ukarumpa
 1SG+REAL want that 1SG-IRR go to Ukarumpa
 ‘I want to go to Ukarumpa’
 私は Ukarumpa に行きたい。

ここで明らかに‘欲望{want}’は非現実の補語をなす節の使用に関して表現されている。Manfseng 語において(能力の非現実マーカ―は付属的なものだが)同じことが欲望だけではなく能力と弱い義務にも当てはまる。

i pavurvu (aro) i ro vai
 3SG able (IRR) 3SG go.up coconut
 ‘He is able to climb coconut trees’
 彼はココナッツの木に登ることができる。
 i siveŋa ako aro i oma i
 3SG good that IRR 3SG do 3SG
 ‘He should do it’
 彼はそれをしてしなければならない。
 tho n-ve aro te oriet pua ponange
 1SG say-thus IRR we hunt crocodiles today
 ‘I want us to hunt crocodiles today’
 私は今日ワニを捕まえたい。

しかしその形式の位置づけは Muyuw 語(Bugenhagen 1994:19, 個人的な私信から引用)ではあまり明確ではない. この言語における ‘欲望{want}’, ‘能力{ability}’, ‘義務{obligation}’ は次のようなものである.

sivina-g b-a-n lae
need/desire-1SG IRR-1SG-go Lae

‘I want to go to Lae’

私は Lae に行きたい.

kadiloka b-i-vag

ABILITY IRR-3SG-do

‘He can do it’

彼はそれができる.

awoum b-i-vag

PROH IRR-3SG-do

‘He must not do it’

彼はそれをしてはいけない.

‘欲望{want}’ については問題ないが, 他の二つの例の可能な分析は能力と禁止のマーカの補語という観点ではなく, 非現実の結合マーカと能力と禁止の文法的なマーカという観点によるものである.

補語をなす節もまたムードがマークされて連結された(‘連鎖した’)節 {mood-marked linked (‘chained’) clause} と共に見出され得る. Amele 語について Roberts(1990:373-4)は非現実のマーキングをも必要とする補語をなす従属節の意図 {intensive}, 願望 {desiderative}, 習慣的欲望 {habitual desire}, 能力 {abilitative}, 目的 {purpose} といった 5 つのタイプを挙げている. 従属節は ‘相対的な未来 {relative future}’, 命令 {imperative}, 不定 {infinitive} に関して多種多様に異なる方法でマークされる.

ho bu-basal-eb age qo-qaq-a bili tawe-ig-abe
pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-REL.FUT be stand-3PL-TOD.PAST
‘They stood about to kill the pig as it ran out’

彼らは豚が逃げたので, その豚を殺すために彼らは立ってあたりを見回していた.

ho bu-basal-eb age qo-ig-a ade-ø-na
pig sim-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-IMP 3PL+OBJ-3SG-PRES
‘They want to kill the pig as it runs out’

彼らは豚が逃げたときその豚を殺すことを望んでいる.

ho bu-basal-eb age qo-oc nu ihoc
 pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-INFIN for able
 ‘They are able to kill the pig as it runs out’

彼らは豚が逃げたときその豚を殺すことができる。

これらの補語をなす従属節そのものは他の言語において補語をなす節が接続法としてマークされているように非現実としてマークされていない。むしろこれらの節（相対的な未来，命令，不定）において先行する（‘中間の{medial}’）節が非現実としてマークされることを決定するのは接続法のマーカーなのである（主節におけるマーカーが最初の二つにおいてそらは未来と現在であるが，‘中間の’節は非現実としてマークされるという点において関与的ではないことにも注目せよ）。

一般的に従属節における非現実の使用は構文によって決定される点や意味上の対比がないことを許すという点において冗長である。興味深い例外は Mojave 語(Yuman, Arizona-Munro 1974:54-5)で見出されるものである。（無標の）現実と非現実の区別は欲望{wanting}，つまり概念的な非現実の命題に対する態度と好むこと{liking}，つまり概念的な現実の命題に対する態度を区別することに用いられている。

?-isay-θ ?-a:r-mot-m
 I-fat-IRR I-want-NEG-TENSE
 ‘I don’t want to get fat’

私は太りたくない。

?-isay-k ?-a:r-mot-č
 I-fat-ss I-want-NEG-STAT
 ‘I don’t like being fat’

私は太りたくない。

6.4 結合の体系

詳細に議論されてきた Caddo 語(6.1)と中央 Pomo 語(6.3.2)という二つのアメリカ先住民言語の結合の体系が二つの重要な方法において非常に異なるというのはおそらく驚くことである。第一に 6.3.2 で示したように，統語が非常に異なる。Caddo 語では共起する形式が単独の節のなかであるのに対し（そして挙げられたすべての例において，単独の語のなかである），一方中央 Pomo 語では一つの単独の節のなかにあるムードマーカーに関して連結される節があり，共起する文法的なマーカーは別のものである。この点で Roberts(1994:36)によって述べられているように中央 Pomo 語はむしろパプア諸語に若干類似している。

第二にそれらの言語における文法範疇の取扱で異なる点がある。Caddo 語については次のように表わされる。

Realis: future, future intention, imperative

Irrealis: negation, prohibition, obligation, conditional, simulative, infrequentative, admirative, temporal negative, generic conditional and negative conditional.

現実：未来，意図的未来{future intention}，命令{imperative}

非現実：否定，禁止，義務，条件，そぶり{simulative}，

稀なこと{infrequentative}，‘称赞{admirative}’，‘一時的な否定{temporal negative}’，‘一般的な条件{general conditional}’，‘否定の条件{negative conditional}’

これらの範疇は中央 Pomo 語では次のように表わされる。

Realis: imperfective, perfective

Irrealis: conditional, imperative, future (basically).

現実：未完了相{imperfective}，完了相{perfective}

非現実：条件，命令{imperative}，未来（基本的に）

（中央 Pomo 語で否定と疑問はムードに影響を与えないが，一方未来はいつもとは限らないが，通常非現実としてマークされる。Caddo 語で未来と命令が現実であることに注目せよー関連するセクションである 6.6.1 と 6.7.1 を参照）

Takelma 語(6.3.1)はおそらく結合の体系に関してもう一つのアメリカ先住民言語として見なされるものである。もしそうだとすると，（現実）‘アオリスト’は動詞の基本的な語幹を持つので現実にはマークされていないように見えるかもしれない。範疇のセットが派生した（非現実）語幹と共に起るという点において Takelma 語は結合の体系を持っている。そしてその範疇は次のようになるだろう。

Realis: present/past (‘aorist’)

Irrealis: future, potential, inferential, present imperative and future imperative

現実：現在 / 過去（‘アオリスト’）

非現実：未来，潜在的なもの{potential}，推量{inferential}，

現在の命令 {present imperative} と未来の命令 {future imperative}

これら三つのアメリカインディアン言語は互いが非常に異なるが、パプア諸語の多くで現実 / 非現実の体系は、明白な現実 / 非現実の範疇のかなり予想し得るセットについてより類似している。Amele 語からの例は 6.3.2 で挙げられた。その言語について Roberts(1990:275)は次のように現実と非現実に関連付けられている文法範疇をリストとして挙げている。

Realis: habitual past, remote past, yesterday's past, today's past, present tense

Irrealis: future, imperative, hortative, prohibitive, counterfactual/prescriptive, apprehensive.

現実：習慣的な過去{habitual past}, 遠過去{remote past}, 昨日の過去{yesterday's past}, 今日の過去{today's past}, 現在の時制{present tense}

非現実：未来, 命令{imperative}, 勧告{hortative}, 禁止{prohibitive}, 反現実{counterfactual} / 規定{prescriptive}, 懸念{apprehensive}

彼は Nobonob 語, Anjam 語, Bargam 語から類似したセットの例を挙げている (すべて未刊行の原稿からのものである)。Nobonob 語からの文のペアは次のようなものである (Roberts 1990:280)。

ah ag e he-egeg danab lag lag qag-pig
woman 3PL food do-3PL+DS+SIM+REAL man 3PL house tie-3PL+PAST
'As the women cooked the food, the men roofed the house'

その女性が食べ物を調理したとき, 男性は家に屋根をつけた。

ah ag e he-bepeg danab lag lag qag-kulag
woman 3PL food do-3PL+DS+SIM+IRR man 3PL house tie-3PL+FUT
'As the women cook the food, the men will roof the house'

その女性が食べ物を調理するとき, 男性は家に屋根をつけるだろう。

これら 3 つの言語は同じ地域 (パプアニューギニアの Madang 地方) であるにもかかわらず, 関連性がないと彼は記している。しかし彼は Wojokeso 語 (West 1983) と Angaataha 語 (Huisman 1973) と Gahuka 語 (Deibler 1976) といった他の遠く離れた地域の言語からも例を挙げている。Roberts(1990:382-3, D.Rucker による未刊行の原稿を引用)もまた Anjam 語から例を挙げている。そこでは現在, 近過去{immediate past}, 遠過去{remote past}は現実としてマークされ, 一方未来, 命令{imperative}, 反現実{counterfactual}は非現実としてマークされている。遠過去と未来の例は次のようなものである。

e tabir yans-eqn-a-m Rut
 1SG dishes work-SIM+REAL-REM.PAST-1SG+REAL+DS Ruth
 alaj-oqn-e-j
 play-CNTF-REM.PAST-3SG
 ‘While I washed the dishes, Ruth played’
 私が皿を洗っている間, Ruth は遊んでいた.
 a wan-oqn-i-m nangi b-q-ab
 3SG work-SIM+IRR-FUT-3SG+IRR+DS 3PL come-FUT-3PL
 ‘He will be working when they come’
 彼は彼らが来るとき働いているだろう.

しかしここで明らかな違いがある－最後の節だけではなく中間の節{medial clause}も現実 / 非現実の識別(遠過去と未来)を決定する文法的なマーカーを含むのである.

概念的な範疇と形式的な範疇の間に密接な一致があるのはきわめて明白である. 過去と現在の出来事を示す命題のみが現実として扱われる. なぜならこれらの命題は主張されているからである. 一方未来の出来事と実現化されなかった, 潜在的な出来事は非現実として扱われる. なぜならこれらは主張されていないからである. 実現化されなかった, 潜在的な出来事は主節のなかで, 命令{imperative}, 勧告{hortative}, 禁止{prohibitive}, 反現実{counterfactual} / 規定{prescriptive}, 懸念{apprehensive}によって, そして従属節のなかで意図{intensive}, 願望{desiderative}, 習慣的な欲望{habitual desire}, 能力{abilitative}, 目的{purpose}によって, 示される.

そこには他に興味深い点がある. Amele 語は数多の文末の小詞を持っている. これらのいくつかは非現実の終末動詞(中間の動詞に対する非現実を決定するもの)のみと共起するが, しかし他のものは現実の終末動詞と共起し, 概念的に非現実であるにもかかわらず, それらは中間の動詞のモードに影響を与えない. したがって ‘おそらく{maybe}’ という語を持っているか, あるいは疑問に関する小詞, 中間の動詞は終末動詞が現実(例えば現在時制)であるならば, 現実のマーキングを持っている.

ho bu-basal-en age qo-gi-na fa
 pig SIM-run.out-3SG+DS+REAL 3PL hit-3PL-PRES DUB
 ‘Maybe they are killing the pig as it runs out’
 豚が逃げだすときおそらく彼らは豚を殺している.
 ho bu-basal-en age qo-gi-na fo
 pig SIM-run.out-3SG+DS+REAL 3PL hit-3PL-PRES QUES
 ‘Are they are killing the pig as it runs out?’

豚が逃げだすとき彼らは豚を殺しているか？

他のそのような小詞は ‘nevertheless’, ‘let him’, ‘really’, ‘always’ と訳されている。その大部分が未刊行の他の研究者による研究は Nobonob 語, Anjam 語, Bargam 語, Wojokeso 語(West 1983)とおそらくいくつかの他の言語で類似した状況を示していると Roberts(1990:379-88)は報告している。

パプア諸語では未来{Future}は結合の体系において常に非現実によってマークされている範疇の一つである（非結合のなかのことについては 6.5.1 参照）。そこには他の潜在的な非現実の範疇に関していくつかのバリエーションがある。Roberts(1994:31)によって示された一覧表は連結された構文に {chained constructions} に関して中間の動詞に非現実のマーキングがあり、またそこではマーカーは二つの言語においてのみ未来{Future}を示していることを見せている。未来と命令は5つの言語において、未来と命令と反現実とは4つの言語において、未来、命令、反現実、習慣的過去は一つの言語において（そこでは唯一の非現実の範疇が未来である場合、もちろんのことだがそれが時制よりもムードのマーカーであるということを説明する方法はない）。

6.5 非結合の体系

6.5.1 二元体の体系

現実と非現実が現在と過去対未来など(6.1, 6.6.1 参照)のような対立をきわめて直接的に示すために非結合的に表れるのは明確なことであるにもかかわらず、現実と非現実の単純な二元体の対立がある言語はあったとしても少ない。これは驚くべきことではない。なぜならそのような二元体の対立は多くのあいまいさを許容するからである。ほとんどの言語は非結合マーキングに関して更なる区別をするための他の方法を持っている。実際に広範囲な非結合マーキングに関してほとんどの言語は 6.5.2 や 6.5.3, 6.5.4 で明らかになるであろうが二元体のムードの体系を持っていない。

しかし純粋な二元体の対立を持つ一つの言語は 6.1 で例証された Manam 語 (Papuan-Lichtenberk 1983:182-91, Bugenhagen 1994:9-11 で議論された)である。思い出されるだろうが、Lichtenberk は「すべての終末動詞は二つのムードの一つについて特定されなければならない」と述べている。彼は現実には (i) 過去, (ii) 現在, (iii) 習慣的な出来事について用いられ、一方非現実には (i) 未来の出来事, (ii) 命令 {commands}, 忠告 {exhortation}, 警告 {warnings} (‘lest’), (iii) 反現実の出来事, (iv) 慣習の結果あるいは習慣的な行動について用いられる。

しかし非現実はいよいよ更なる区別を行うための小詞と共に現われる。したがって孤立化にある一方で非現実は不確かな未来を表す *mása* ‘perhaps’ という

う形式と共に確かな未来あるいは近未来を示すだろう。

tanépwa mása buléʔa ɲa-émaʔ-i
chief perhaps 3SG+IRR-make-3SG+OBJ
‘The chief will give a feast’

首長はごちそうをくれるだろう。

ʔána ‘予想される{prospective}’ という形式と合わせて、非現実英語の ‘going to’ に相当すると言われている。

ʔúsi né-gu mi-ásaʔ-i ʔána
loincloth POSS-1SG 1SG+IRR-wash-3SG PROSP
‘I am going to wash my loincloth’
私は自分の腰布を洗うつもりだ。

さらに予想される形式が *abe* ‘already’ によって先行されるとき、それは切迫を表し、‘very (very) near’ を意味する形式によって先行されるとき、それは ‘出来事がほとんど行われたけれども完全には行われていないという事実’ を表す。‘lest’ や能力 / 許可を示す他の形式があり、非現実の形式はまた従属節で ‘want’ の後で用いられる。

それらの形式が規則的に非現実と共に現れるので、これは非結合体系というよりも結合体系である（そこで非現実のマーキングは冗長的であろうが）という点で潜在的な問題がある。しかし過去と現在の現実と非現実未来との間で、基本的な区別が他のマーカーを伴わずに行われるのは明らかである。

その体系はしたがって基本的に非結合であり、これらの共起する小詞をその基本的な区別を ‘より細やかに調整する{fine-tuning}’ 機能を有するものとして見るのが望ましい。概念的に類型論的にそれらは結合体系の中で非現実と共に起る文法範疇とは非常に異なる。

6.5.2 現実、非現実と無標

ムードの典型的な特徴は**現実**と**非現実**の二元体の体系である。しかしいくつかの言語では現実と非現実の観点から述べられている対立があるにもかかわらず、ムードに関して無標である形式もある。

これはパプア諸語の *Amele* 語では避けられないことであり、なぜならムードは 6.3.2 で例証されたように異なる主語と共に関連付けされた構文においてのみマークされるからである。同じ主語があるところでは、構文はムードに関し無標である (Roberts 1994:11)。

age cabi na beli-me-ig ceta ceh-eig-an
 3PL garden to.go-SS-3PL yams plant-3PL-YEST.PAST
 ‘They went to the garden and planted yams (yesterday)’

彼らは（昨日）庭に行きヤムイモを植えた。

これに関して問題はない。つまり現実 / 非現実の対立はある構文について規制されるのに十分だと言え、そしてそのような構文においては二つの可能性があるに過ぎないと言うのに十分である。

いくつかの言語ではいくつかの構文において無標と非現実の選択がある。したがって Alamblak 語(Papua New Guinea – Roberts 1990:390-1, Bruce 1984 からの引用)では, 命令{imperative}と勧告{hortative}の両者はムードマーカークなしに用いられるが, 非現実に関しても用いられる場合がある。命令の例は以下のようなものである(さらに詳しいことは 6.7.1 を参照)。

nuat wa-ya-n-t
 sago.patty IMP-eat-2SG-3F.SG
 ‘Eat the sago patty!’
 サゴのパテを食べろ。
 (nikë) wa-roh-twa-kë
 (2PL) IMP-sit-FUT+IRR+IMP/HORT-2PL
 ‘You all be seated’
 あなたたちは全員座りなさい。

同様に Muyuw 語(Bugenhagen 1994:18, 私信からの引用)では, 現在と過去は無標となるかあるいは現実としてマークされるが, 一方未来は非現実としてマークされる。

nov i-weiy buluk
 yesterday 3SG-kill pig
 ‘Yesterday he killed the pig’
 昨日彼は豚を殺した。
 buluk nov bo n-ei-weiy
 pig yesterday EMPH REAL-3SG-kill
 ‘I know he really killed a pig yesterday’
 昨日彼が本当に豚を殺したことを私は知っている。
 yey b-a-n Lae nubweig
 I IRR-1SG-go Lae tomorrow
 ‘I will go to Lae tomorrow’
 私は明日 Lae に行くだろう。

(しかし強調のマーカーの存在が現実をマークするのかどうかは述べられておらず, したがって無標または現実の選択が決定されるか否かはまったく明確ではない.)

三つのマーカーがあるとき, しかしそれらのうちの二つが現実と非現実で現われるところで状況は若干異なる. もう一つのパプア諸語である Dani 語に関して Foley(1986:28,47)は, 彼が‘現実{real}’, ‘蓋然性{likely}’, ‘潜在性{potential}’と呼ぶ三つの対立があることを示している. 彼の用例は Bromley(1981:28,47)から挙げられているが, いくつか新たに訳されている.

wat-h-i

kill-REAL-1SG+AG

‘I killed him’

私は彼を殺した.

was-ø-ik

kill-likely-1SG+AG

‘I will kill him’

私は彼を殺すだろう.

wa?-l-e

kill-POT-1SG+AG

‘I may kill him’

私は彼を殺すかもしれない.

北イラク諸語(New York, Ontario, Quebec-Chafe 1995:359-60)に類似した状況がある. Senea 語には3通りの区別がある.

wa?-ke-kę-?

FACT-1AG-see-PUNCT

‘I see/saw it’ (direct perception or memory)

私はそれを見る / 見た. (直接的な認知 または 記憶)

ę-wa?-ke-kę -?

FUT-1AG-see-PUNCT

‘I’ll see it’ (prediction)

私はそれを見るだろう. (予言)

aa-ke-kę -?

OPT-1AG-see-PUNCT

‘I should/might see it’ (obligation or possibility)

私はそれを見なければならない / 見るかもしれない.

(義務 / または可能性)

Chafe はこれらを一方の極にあるものを‘事実{factual}’, その反対にあるものを‘願望{optative}’, 未来を‘中間{intermediate}’のように現実性の連続体の観点から解釈している.

しかし Dani 語と Senea 語はムードというよりもモーダル体系であるということが議論されうる. 三つの術語の体系があるという事実に加えて, 認識的なものと拘束的なものの両方としての‘願望{optative}’の使用はモーダル体系の典型的なものであり(4.1.1 参照), ‘事実{factual}’に付くグロスは証拠的な術語を連想させるものである. これに対する議論はモーダル体系は通常未来を含まないというものである.

若干異なるが, Alamlak 語(Roberts 1990:390)において, 異なる非現実のマーカ (それらは‘確かな{certain}’否定, ‘不確かな{uncertain}’否定と‘確かな’非現実, ‘不確かな’非現実として区別されている)とそれぞれ結びついている二つの否定の形式がある.

fiñji noh-r-fë-r
NEG.CERT die+IRR.CERT-IMM.PAST-3SG+MASC
‘He did not die’

彼は死んだ.

afë noh-rhwa-t-r
NEG.UNCERT die-FUT+IRR.UNCERT-3SG
‘He will not die’

彼は死なないだろう.

しかし見ての通り, 非現実マーカの選択は否定によって決まる. ‘確かな{certain}’非現実もまた反現実について単独で用いられている.

hik-r-fë-an-n
follow+IRR.CERT-IMM.PAST-1SG-2SG
‘I would have followed you’

私はあなたに付いていくだろう.

6.5.3 さらに広い体系

6.2 で‘非現実’という術語が時折モーダル体系のなかで術語として用いられ, そこで‘推定{dubitative}’のような術語がより望ましいと記された. しかしいくつかの言語では‘非現実’と‘現実’はより広い体系に適用されており, そこでは形式的な見方に基づいて(典型的に二元体の)ムードというよりもモ

一ダル体系の観点から分析されるべきである。しかし術語を正当化することや術語について考えることを正当化することがある一つまり術語と関連している概念的特徴（非現実に関して）は議論されてきた言語において非現実と関連している概念的特徴に類似している。

したがって Kiwa 語 (Oklahoma-Watkins 1984:170-2) では, Mithun(1999:173)によって非現実として扱われた‘未来’のマーカがある(しかし Watkins の‘未来’は以下の用例でグロスの中で用いられている)。それは明らかに未来を指し示している。

ém-cán-t'ò'-nò hégó yá-mò·khól-dò-t'ò'
2SG-arrive-IRR-and+DIFF now 2SG/1SG/PL-ready-be-FUT
'I'll have them ready when you come'

あなたが来るときに私はすでにそれらを持っていた。

hàgyà à-bá'-t'ò'
perhaps 1SG-go-FUT
'Maybe I will go'

たぶん私は行くだろう。

またそれはいくつかの（概念的に）非現実の機能のなかでも用いられる一起こったかもしれないけど起こっていないものである条件と義務。

mágyá à-bá'-t'ò'
might.but.not 1SG-go-FUT
'I thought I might go, but didn't'

私は行くかもしれないと思ったが、行かなかった。

à-th-ǝ-tó' gó à-tól
2SG+SG.OBJ-find-FUT and+SAME 2SG+SG.OBJ-send+IMP
'If you find him send him here'

もしあなたが彼を見つけたら彼をここに来させてくれ。

k'yákômdà mâ'-ǝ'-dò kyòdé á-thà-y-dò'-tó'
life indeed-good-because longtime 1PL+SG.OBJ-with-hold-FUT
'Because life is so enjoyable, we ought to hang on as long as possible'

人生は楽しむべきなので、私たちはできる限り頑張らなければならない。

そこにはまた無標の‘直接法’（＝現実？）もあり、そして命令{imperative}と‘伝聞{hearsay}’（報告(3)？）に関するマーカもある。命令は上の二番目

の例で示されている. ‘伝聞’の例は次のようなものである.

béthò· èm-kò·dó-òlt^hq -k^hop-ómdè-hél
unknowing 2SG-very-head-hurt-become-HSY
‘I didn’t know you had a headache’
あなたが頭痛だったことを私は知らなかった.

否定命令に関するマーカーもあるが, もっともこのマーカーは(結合的に)‘未来’(非現実)と共に現れる.

pòy té· mèn-tél-tó·
PROH all 2SG+DUAL-tell-FUT
‘Don’t tell them everything’

彼らにすべてを話すな.

Kiowa 語におけるこの‘未来’(非現実)は, 他の言語において非現実と関連付けられている数多の用法を持っているが, しかしそれは明らかに二元体の体系やましてや(現実, 非現実, 無標からなる)三元体の体系に属していない.

さらに疑わしい例は Mricopa 語(Yuman, Arizona-Gordon 1986a:27,109)のものである. ここで‘非現実’の接尾辞は未来, 可能性, 現実と反するもの {contrary-to-fact}を示すために(他のいかなる文法的なマーカーを伴わずに)用いられる.

ny-aay-ha
1/2-give-IRR
‘I will give it to you’
私はそれをあなたにあげよう.

haat nyi-ttpooy-nt-ha
dog+PL OBJ+PL-kill+PL.ACTION-too-IRR
‘It might kill dogs too’

それは犬も殺すかもしれない.
aanylyviim m-vaa-kis ?nym-yuu-ha
yesterday 2-come-COND 2/1-see-IRR
‘If you had come yesterday, you would have seen me’
昨日あなたが来たなら, あなたは私に会えたかもしれない.

同様に現実のマーカーは現在あるいは過去を示す(Gordon 1986a:24.25).

hot-m
good-REAL
'It is good'
それは良い.
aham-m
hit-REAL
'He hit him'
彼は彼を殴った.

しかし Maricopa 語もまた '完了した行動{completed action}' (完了相 {perfective}), '未完了相{incompletive}', '願望{desiderative}', 視覚{Visual} と非視覚{Non-visual}といった二つの証拠的なものに関するマーカーを持っている.

?-yuu-ksh
1-see-PERFV
'I saw it'
私はそれを見た.
nyaa ?-imaa-INC
I 1-dance-INC
'I can dance'
私は踊れる.
m-we-lya
2-do-DES
'Please do it'
どうぞそれをしてください.
imaa-yuu
dance-VIS
'He danced' (I saw it)
彼は踊った (私はそれを見た).
m-ashvar-?a
2-sing-NONVIS
'You sang' (I heard you)
あなたは歌った (私はあなたの声を聞いた).

またそこには命令{imperative}もあるが, これは現実と結び付いて現れる.

k-truy-m
IMP-kill-REAL
'Kill it'
それを殺せ.

‘非現実’がいくつかの機能を持った他の言語は Moa Naga 語 (Tibeto-Burman-Giridhar 1994:67-9)である. ここで非現実のマーカは未来を言及するために用いられているが, 妨げられた意図{thwarted intentions}と義務{obligation}に関しても用いられている.

ai izo ocü vuta le
I today home go IRR
'I will go home today'
私は今日家に帰るだろう.

Alemo-no oro hrü le-Ti-e
Alemo-ERG pig buy IRR-RELEV-PRED
'Alemo wanted to buy a pig, but couldn't'

Alemo は豚を買いたかったが, できなかった.
pfo-no idu ru-oTi-le
he-ERG yesterday write-IRRELEV-IRR
'He must have written yesterday'
彼は昨日書いてしまっていなければならなかった.

しかし‘非現実’は見てのとおり‘関連するもの{relevance}’と‘関連しないもの{irrelevance}’のマーカと共に起こり, それは‘推量{inference}’によって置き換えられる.

pfo-no idu ru-oTi-ahi
he-ERG yesterday write-IRRELEV-INF
'He must have written yesterday'
彼は昨日書いたに違いない.

厳密にはこれらの言語のすべてはモーダル体系を持つ言語であるが, それらは皆, 他の言語で非現実の文法的な範疇に関連する特徴を示す‘非現実’のマーカを持っている.

6.5.4 複合体系

Hixkaryana 語(Carib, N.Brazil-Derbyshire 1979:143-5)には2章で議論され

た種類の証拠的なモーダル体系と、現実 / 非現実のムードの体系という両方が現れるという点において複合した状況がある。ムードは動詞の非過去と‘不確実な{uncertain}’非過去の形式によって示されるものが現れるが、おそらくそれは現実と非現実として見做され得る（その体系もまた‘強意語{intensifier}’の小詞を含むにもかかわらず）。

単独で現われるとき、‘非過去で不確実なもの{non-past uncertain}’は質問を示す。

nomokyaha
he.come+NONPAST
‘He is coming’

彼は来つつある。

nomokyano
he come+NONPAST.UNCERT
‘Will he come?’

彼は来るだろうか？

しかし強意語の *-ha* に関して、これらはそれぞれ ‘may’ と ‘must’ を表す。

nomokyaha ha
he come+NONPAST INT
‘He must certainly come’
彼は確かに来るに違いない。
nomokyan ha
he.come+NONPAST.UNCERT INTEN
‘He may come’

彼は来るかもしれない。

他の小詞について、すべては強意語の *-ha* によって先立たれ、非過去も表す。

‘hearsay’ with *-ti*
nomokyan ha-i
he.come+NONPAST.UNCERT INT-HSY
‘He’s coming’ (they say)

彼は来つつある（彼らは言う）。

‘uncertainty’ with *-na*
nomokyan ha-na
he.come+NONPAST.UNCERT INT-UNCERT
‘Maybe he’ll come’

おそらく彼は来るだろう.

‘deduction’ with *-mí*

nomokyan

ha-mí

he.come+NONPAST.UNCERT INT-DED

‘He is evidently coming’ (on hearing the sound of an outboard motor)

彼は明らかに来つつある (船外のモーターの音が聞こえている).

‘positive doubt, scepticism’ with *-mpe*

nomokyatxow

ha-mpe

they.come+NONPAST.UNCERT INT-SCEP

‘They are coming! I don’t believe it’

彼らは来つつある！私はそれを信用できない.

非過去もまた強意語に ‘確信 {certainty}’, ‘予言 {prediction}’, ‘警告 {warning}’ といった他の小詞を足して用いられる.

nomokyaha

ha-mpi ni

he.come+NONPAST INT-PREDICT

‘He’s coming – be warned’

彼は来つつある－警告されている

これはモーダル体系の中に見出されるすべての範疇である.

Serrano 語(Uto-Aztecan, California-Hill 1967:21, そして私信によるもの)は更に複合した状況がある. そこには証拠的な小詞のセットがあり, それは ‘叙述の妥当性を特定する’ ものである. それらは以下のものである.

ha	inferential	推量
k ^w ə’ə	potential ‘can’	潜在的な ‘can’
k ^w ənə	quotative	引用
may	‘may’	‘may’
na’a	volitative	意志
pata	intensive	意図
qáy	‘not’	‘not’
ta	dubitative	推定

‘推定 {dubitative}’ は非現実のマーカーのように見える. 単独ではそれも質問を示す (質問はイントネーションによっても伝えられるが).

k^wa'i ta-m č kih^wu:či
eat DUB-PL you fish+ACC
'Are you (pl.) eating fish?'

あなたがたは魚を食べているのか？

hai:ŋk^wa ta-bi mi
to.where DUB-he+PAST go
'Where did he go?'

彼はどこにいったのか？

それは未来と推定{deductive}('推量{inferential}')と共起する.

'i:p t wahi' pinkiv
here DUB coyote pass+FUT
'The coyote will pass here'
コヨーテがここを通り過ぎるだろう.

'ama' t X ma:mč
he DUB INF hear
'He must hear it'
彼はそれを聞いているに違いない.

しかし '潜在的な{potential}' can もまた質問の指標であり (Hill との私信による), '引用{quotative}' も単独で未来を言及することに用いられる場合がある.

k^wi?-č pi yi:ʔi
POT-you you+them dry
'Can you dry them?'

あなたはそれらを乾かせるか？

pimia' kwini-č qučib
with him QUOT-we dwell+FUT
'We would live with him (so we were told)'

私たちは彼と共に生きるだろう (そのように私たちは言われている).

Hixkaryana 語と Serrano 語もここでより第二章で考察されている. なぜならそれらはムードだけではなく証拠的なモーダル体系を持っているように思われるからである. しかし両者は体系の中の項目として疑問{Interrogative}を持っており, また Hixkaryana 語は否定{Negative}も持っている. これらは少なくとも

もモーダル体系の典型というよりはムードの典型である。

6.6 命題のモダリティ

6.6.1 過去, 現在と未来

単純な過去と現在について言及されることは非常に少ない。これら（おそらく‘非未来{Non-future}’として見做されるもの）は常に現実{realis}としてマークされる。いくつかの言語は一つ以上の過去に関するマーカ―を持っている。例えば Amele 語は‘遠過去{remote past}’と‘今日の過去{today's past}’という両者を持っており、それらは現実である。

しかし現在や過去の時間に対する言及が常に現実のマーキングを含むということは事実ではないということを認識することは重要である。例えば Bargam 語(6.6.9 を参照)において習慣的な過去が非現実としてマークされたり、この章で議論される推測{Speculative}や否定{Negative}, 疑問{Interrogative}などが、仮に過去や現在の時制を言及するマーカ―があったとしても、非現実のマーキングを含む場合があるということに奇妙な点はない。常に現実であるのは、現在や過去の行動についての単純な叙述（主張{assertions}）であるに過ぎない。

反対に未来は結合{joint}と非結合{non-joint}の両体系において非現実にも一般的に関連している範疇である。確かに両タイプのパプア諸語の言語において未来が常に非現実としてマークされていることは 6.4 と 6.5.1 で示された。(結合{joint}) の Amele 語 (Roberts 1990:372) と (非結合{non-joint}) の Muyuw 語(Bugebhagen 1994:18)からすでに引用された例は以下のようなものである。

ho bu-basal-en age qo-qag-an
 pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-FUT
 ‘They will kill the pig as it runs out’
 彼らは豚が逃げる時その豚を殺すだろう。
 yey b-a-n Lae nubweig
 I IRR-1SG-go Lae tomorrow
 ‘I will go to Lae tomorrow’
 私は明日 Lae に行くだろう。

同じことがアメリカ先住民諸語のほとんどに当てはまる。Kiowa 語(6.5.3 参照)では、未来は非現実単独によって示される範疇の一つである。Takelma 語(6.3.1)では未来のパラダイムは非現実のセットの中にある。Serrano 語(6.5.4 参照)においても未来は非現実（‘推定{dubitative}’）としてマークされている。

'i:p t wahi' pinkiv
here DUB coyote pass+FUT
'The coyote will pass here'

コヨーテはここを通るだろう。

しかし Caddo 語では状況は非常に異なる。その言語では未来時制に二つのマーカがあり、両者は予期されるように非現実ではなく、現実としてマークされる (6.1 より再掲)。

ciyi-bahw-ʔa?
I+AG+REAL-see-FUT
'I'll look at it'
私はそれを見るだろう。
ciyi-bahw-čah
I+AG+REAL-see-FUT INT
'I'm going to look at it'
私はそれを見ることにしている。

中央 Pomo 語(Mithun 1995:370)でもまた状況は異なる。ここで未来は一般的に非現実と共に現れる。

té'nta-lil wá-'n-hi ʔá' qó-be-w-ʔkʰe
town-to go-IMPF-SAME+IRR I+AG toward-carry-PERF-FUT
'I'll go to town and bring it back'

私は町に行ってそれを持って帰ってくるだろう。

しかし現実のマーカは行われる出来事が起こるより高い可能性を示す代わりに用いられる場合もある(Mithun 1995:379)。

ʔá' čhó-w-da má ʔbá'-n-č̣-w-ʔkʰe
I+AG not-PERF-DIFF+SIM+REAL 2+AG suffer-DUR-REFL-PERF-FUT
'When I am no longer here, you will suffer'

私がもはやここにいないとき、あなたは被害を受けるだろう。

中央 Pomo 語と Caddo 語の違いに関する説明を求めるのは自然なことである。Chafe(1995:358)でこれに関する議論があるが、しかしそれは命令 {imperative}(6.7.1 参照)を含んでおり、それもまた現実としてマークされている。Caddo 語では非常に多くの他の範疇が「機能的に動機づけられた非現実

{Irrealis}の範疇の項」であるので、命令{Imperative}と非現実の共起することは「一貫性がない」と述べている。彼は未来と共に現実が使用されることは「特に未来がパプア諸語で非現実性の表現に対して非常に基本的であるという観点からさらに問題を含んでいる…」と続けている。彼は二つの答えを示している。最初の答えは「現実性は二元体ではなく、命令や未来が、言うならば yes-no 疑問あるいは否定よりも現実により一致すると判断される見解を表現するという段階的な次元である。話し手は命令が守られたり、叙述された出来事が行われるという強い期待を比較的持っているかもしれない」彼は北イロコイ諸語で、未来は現実と非現実の間にあると示唆している。二番目の答えは Caddo 語で命令と未来は、現実 / 非現実の区別が（疑問の動詞から）形成される前に確立されていたという通時的な説明である。しかしそのような通時的な説明は事実報告の半分に過ぎない。つまりそれはなぜ疑問と未来がそのような「機能的に動機づけされた体系」の中に吸収されなかったのかという説明を必要とする。両方の答えは真実かもしれない。

未来と非現実の密接な関連がある他の言語がある。Burmese 語では‘非未来 {non-future}’のマーカーは現在と過去の出来事を言及するために用いられるように見える。一方‘未来’のマーカーは未来の出来事について用いられる(Okell 1969:425, 426, 355, しかしかれはめったに‘動詞文のマーカー {verbsentence markers}’としてそれらを単に言及しているに過ぎない)。

săneinei-taiñ mye? hpta?-te
Saturday-every grass cut-NONFUT
‘He cuts the grass every Saturday’

彼は土曜ごとに草を刈る。
da-caũñmoú mǎ-la-ta
that-because.of not-come-NONFUT
‘So that’s why they didn’t come’
だから彼らは来なかったのだ。
mǎne?hpañ sá-me
tomorrow begin-FUT
‘We shall begin tomorrow’

私たちは明日始めなければならない。

しかし Comrie(1985:51)はその対立は時制的なものではないと指摘している。‘未来’のマーカーは現在と過去における判断を言及するために用いられる場合がある(Okell 1969:355)。

hmañ-leiñ-me
be.true-undoubtedly-FUT
‘That may be true’

それは本当かもしれない.

măcithi sà-hpù-me htiñ-te
tamarind eat-ever-FUT think-NONFUT
‘I think he must have eaten tamarinds before’

彼はタマリンドを以前食べたに違いないと私は思っている.

同様に Comrie(1985:51)は Dyirbal 語(Australian-Dixon 1972:55)の推定上の未来{putative future}時制は本質的にモーダルであるが, しかし ‘未来(‘非現実’)は現在の習慣的なことに用いられるからに過ぎない. しかし対照的に現在の習慣的なことは Burmese 語では ‘非未来{non-future}’ によってマークされる. さらに蓋然性(想定{Assumptive})などを言及する未来時制として一般的に見做されるもの, 例えば, 形態的に定義されたフランス語, イタリア語, スペイン語の未来時制の使用の数多の例がある. さらに英語の WILL は想定, 未来, 習慣的なものの概念的な機能を有する(2.1.3, 4.3.2, 6.6.9 を参照).

6.6.2 推測と推定

驚くかもしれないが, 認識的なモーダル体系のお決まりの項である **推測**{Speculative}や**推定**{Deductive}(また**報告**{Reported}も)のような認識的な範疇は, Bugenhagen(1994:36)と Roberts(1994:31)によって示されたパプア諸語において, 非現実の機能に関する一覧表に非現実と関連する範疇として挙がっていない.

アメリカ先住民諸語でそれらは時々, しかし稀に非現実に関連する. 記された 3 つのマージナルな場合がある. 第一に Takelma 語(6.3.1 参照)で ‘推量{inferential}’ は**能力**{Ability}と**推測**{Speculative}の両者に関して用いられ, ‘可能性{potential}’ は**推定**{Deductive}と**報告**{Reported}の両者に関して用いられる. 第二に, Kiowa 語(Oklahoma-Watkins 1984:171)では, **推測**は非現実に ‘perhaps’ を足すことによって示される (与えられた用例もまた未来を言及しているが, **未来**{Future}は非現実によってマークされている)

hàgyà à-bá'tó
perhaps 1SG+go+IRR
‘Maybe I’ll go’

おそらく私は行くだろう.

第三に、推測は時折非二元体の体系で見出される(6.5.2). そこでは現実, 非現実, ‘中間{intermediate}’の観点からの解釈は可能であり, 非現実は**推測**{Speculative}として解釈されている. これは Seneca 語(6.5.2 から用例を再掲)について Chafe が与えた解釈である.

waʔ-ke-kɛ-ʔ

FACT-1+AG-see-PUNCT

‘I see/saw it’

私はそれを見る / 見た.

e,-ke-kɛ-ʔ

FUT-1+AG-see-PUNCT

‘I’ll see it’

私はそれを見るだろう.

aa-ke-kɛ-ʔ

OPT-1+AG-see-PUNCT

‘I should/might see it’

私はそれを見なければならない / 見るかもしれない.

Dani 語から類似した 3 つの例は 6.5.2 でも記された(Foley 1986:163).

wat-h-i

kill-REAL-1SG+AG

‘I killed him’

私は彼を殺した.

was-ø-ik

kill-likely-1SG+AG

‘I will kill him’

私は彼を殺すだろう.

waʔ-l-e

kill-POT-1SG+AG

‘I may kill him’

私は彼を殺すかもしれない.

しかし Burmese 語(Okell 1969:355;Comrie 1985:51)では非現実(‘未来{future}’)のマーカーもまた**推測**{Speculative}について用いられる.

hmañ-leiñ-me

be.true-undoubtedly-FUT

‘That may well be true’

あれは本当かもしれない.

măcìthì sà-hpù-me htiñ-te

tamarind eat-ever-IRR think-FUT

‘I think he must have eaten tamarinds before’

私は彼がタマリンドを以前食べたに違いないと思う.

しかし一般的に**推測**{Speculative}, **推定**{Deductive}, **報告**{Reported}はムードによってマークされるようには思えない.

Hixkaryana 語と Serrano 語(6.5.4)からの言及がなされなければならない. しかしこれらはモーダルな体系とムードの体系の両方を持っているようである. Hixkaryana 語におけるモーダルな体系は**推測**と**推定**を明らかに含んでいる. Serrano 語におけるモーダルな体系は推定を含んでいる (両者は報告も持っている – 6.6.6 参照).

6.6.3 疑問

いくつかの言語で非現実のマーカーは, 他のいかなる文法的なマーカーをも伴わずに疑問を示すために用いられる (用例のいくつかはすでに挙げられたものだが, ここで再掲する).

これは Caddo 語に当てはまる(6.1).

sahʔyi-bahw-nah

2+AG+IRR-see-PERF

‘Have you seen him?’

あなたは彼に会ったか?

(モーダルな体系とムードの体系の両者を持っている – 6.5.4 参照)
Hixkaryana 語と Serrano 語も当てはまる. Hixkaryana 語から例を挙げる.

nomokyano

he.come+NONPAST.UNCERT

‘Will he come?’

彼は来るだろうか?

たとえ疑問がイントネーションによって (用例では ‘?’ で表わされている) マークされても, 可能性 {potential} が存在しなければ, 非現実 (‘推定 {dubitative}’) が疑問において必須であるという点で Serrano 語(Hill 1967:21) では状況は複雑である.

k^wa'i ta-m ɕ ? kih^wuɿɕi
eat DUB-PL you QUES fish+ACC
'Are you (pl.) eating fish?'

あなたがたは魚を食べているのか？

しかし一つの例外がある。もし‘可能性{potential}’がすでに存在するのならば (Hill との私信による), ‘推定{dubitative}’のマーカ―は要求されない。

k^wi-ɕ pi yi:ʔiʔ
POT-you you+them dry
'Can you dry them?'

あなたはそれらを乾かせるのか？

そして稀なことだが、疑問に関する他のいかなるマーカ―なしに現れるかもしれないのは可能性{potential}だけである。

しかし中央 Pomo 語(Mithun 1995:373,381)では疑問のマーカ―が求められるにもかかわらず、それはムードに影響を与えない。したがって疑問はそこに未来のマーカ―もあるとき非現実と共起するが、しかし現実と共起する場合は、そこに過去の時間のマーカ―もあるときに共起する。よって状況は疑問現在がなく、ムードが(非現実の)未来と(現実の)完了相によってのみ決定されるのと同じである。

ʔi-wa ma ša-čó-t-ʔk^he ya-l ca-l
be-INT 2+AG swinging-whip-M.E-FUT 1PL+PAT house-to
dé-m-ma-hi?
lead+PL-M.E.-COOP-SAME+IRR
'Are you going to whip us when you take us home?'

あなたは私たちを家に連れていくとき、私たちに鞭を打って駆り立てるつもりか？

t^haná da-sé-č^h-ba-wa ma ʔé chʔól-č^hi-w
hand pulling-wash-REFL-SAME+SEQ+REAL-INT 2+AG hair comb-REFL-PERF
'Did you wash your hands and comb your hair?'

あなたは手を洗って髪を梳かしたか？

Mithun(1995:380-1)は中央 Pomo 語(効果がない{no effect})と Caddo 語(非現実)の疑問のマーキングの違いについて説明を行っている。彼女はそれをス

コープの問題だとしている。中央 Pomo 語では基本的な命題が現実あるいは非現実として範疇化されており、そして尋ねられている場合がある。

QUESTION (± REALIS (PROPOSITION))

Caddo 語ではスコープの関係が逆になっており、現実 / 非現実のマーキングは疑問に対して敏感である。

-REALIS (QUESTION(PROPOSITION))

6.6.4 否定

疑問と否定はしばしば共に考察される。なぜならそれらは英語で両者共に‘非主張{non-assertion}’として包括されているように、同様な方法で機能するようであるからである—Quirk et al.(1985:83-4)参照。

それらには現実と非現実のマーキングという点で類似点がある。

Caddo 語(Chafe 1995:354,355)では否定は疑問と同様に非現実と共起する。

kúy-t'ayi-bahw

NEG-1+AG+IRR-see

‘I don’t see him’

私は彼に会っていない。

これは Mesa Grande Diegueño(Yuman, S. California – Langdon 1970:159)にも当てはまる。

ʔənya' puy ʔəxap-x-vu əwa'p-x uma'w

I there I.go.in-IRR-SPEC they.want.it-IRR they+NEG

‘They didn’t want me to go there’

彼らは私がそこに行くことを望んでいなかった。

しかし中央 Pomo 語では否定はムードに影響を与えないという点で疑問に類似している。したがってちょうど否定が現在でなければ、否定と条件の両マーカがあるところでは、ムードのマーカは非現実になるだろうし、否定と過去の両マーカがあるところではムードのマーカは現実になるであろう(Mithun 1995:374-5)。

ma me'n ʔí-w čhó-w-hla ma bé-da
 2+AG such do-PERF NEG-PERF-DIFF+IRR 2+AG this-at
 ma' baséʔ t̚habáʔč̣i-w ph-wí-w-ʔke
 things bad lie-INCH-PERF VIS-perceive-PERF-FUT
 'If you don't do that, you're going go see bad things happening round here'

もしあなたがあれをしないなら、あなたはこの辺りで起こる悪い出来事を見ることになるだろう。

ranch-ʔel q̣dí yhé-t-ač čhó-w
 ranch-the good do-M.E-IMPF+PL NEG-PERF
 ʔí-n ya-l qó-l mč̣a-w
 be-SAME+SIM+REAL I+PL-PAT out-to throw-PL+PERF
 dá-ʔ-c'í-w
 want-REFL-IMPF+PL-PERF
 'Because they didn't keep up the rancheria, they wanted to throw us out'

なぜなら彼らはメキシコの牧場労働者の小屋を維持しなかったので、彼らは私たちに引き渡すことを望んだ。

パプア諸語にも類似したバリエーションがある。Roberts(1990:378)は、否定はモーダルな位置づけ（アメリカ先住民諸語における状況を考慮していることは疑う余地がない）を持ちうるにも拘わらず、Amele 語で「否定は中間的な同時に現れる現実 / 非現実の動詞と交差しない」ということを明確に述べている。しかし彼はまた Alamblak 語でも非現実が否定と関連すると記し、そのため未来だけではなく否定過去（近過去{immediate past}と遠過去{remote past}）も非現実としてマークされるとした。

fiñji noh-r-fě-r
 NEG.CERT die-IRR-IMM.PAST-3M.SG
 'He did not die'
 彼は死ななかった。
 afě noh-rhwa-t-r
 NEG.UNCERT die-FUT-IRR.UNCERT-3SG
 'He will not die'
 彼は死なないだろう。

(6.5.2 で記したように、Alamblak 語には二つの否定マーカーがあり、それぞれが異なる非現実のマーカーと関連している)

同様に Bugenhagen(1994:19)は、彼が提示した 8 つの言語の一つである Muyuw 語について、否定はムードに関してマークされないかあるいは次の例のように過去と現在の両方に関して非現実（現実としてではなく）としてマークされるかのいずれかであると報告している。

nag i-n wa-ven

NEG 3SG-go to-village

‘He is not going/did not go to the village’

彼は村に行くつもりではない / 行かなかった。

nag b-ei-n wa-ven

NEG IRR-3SG-go to-village

‘He is not going/did not go to the village’

彼は村に行くつもりではない / 行かなかった。

Mithun(1995:381-2)は彼女が疑問について行ったように、否定の現実 / 非現実の位置づけにおいて、バリエーションに同じ説明を行っている。それはスコープの事柄である。

Central Pomo NEGATIVE (± REALIS (PROPOSITION))

Caddo -REALIS (NEGATIVE(PROPOSITION))

6.6.5 否定に類似した範疇

概念的にある程度否定的である範疇あるいは表現に関して非現実を使用する例がいくつかある。

したがって稀なこと {infrequentative} は Caddo 語(Chafe 1995:357)において非現実と共起する。

wás-t’a-yibahw

INFREQ-1+AG+IRR-see

‘I seldom see it’

私はそれを滅多に見ない。

これは否定のタイプとして最も見られるものである。なぜなら文は概して私はそれを見ないことを含んでいるからである (*Seldom* は英語で ‘半否定 {semi-negative}’ である -Palmer 1987:22 参照)。

2.4 で議論された ‘予想に反するもの {contrary to expectation}’ のようなものというよりは、何らかの点において果たせなかった出来事あるいは、もはや保てない状態にある出来事を言及するために非現実が用いられる例もまたいくつかある。したがって Kiowa 語(Oklahoma-Watkins 1994:171)で非現実は行動

がされたかもしれないが、できなかったことを示す場合がある(6.5.3 より再掲).

mágyá à-bá·t'ɔ'
 might but not 1SG-go-IRR
 'I thought I might go, but didn't'

私は行けるかもしれないと思ったが、行かなかった。

Tolkapaya Yavapai 語(Yuman, California-Hardy and Gordon 1980:189-92)で幾分類似した状況がある. そこには接中辞である *th* があり, それは 'モーダル' とラベル付けされるが, しかしそれは '非現実' とラベル付けされる他の小詞があるという事実にもかかわらず, 非現実のマーカーにより類似しているように見える. この 'モーダル' な接中辞は多くの機能を有するが, 3つのタイプに分類されるだろう.

- (i) It is used for unreal conditions and (unreal) wishes:

m-vaa-th-m ny-'u-h yi-tha
 2-came-MOD-DS 1/2-see-IRR AUX-MOD
 'If you had come I would have seen you'
 ma-ch'-yu-th-k wal'-yii-k 'yum
 1-SUB-be-MOD-SS I-wish-SS I-be
 'I wish I were you'

- (i) 非現実{unreal}の条件{conditions}と (非現実) の願望{wishes}
 あなたが来たなら私はあなたに会ったのに.
 私はあなたがいたらと思う.

- (ii) It is used after 'try':

'wi 'yoov-a-k '-wi-th-k '-yum
 money 1/3-make-IRR-SS I-do-MOD-SS I-be
 'I'm trying to make money'

- (ii) 'try' の後に用いられる.
 私はお金を稼ごうとしている.

(iii) It is used for ‘what used to be (but is no longer)’:

ma-ch m-se-ch m-yu-th-k m-yum

you-SUB 2-fat-SUB 2-be-MOD-SS 2-be

‘You used to be fat’

‘-ima-th-k ‘-tlahv-k ‘-yum

1-dance-MOD-SS 1-tired-ss 1-be

‘I was dancing, but now I’m tired’

(iii) ‘かつての状態（しかし今はその状態ではない）’について用いられる。

あなたはかつて太っていた。

私は踊っていたが今は疲れている。

重要な点は (iii) における形式は以前そのようだったが、今では異なるということ表現していることである（これはおそらく 6.6.9 でなされた習慣的過去の議論と関連しているかもしれない。なぜなら習慣的過去は過去の行動がもはや続いていないということも示唆しており、その結果これは習慣的過去が非現実としてマークされうる理由の一つとなっているのである）。

Nakanai 語(Papuan-Johnston 1980:64, Bugenhagen1994:24-5によって議論された)における二つの非現実のマーカは若干異なる。一つは‘切迫していない非現実{non-imminent irrealis}’の *ge* は未来, 疑い{doubt}, 可能性{possibility} といった非現実に関連する典型的な範疇を表すために用いられる。他方‘切迫した非現実{imminent irrealis}’の *ga* は Bugenhagen が以下のように‘almost’ がより良い解釈であるとしたにもかかわらず, Johnston によると‘切迫したあるいは挫折した行動の概念を符号化する’ことを表すのに用いられるとされている。

eau ga tuga so-io, ouka

1sg IRR walk to-there, not

‘I was about to proceed, but didn’t’

私は進みそうだったが、しなかった。

eau ga la-lea

1SG IRR RED-sick

‘I’m getting sick’

私は病気になりつつある。

(‘切迫していない非現実{non-imminent irrealis}’の例は 6.7.2 を参照)

挫折した行動の類似した用例は 6.5.3 にて Mao Naga 語について挙げられている（ここで再掲する）。

Alemo-no oro hrü le-Ti-e
 Alemo-ERG pig buy IRR-RELEV-PRED
 ‘Alemo wanted to buy a pig, but couldn’t’

Alemo は豚を買うことを望んだが、できなかった。

6.6.6 報告

報告は数多の証拠的なものの体系の範疇の一つとして現れる(2.2.2 参照)。したがってムードに関して非現実としてマークされる範疇の一つであると予想されるが、しかし唯一記された例は 6.5.4 で議論された二つの言語のうち一つからのものであった。それはムードとモータル体系の両者を持っているように見える。これは Hixkaryana 語(Carib, N.Brazil-Derbyshire 1979:143-5)であり、‘伝文{hearsay}’は‘不確かなもの{uncertain}’と共起し、それは非現実のマーカである。

nomokyan ha-tt
 he.come+NONPAST+UNCERT INT-HSY
 ‘He’s coming (they say)’
 彼は来つつある (彼らは言う)。

6.5.4 で議論された他の言語は Serrano 語(Uto-Aztecan, California-Hill 1967:89)であったが、しかしそこでは非現実のいかなるマーカなしに‘引用{quotative}’ (=報告(3){Reported(3)}?) だけで現われ得る。

pɪmia’ k^wɪnt-č quçib
 with.him QUOT-we dwell+FUT
 ‘We would live with him (so we were told)’

私たちは彼と暮らすだろう (そのように私たちは言われた)。

6.6.7 前提

Chafe(1995:357)は賞讃{Admirative}の接頭辞 *hús* と共に用いられる非現実のマーカの例を Caddo 語(Oklahoma)から挙げた。

hús-baʔa-sayi-k’awih-saʔ
 ADM-1+BEN+IRR-name-know-PROG
 ‘My goodness, he knows my name’

まあ、彼が私の名前を知っているなんて。

Chafe は「この最後の用法は恐らく驚くべきものである」なぜなら「その出来事あるいは状態は十分に現実である」からである。またそれが期待に反するという事実は非現実の使用に責任があることを示唆し、「あたかも『彼が私の名前を知っていることは非現実的だ』と話し手が言っていたかのようである」とした。しかしそれは前提されていることに対するスペイン語とイタリア語における接続法の使用よりも決して驚くべきことではない。その訳文が「彼が私の名前を知っている所以我は驚いている」であるならば、明らかになるだろう。新情報がないという説明は Caddo 語における非現実のこの使用について等しく妥当である。

6.6.8 条件

Caddo 語(Chafe 1995:356)における条件{Conditional}は非現実としてマークされる。

hí-t'a-yibahw
COND-1+AG+IRR-see
'If I see it'
もし私がそれを見るなら。

概念的に類似している他のマーカー、つまり一般的な条件{generic conditional}やそぶり{simulative}もまた非現実としてマークされる。

nas-t'a-yi-bahw
gen COND-1-AG+IRR-see
'Whenever I see it'
私がそれを見るときはいつも。
dúy-t'ayi-bahw
SIMULAT-1+AG+IRR-see
'As if I saw it'
私はあたかもそれを見たように。

同様に中央 Pomo 語(Mithun 1995:370)では、非現実{unreal}だけが条件のマーカーを持っているにも拘わらず、現実{real}と非現実{unreal}の条件(8.1 参照)の両者が非現実としてマークされている。

wa-q-hi ?e ló'-h-du-w?k^{he}
go-level-SAME+IRR COP help-IMPV-IMPV-PERFV-FUT
'If I go, I'll be helping out'

もし私が行くなら私は手伝うだろう。

me'n mí-hla mu'l ʔa' ʔčhá'ʔle ʔa'

so say-DIFF+IRR that 1+AG sit+COND 1+AG

'If she said that, I'd stay longer'

もし彼女がそれを言うなら、私はもはや留まれないだろう。

(この‘条件{conditional}’もまた義務を表すのに用いられる—6.7.3 参照)

Bugenhagen(1994)によって考察された言語に、条件に関する興味深い状況がある。彼が‘反現実{counterfactuals}’と‘仮説的{hypotheticals}’と呼んでいるものを区別している。Bugenhagen の術語の選択が現実{realis}と非現実{irrealis}を混同する危険を避けるものであるのは明白であるにも拘わらず、そこには‘非現実{unreal}’、‘現実{real}’の条件(8.1 参照)と呼ばれてきたものがある。しかしパプア諸語が異なる方法で条件におけるムードを扱うという点において、この意味での‘不確実性{unreality}’と‘非現実性{irreality}’という、この異なる二つの間に本当の相互作用があるように見える。一般的に両タイプの条件節は Manam 語のように非現実{irrealis}としてマークされる。

ʔáti téʔe-o ɲa-pára-ra Bogiá n-láʔa

boat one-3SG IRR-arrive-assume Bogia 1SG+IRR

'If a boat should come, I would go to Bogia'

'If a boat had come, I should have gone to Bogia'

ボートが来たら、私は Bogia に行かなければならないだろう。

ボートが来たら、私は Bogia に行かなければならなかった。

しかし Sursurunga 語では、きわめておかしいことに、反現実{counterfactual}(unreal)の条件の前提(if clause)は現実としてマークされている。

ngo á-k-te han balbal us i ráin na

if 3SG+REAL-DEF-EMPH go again blow SUBJ rain 3SG+IRR

han kopkom kuluk á namnam

go grow good SUBJ food

'If it had kept on raining regularly, the crops would have grown well'

雨が規則的に降ったなら、作物はよく育っただろう。

Bugenhagen によって引用された言語の一つの中で唯一 Sinangoro 語は仮説と反現実の区別が現実、非現実といった両方の節において現実と非現実によってきわめて単純にマークされている。仮説だけが現実のマーカに関して例示されている。

yema yasi be iayoma-ni nai, ba iayo-ni
if canoe 3SG+REM+REAL come-IMP time 1SG+REM+REAL go-IMP
'If the canoe comes, I will go'

カヌーが来たら私は行くだろう。

6.6.9 習慣的過去

2.4 で言及されたように Bargam 語(Papua-Roberts 1990:384, 未刊行の原稿からの引用)では非現実に関して習慣的過去が共起することはおそらく少し驚くべきことである。

miles-eq leh-id teq anamren aholwaq-ad in
return-SS+IRR go-DS+IRR then owner see-SS+SIM 3SG
didaq tu-ugiaq
food PERF-give+HAB.P+3SG
'When (the pig) would return and then the owner would go and, on
seeing it, used to give it food'

(豚が) 戻ったとき、飼い主は行き、豚を見るや餌をあげたものだった。

しかしなぜこれが非現実として扱われるべきなのかを考察することは可能である。過去時制に対する言及は通常現実として扱われるにもかかわらず、ここで関連することは習慣的過去が過去における特定の行動に関連するのではなく、行動する傾向と関連するものなのである。確かに Givón(1994:323)は、習慣的なものは現実のいくつかの特徴(より高度に主張されている確実性)と非現実のいくつかの特徴(特定の一時的な言及の欠如、すなわち特定の証拠の欠如…)を分かち合っている‘混成モダリティ{hybrid modality}’であると示唆している。

さらにそこには他の言語で類似した例がある。2.4 で記したように Kashya 語には証拠的な接尾辞があり、それは‘遠いもの{Remote}’を示す一遠過去における(習慣的な?)過去(Oswalt 1986:40)である。

men ši-yi?ci?-thi-miy
this do-PL+HAB-NEG-REM
'They never used to do that in the old days'
彼らは決して昔のようにしよとしなかった。

Tolkapaya Yavapai 語が以前は真であったけれども、今ではもはやそうではないということを表すために非現実のようなマーカーを持っていることもまた関連があるかもしれない。これは 6.5.6 で議論された。

また Manam 語において ‘習慣の連続{sequences of customary}あるいは習慣的な行動{habitual activities}’ に関する接頭辞が非現実であるにもかかわらず、習慣的な出来事に関する接頭辞が現実であるということと、Dyibal 語(6.6.1)において非現実として見做されるものが未来あるいは習慣的な出来事を言及する場合もあるということが思い出されるかもしれない。さらに Chung and Timberlake(1985:221)が指摘しているように、英語は習慣的な行動を表すためにモーダルな動詞を用いる。

We would go for a walk most weekends

私たちはほとんどの週末を散歩したものだ。

しかしこの観点は異論が唱えられた(Bybee *et al* 1994:236-40; Bybee and Fleischman 1995b:9-10)。7.3 にて大いに議論されるだろう。

6.7 出来事のモダリティ

6.7.1 命令と指令

3.4 で記したように (また 5.4 においても)、命令{commands}の二つのタイプはしばしば文法的に区別される。二人称の命令のみがあるという意味において、聞き手あるいは複数の聞き手にのみに向けられたものだけが通常命令{imperative}として扱われる。他のすべては、‘勧告{hortative}’という術語も用いられるが、非現実として扱われる。これらは英語では通常 Let や一人称あるいは三人称のいずれかによって紹介されている。

中央 Pomo 語では、命令{imperatives}と指令{jussives}は例(6.3.2)で示されたように、非現実と共起する。

qhá č̣ni-ʔel dó-č̣hi múʔtuya-l
water bread-the make-SEMEL-SAME+IRR 3PL-PAT
qa'-wá-č̣-ka-m
biting-go-IMPV+PL-CAUS-IMP
‘Make the water bread *and* invite them to eat it’

水のパンを作りなさい。そしてそれを食べるために彼らを招きなさい。

ya-ka háy ṣ̌-dí-č̣-ma-hi
I+PL+AG-INF wood drag-carry-INCH-COOP-SAME+IRR
q̣ha-kay ṣ̌-dí-č̣-ma-w-ʔḳhe
water-too dragging-carry-INCH-COOP-PERFV-FUT
‘Let’s get some wood and haul in some water’

いくつか桶を手に入れて、水に運ぼう。

Takelma 語(6.3.1 参照)では二つの命令{imperative}があり, それは即座に実行される命令{commands}に関する命令{imperative}と, 後の行動に関する未来の命令{imperative} (他の例については 3.4 参照) である. 両者は非現実としてマークされる.

対照的に Maricopa 語(Yuman, Arizona-Gordon 1986a:25)において, 命令{imperative}は現実と共起する.

k-tpuy-m
IMP-kill-REAL
'Kill it!'
それを殺せ!

同じことが Caddo 語(Chafe 1986:358)にも当てはまる.

yah?-yibahw
I+AG+REAL-see
'Look at it'
それを見ろ.

Chafe は命令法を非現実をマークするものとしてみるのが '首尾一貫していない{inconsistency}' と考え, 2つの可能な説明を提案している. これは 6.6.1 ですでに議論された.

これは 6.6.1 で議論された.

他の理由がなければ Caddo 語と中央 Pomo 語において '禁止{prohibitives}' (否定命令) が非現実としてマークされることを記すのは有益である. Caddo 語では命令{imperative}は現実としてマークされるが (6.1 参照), そこには非現実と共起する禁止のマーカーがある.

kaš-sah?-yibahw
PROH-2+AG+IRR-see
'Don't look at it'
それを見るな.

中央 Pomo 語では命令{imperative}は非現実としてマークされ, 否定も現れるとき, 命令は依然として非現実のままである.

dá'wi ?čh-č-hi khyá swé-lan?khe-ṭhín ?e ma
on road stop-SAME-IRR game play-NEG it.is you
'Don't stop and play on the way home'
止まらず, 家に帰る途中に遊ぶな.

そして Caddo 語では否定命令は否定のため非現実であるが、一方中央 Pomo 語では命令{imperative}のため、非現実である。再び Mithun(1995:383)はスコープの観点から説明を行っている(6.6.3, 6.6.4 参照)。

Central Pomo	NEGATIVE (–REALIS (IMPERATIVE))
Caddo	–REALIS (NEGATIVE (IMPERATIVE))

しかし Kiowa 語(Oklahoma-Watkins 1994:172)では命令はムードマーカールを持っていないため、‘禁止{prohibitive}’だけが非現実としてマークされる(6.5.3 より再掲)。

pòy té· mèn-tél-tó·
 PROH all 2SG+DUAL-tell-IRR
 ‘Don’t tell them everything’
 彼らにすべてを話すな。
 à-th-ǵ-tó· gó à-tól
 2SG/SG-find-IRR and+SAME 2SG/SG-send-IMP
 ‘If you find him, send him here’
 もしあなたが彼を見つけたら、彼をここにやってくれ。

対照的に Sursurunga 語(Papuan-Bugenhagen 1994:16)では命令{imperative}において非現実のマーキングがあるが、‘禁止’ではない。

u-na rumrum i mama-m mai kaka-m
 2SG-IRR respect OBJ mother-2SG and father-2SG
 ‘Respect your father and mother’
 あなたのお父さんとお母さんを尊敬しなさい。

6.7.2 ‘強い’そして‘丁寧な’命令

多くの言語は現実 / 非現実のマーキングを使い分けることによって‘強い{strong}’と‘丁寧な{polite}’命令{commands}の区別をする。したがって Alambalak 語(Roberts 1990:390-1, Bruce 1984:137,140 より引用)では、命令{imperative}と勧告{hortative}（つまり指令{jussive}）の両者は非現実のマーカールなしに用いられる。6.5.2 からの例を再掲する。

nuat wa-ya-n-t
 sago.patty IMP-eat-2SG-3F.SG+OBJ
 ‘Eat the sago patty!’
 サゴのパテを食べろ。

nuat a-ya-nēm-t
sago.patty HORT-eat-1PL-3F.SG+OBJ
‘Let’s eat the sago patty’
サゴのパテを食べよう.

しかし命令{imperative}と‘勧告{hortative}’の両者はまた、未来の累積した具現形と非現実, ‘勧告’ / 命令{imperative}を示しているものとして解釈されているマーカーと共に用いられる場合がある.

(nikë) wa-roh-twa-kë
(2PL) IMP-sit-FUT+IRR+IMP/HORT-2PL
‘Would you be seated’

座りませんか.

(rër) a-roh-twa-r
(3SG) HORT-sit-FUT+IRR+IMP/HORT-3M.SG
‘May he be seated’
彼が座りますように.

そしてここで非現実を伴ったマーキングはより丁寧な命令{command} (命令{imperative}と指令{jussive}) をなす.

同様に Nakanai 語(Johnston 1980:62)では命令{imperative}と‘禁止{prohibitions}’ (否定命令) はムードのないマーカーと‘切迫していない{non-imminent}’である非現実のマーカー *ge* (6.6.5 参照) の両方について表わされるのに用いられる場合がある. 訳はマークされていない文がより強い命令を表していることを示している.

tola egite so-ma
call 3PL to-here
‘Call them here’
ここに彼らを呼べ.
amutou ge lolo-a
2PL IRR hear-3SG
‘You are to listen’
あなたは聞かなければならない.
umala kokue-a
don’t hit-3SG
‘Don’t hit him’
彼を叩くな.

eme umala ge kokue-a

2SG don't IRR hit-3SG

'You must not hit him'

あなたはかれを叩かなければならない.

若干異なるが Jamul Diego 語(Yuman-Miller 1990:119)では, 二つのタイプの命令{command}があり, どちらも命令{imperative}のマーカーではない. 丁寧さに関して '強い' 形式は非現実の接尾辞を持ち, 一方その他は特別な二人称の接頭辞と非現実ではない接尾辞を持つ.

nya-m-mápa-pu m-rar-x-s

INDEF-2-NOM+want-DEM 2-do-IRR-EMPH

'Do whatever you want'

あなたが望むことを何でもしなさい.

k-naw

2-run

'Run'

走れ.

これらの例は接続法によって表わされる丁寧な命令があるヨーロッパ諸語の状況と共通するものを持っているように見えるかもしれない. これはイタリア語とスペイン語(5.4.2 参照)で例証された. そこでより強い丁寧さは接続法だけではなく三人称を用いることによってなされる.

Italian

entri

pure

enter+3SG+PRES+SUBJ if.you.please

'Please come in'

イタリア語

どうぞお入りください.

Spanish

Tome

su libro

take+3SG+PRES+SUBJ your book

'Take your book'

スペイン語

あなたの本を取ってください.

Amele 語(Roberts 1990:384)では強い命令と丁寧な命令は非現実としてマークされるが, 異なる方法でなされる. 強い命令{command}の語末動詞は命令

{imperative}でマークされ、一方丁寧な命令{command}の語末動詞は非現実（命令{imperative}のマーカを伴わずに）として単純にマークされるという点で明確な対立がある。

h-og-a
come-2SG-IMP
'Come!'
来い！
ho-ho-m
SIM-come-2SG+DS+IRR
'Would you come'
お入りください。

しかし強い命令{imperative}（それ自身は非現実としてマークされていない）でさえ連結された節{linked clause}において中間動詞{medial verb}は次のように非現実としてマークされる（6.3.2 より再掲）。

ho bu-basal-en age qo-ig-a
pig SIM-run.out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-IMP
'Kill the pig as it runs out'
豚が逃げだすとき豚を殺せ。

もう一つのパプア諸語である Bargam 語(Roberts 1990:384, 未刊行の原稿から引用)では類似した状況がある。

ni bol
2SG come+IMP
'Come!'
来い！
ni bol-eq
2SG come-SS+IRR
'Would you come'
お入りください。

6.7.3 義務

Caddo 語では非現実と共に現れる義務のマーカがある（6.1 より再掲）。

kas-sa-náy? aw
OBL-3+AG+IRR-sing
'He should/is obliged to sing'
彼は歌わなければならない / 歌う義務がある。

中央 Pomo 語にもまた弱い義務に関するマーカがあるが, これも条件のマーカである(6.6.8 参照).

cá-w-h̥təw ʔé'y-yo-hi táwɦal da-čé'-ʔle
house-LOC-from away-go-SAME+IRR work handling-catch-COND
'He should go home and get a job'

彼は家に戻って仕事を得るべきだ.

Kiowa 語(Oklahoma-Watkins 1984:172)では非現実未来や起る可能性があったが起らなかったことに関して用いられるにもかかわらず, 非現実のみが弱い義務を表す場合がある (6.5.3 参照).

k'yákômdà mã'-q.'-dò kyóde á-thà-y-dò'-tó'
life indeed-good-because longtime 1PL+SG.OBJ-with-hold-FUT
'Because life is so enjoyable, we ought to hang on as long as possible'

人生は楽しむべきなので, 私たちはできる限り頑張らなければならない.

パプア諸語では義務は通常補語を伴った義務のマーカによって表わされる(6.6.3 参照).

6.7.4 能力

Takelma 語(6.6.2 参照)では拘束的な能力と一般的な可能性でもある '可能性 {potential}' として言及される体系がある.

パプア諸語では義務同様, 能力は通常能力を示すものに補語を足す形式によって表わされるが, Muyuw 語(Bugenhagen 1994:19)からの例は非現実と結びついて用いられる文法的なマーカとして解釈される場合がある(6.3.3 参照).

kadiloka b-i-vag
ABILITY IRR-3SG-do
'He can do it'
彼はそれができる.

7 接続法と非現実

この章では先の二つの章で述べられてこなかった、あるいは十分には述べられなかった接続法と非現実に関する多くの事柄について扱う。

7.1 類似点と相違点

直接法 / 接続法に関する異なる術語を使う決まりと、それらを異なる章で扱う決まりは数多の考察によるものである。

部分的には異なる伝統の結果によるものである。‘直接法’という術語と‘接続法’という術語はヨーロッパ諸語の古典語や近代語の記述で用いられた伝統的な術語であり、妥当ではないにもかかわらず、それらは他の言語について多くの研究者によって用いられてきた。Bybee *et al.*(1994:236)によると、膨大なコーパスの中で記された‘現実’と‘非現実’という術語の最初の使用は Capell and Hinch(1970)におけるオーストラリア諸語の Maung 語の記述にある。これらの術語はアメリカ先住民諸語や太平洋沿岸の諸語、特にパプアニューギニアの諸語における研究者の研究で好んで用いられてきた。しかしこれらの言語における研究は古典的な伝統を知らないということではないようなので、この決まりはおそらく調査された資料が表わす認識された相違点によるものであろう。

示唆されるかもしれない一つのあり得る違いは、ヨーロッパ諸語におけるムードは人称、数、時制、態が緊密に融合された形態的統語的な範疇であるということである。4つの範疇は独立してマークされるのではなく、語彙項目マーカーだけではなく、すべての文法的マーカーが同時に起こる形式なのである。それぞれの形式は Matthews(1991:174)が人称、数、時制、ムード、態の‘累積した具現形’と呼んでいるものである。そのような文法範疇の累積した具現形（通常、といっても常にではないが、語彙項目の累積した具現形）はもちろん‘屈折’と呼ばれている言語の本質的な特徴である。

‘現実’、‘非現実’として特徴付けされる言語におけるムードは 6.3.1 で例証されたように、しばしば単独の語あるいは個々の接辞と接語によってマークされる。しかし Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:352-3)に関する章で示されたように累積した具現形もまた見出される。ここでは (i) 人称——人称、二人称、三人称そして‘脱焦点化{defocussing}’、(ii) 文法的な関係(Palmer 1994 参照)の動作主、受動者、そして受益者、その他に (iii) 現実と非現実といった累積した具現形である接頭辞があることが記された。以下に例を挙げる(6.3.1 から再掲)。

	Agent	Patient	Beneficiary
Realis prefixes			
1st person	ci-	ku-	ku-
2nd person	yah?-	si-	si-
Irrealis prefixes			
1st person	ta-/ti-	ba-	ba-
2nd person	sah?-	sa?a-	sa?u-

上の表の受動者と受益者の三番目のペアの形式が同じものによって示されているように、屈折の特徴であるいくつかの融合{syncretism}もある。類似した特徴について Takelma 語と Alsea 語といった他の言語は 6.3.1 でも議論されたように、Takelma 語はラテン語と非常に類似した形態論的な体系を持っていると記された。

一つの類似点は概念的な非現実の特徴がすでに文中で他のところにマークされているという点において、接続法と非現実の両マーカはしばしば冗長である。しかしそこではまた大きな違いもある。接続法は概して従属節においてのみ冗長であり、そこでは従属させる動詞はイタリア語のように明確に概念的特徴を示している。

Gli hanno ordinato che tacesse
to.him they.have ordered that be.quiet+PAST+SUBJ
'They ordered him to be quiet'

彼らは彼に静かにするよう命じた。

接続詞 *che* を伴っている命令の動詞の後に接続法を使用することは義務的である。対照的に非現実のマーカは一般的に主節で現われるが、そこでは Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:356)における義務のマーカのように概念的に非現実である文法マーカと共起する。

kas-sa-náy?aw
OBL-3+AG+IRR-sing
'He should/is obliged to sing'

彼は歌わなければならない/歌う義務がある。

統語的に冗長性がある構文は非常に異なる。一見主節におけるそれらの機能が考慮されさえしているならば、接続法と非現実に関連する概念的特徴は異なって現れるかもしれない。なぜなら主節において接続法に関連する概念は疑問、

否定{denial},あるいは未来性(稀な場合を除いて)を含まないが,一方これらは一般的に非現実に関連している。しかし従属節でこれらの概念的特徴はしばしば接続法に関連しており,しばしば冗長的である—5.2.3, 5.2.4, 5.2.6 参照。

おそらく最も驚くべき特徴の一つは非現実と接続法が話し手と聞き手が了解している前提されたことを示すために用いられることである(再び従属節の事柄に関することではあるが)。したがって接続法は以下の例のようにスペイン語の従属節で用いられる。

Sp. Lamento que aprenda
It. Mi dispiace che impari
I regret that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I regret that he learns/is learning'

私は彼が学ぶ / 学んでいることを後悔している。

同様に非現実には Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:357(6.6.7 参照))で‘称賛 {admirative}’について想定されているものを示すために現れる。

hús-baʔa-sayi-k'awih-saʔ
ADM-1+BEN+IRR-name-know-PROG
'My goodness he knows my name'

おや,彼は私の名前を知っている。

7.2 二元体の体系

本書で幾度も示されたことだが,基本的に(プロトタイプ的に)現実 / 非現実の違いは,直接法 / 接続法と現実 / 非現実によって与えられた対立 or で見られる対立によって描かれたように二元体である。しかし反例であるように見える例が明らかに存在し,これらが今考察されなければならない。

現実 / 非現実という対立の二元体は,それがたいてい確立されているにもかかわらず,モーダルな体系に対して決定的ではなく,モダリティの全体的な範疇のなかでモーダルな体系とムードが結び付いているという点において関与的である。例えば英語で無標の叙述{Declarative}とモーダルな動詞に関する構文の対立がある。同様に証拠的なものの体系に関して多くの言語では無標の形式とモーダルな体系を形成する数多のマークされた項目がある。これらの言語では現実と非現実の対立があることが示され得る。しかし Tuyuca 語で無標の形式が現れず,中央 Pomo 語ではまったく対照的な状況があるという事実によって示されるように,その分析は決定的なものではない(2.7.1 参照)。

直接法 / 接続法の対立に関して,二つの問題がある。最初に指令{jussive}と

命令{imperative}に関する形式もまたあるということである。しかし指令と命令はそれらが時制についてマークしない（滅多にしない）という点で直接法と接続法のように完全に屈折されているわけではない。二番目の問題は古典ギリシャ語は他のふたつに付け加えて願望法{optative}を持っているということである。しかし接続法と願望法の違いはムードというよりも時制（‘モーダルな時制’）の一つであると論じられ得る(8.2 参照)。

現実 / 非現実というマーキングがある言語に関しては状況は幾分明確ではない。しかし例えば Caddo 語(6.1)のように結合のマーキングに関する言語のほとんどは二元体の対立がある。特に興味深いことは Amele 語であり、そこでは現実 / 非現実のマーキングは言語全体に拡張していないが、異なる主語を持った連結された節に制限されている。しかし重要なことはマークすることが必要とされる場合、それが二元体になるということである。若干問題なのは、現実と非現実としてマークされたものとマークされていない形式がある状況であるが(6.5.2)、しかしまたもや二元体のマーキングがあるという状況である。しかしいくつかの言語では‘現実’と‘非現実’としてラベル付けされる形式は、より広範囲な体系において単に二つの項目に過ぎないということが許容されなければならない(6.5.3)。しかしそこでも概念的特徴は本質的に他のところで**現実**と**非現実**に関連するものであると論じされ得るので、より広い体系の中に**現実** / **非現実**の対立がある。あるいはその代わりにそのような体系はムードよりもモーダル体系の観点から扱われ得る。

7.3 現実 / 非現実の類型論的な位置づけ

基本的な疑問は、ここでムードの観点（モーダルな体系にも適用しうるが）から例証されたように**現実**と**非現実**の相違点が類型論的な妥当性を持つ一貫して類似した範疇であるか否かということである。これは Bybee *et al.*1994 によって議論されている (Bybee and Fleischman 1995b:9-10, Bybee 1998 も参照)。そこには 4 つの主な論点がある。

- (i) The distinction is rarely realized in a language as a simple binary morphological distinction.
- (ii) Irrealis and Subjunctive markers are often semantically redundant in that the meaning is carried by some other element in the context.
- (iii) There is great variation in the notional features marked by them, which makes it difficult to circumscribe a focal meaning for them.
- (iv) Some of the notional features appear to be wholly inappropriate.

- (i) 相違点は単純な二元体の形態論的な相違として稀に具現化する.
- (ii) 文中で他のいくつかの要素によって意味がもたらされるという点において**非現実**と**接続法**のマーカ―はしばしば意味的に冗長である.
- (iii) それら（**非現実**と**接続法**のマーカ―）によってマークされた概念的特徴には数多のバリエーションがあり, それは**非現実**と**接続法**の? 焦点があつた意味を描くことを困難にしている.
- (iv) 概念的特徴のいくつは総じて不適切なものとして現れる.

「現実 / 非現実」は, ある言語の中で二元体の形態論的な相違として稀に具現化する」(Bybee *et al.* 1994:237-8)という最初の論点は, 「…基本的な区別は二元体的なものであるが, しかしこの方法でそれを表す言語はほとんどない」というパプア諸語について Foley が記述した解釈である. Foley は多くの言語が「現実{real}から非現実{unreal}へと続く連続体に沿った数多の区別」をなすということを示し続けている. それにもかかわらず二元体の区別が見出されるという点において数多の言語があり, そしてそれらの多くは先の二つの章で詳細に例証されてきた. Roberts(1994:7-8)は二元体の区別がマークされているという点で言語の膨大なリストを供給し, さらに多くのものが Bugenhagen(1994)で見出されている.

二番目の論点は最初のもののように, むしろ大げさである. 接続法と非現実の両マーカ―がしばしば冗長であるというのは紛れもない真実である. Bybee *et al.*(1994:10)は「**非現実**マーカ―が機能的に冗長である中で, いわゆる非現実マーカ―によってあるいは他の要因 (語彙または形態的統語的な) によって, 発話のモーダルな意味が明確に与えられるかどうかを数多の用例の中で決めることは難しい」と述べている. しかしこれがそうではないとした先の二つの章における多くの用例がある. したがって主節における接続法は概して直接法と対立する (5.5.1 参照). 従属節でさえそれらの間にしばしば選択がある. 例えばイタリア語とスペイン語における命題に関するためらっていること {hesitancy} の程度による, あるいは命題は仮説的であるという程度による信用の動詞に関してである. 同様に Mithun(1995:379)は「現実」と「非現実」の未来は区別可能であるので, 非現実のマーカ―が冗長ではないということを示す非常に明確で興味深い例を南 Pomo 語から挙げている. 現実に関しては, 未来は確かに起こるものとして出来事が描かれていることを示しており, 一方非現実のマーカ―は不確かなことを示している. 用例は次のようなものである (6.6.1 から再掲).

té·nta-lil wá·n-hi ?á· qó-be-w-?k^{he}
 town-to go-IMPF-SAME+IRR 1+AG toward-carry-PERF-FUT
 'I'll go to town and bring it back'

私は町に行き、それを持ってくるつもりだ。

ʔáː ʧó-w-da má ʔbáː-n-č̣i-w-ʔkʰe
 1+AG not-PERF-DIFF+SIM+REAL 2+AG suffer-DUR-REFL-PERF-FUT
 ‘When I am no longer here, you will suffer’

私がここにいなくなったら、あなたは苦しむだろう。

さらに重要なことに、結合マーキングがあるところにのみ冗長さがありうる (6.4 参照)。マーキングが非結合であるところでは、明らかに冗長ではなく、過去－現在と未来時制とを区別できる場合がある。

そして事実は最初の二つの議論を弱めるかあるいは否定するように思われる。三番目は扱いが多少難しい。なぜなら**非現実**あるいは**現実**として文法的に扱われているもの、特に現実 / 非現実の観点から扱われているムードの言語において、言語には非常に多様なバリエーションがあるということが認められなければならないからである。したがって Chung and Timberlake(1985:241)は「出来事が現実{actual} (現実{realis})のムードによって形態論的に表わされている」対非現実{non-actual} (非現実のムードによって表わされている) として評価されることについて言語は明確に異なる」と述べている。Bybee *et al.*(1994)は‘定義された非現実と言語における形式の現実的な分布’の間に大変な誤りがあると述べている。確かに彼らは単独の文法マーカが‘すべての非現実の領域を区別するものとして適切に叙述されうる’という点において単独の言語を見出していなかった。しかし Givón(1994:323)が指摘しているように、Bybee *et al.*によって明確に求められている同一性の程度は極端な研究アプローチを表しており、他の一般的に認められている範疇に関して、広範囲で汎言語的なヴァリエーションがある。彼は受動態に関連する複雑性を例証し続けている。そして**現実 / 非現実**に関連する概念的特徴は、例えば時制やアスペクトの概念的特徴よりもさらに複雑で多様であるが、類型論的に妥当な範疇としてムードの認識を妨げるべきではないということを受け入れることが必要かもしれない。

Bybee *et al.*は Capell and Hinch(1970:67)によって分析された Maung 語(オーストラリア)において、否定命令は現実であり、肯定命令は非現実であるという事実について特に関心を寄せている。これには若干驚くかもしれないが、しかし概念的に両者は潜在的に非現実なのである。そこには恐らく現在の状況に関して歴史的な理由がある。つまりフランス語で‘太陽’と‘月’という単語はそれぞれ男性、女性でなければならないが、ドイツ語では女性と男性でなければならないというようなものである。類似した例はたくさんある – Palmer(1984:34-40)を参照。しかしバリエーションのほとんどの場合は現実あるいは非現実のどちらかとしてそれらを扱うことに関するいくつかの誘因があるという意味のなかで説明しうる。これは未来に関する記述でかなり明確であ

る一現実、つまり主張であり、それは時間の観点においての現在あるいは過去の叙述と異なっているだけであるか、もしくは非現実として見られなければならない。なぜなら現在や過去と違って未来は知られていないからである。

疑問と否定に関するバリエーションは同様に単純に説明が可能である—それらは質問、あるいは否定、あるいは主張された命題、あるいは単純に非主張として見られ得る(6.6.3 と 6.6.4 参照)。

Bybee *et al.*(1994:237)は実際に「もし誰かが否定、可能性、仮説、命令が共通して持つものについて考えるなら、それらすべてがいくつかの意味において現実または非現実である状況を叙述していると思いつくだろう」と述べていることも記されている。さらにそれらはまた主張の関連を許容しているように見える。これは区別に関する概念的な基礎が十分にあり得るという許可のように思われる。

四番目の議論は習慣的過去が Bargam 語(6.6.9 参照)において非現実として扱われているという事実に基づいている。Bybee *et al.*(1994:238)は「この二元体の区別が汎言語的であるので通常現実の典型的なタイプの一つであると考えられている(Foley 1986:158ff)過去のアスペクトが、いくつかの言語で非現実と考えられ得るならば、この二元体の区別は汎言語的に妥当ではない」としている。これは考えられるほど強い議論ではない。なぜなら否定、疑問、条件性などがあれば、過去はしばしば非現実としてマークされるからである。それが常に現実としてマークされている過去において単純な行動を唯一言及するものである。さらに 6.6.9 で議論されたように、過去の習慣は実際の出来事を言及するのではなく、単純に傾向を言及するのである。いくつかの言語において過去の習慣が非現実として扱われることは、それ自体まったく驚くことではない(Givón が 1994:322 で述べている)。それは非現実マーキングを説明するかもしれない過去の事実ではなく、習慣的な事実である。確かに Givón(1994:323)は習慣的なものは、現 j つのいくつかの特徴（より高い主張の確実性）と非現実のいくつかの特徴（明確な時制の言及の欠如；明確な証拠の欠如…）(6.6.9 参照)を兼ね備えた‘ハイブリッドなモダリティ’であると示している。

さらなるポイントは、証拠的なモーダル体系(2.2.3)を有する Kashaya 語(2.4)において習慣的過去の非現実のマーキングと証拠的な接尾辞の例が少なくとも他に一つあることである。英語における *would* の使用がこれに付け加えられるが、これは Chung and Timberlake(1986:221)によって Bargam 語の議論に関連してではなく、‘非現実ムード{non-actual mood}’に関して例証されている。Bybee *et al.*(1994:239)の回答は次のようなものである「*will* の未来に関する使用あるいは *would* の条件に関する使用が発達する数世紀前に、古期英語における *willan* ‘to want’ の過去時制はすでに習慣的過去として用いられていた…これら二つの *would* の関連性のない使用を取り上げることといくつか共通する意味を対照することは私たちが理解している言語的な範疇を改良するものでは

ない」しかしこれは彼らが考えそうなほど力強い議論ではない。なぜなら最初に古期英語の使用は *Bargam* 語の例に簡潔に与えられている説明である, ‘行動する傾向{tending to act}’として翻訳 or 解釈されている ‘wanting’ の観点から明確に説明される。第二に, 現代の形式は古期英語の意味よりも多くの意味を失っている, モーダルな助動詞が形成されたとき, なぜ習慣的な意味が残ったのかが問われるのが妥当であろう。妥当な解答は, それが意味論的に新しい助動詞に一致したからであるということである。意味の変遷を考えると, なぜいくつかは変わらなかったのかということをも問うことも重要である。*WILL* の使用は *Bybee et al.* が示唆していることほど関連しない。特にそれらは行動する傾向にあるという潜在的な非現実の意味を兼ね備えている。それは条件的未来(他の出来事の場合, *Palmer(1990:98)*参照)または習慣的なもののいずれかとしてきわめて容易に解釈される。*Roberts(1994:23)*もまた *Dyirbal* 語(*Dixon 1972:55*)における ‘未来時制’は同様に習慣的な行動に用いられ, したがって時制よりもモダリティの観点から見る方が良いと指摘している。したがって *would* に関する議論は誤りを立証しておらず, *Bargam* 語の習慣的過去の解釈でもなく, 高いレベルにおいて現実と非現実の観点におけるムードが妥当な類型論的範疇であるという見解でもない。

7.4 代替可能な従属節の構文

接続法がしばしば従属節において非現実性{irreality}を表すために用いられるということは 5 章で考察された。しかし代替可能なものであり, 接続法を持ったこれらのコントラストは興味深いものである。

7.4.1 非定型の節

接続法に関して代わりとなる対格と不定詞の構文の使用は 5 章で三回にわたって言及された一報告{report}(5.2.2)のセクション, 指令{directive}(5.3.1)のセクション, そして願望{wishes}, 畏怖{fears}など(5.3.3)のセクションで。

ラテン語は報告の叙述について ‘対格と不定詞’の構文を用いる。

Dicit se de Gallis . . . postulare triumphum (Liv. 36.40.3)
he.says self from Gauls to.demand triumph
‘He says he claims a triumph from the Gauls’

彼はガウルスからの勝利を主張していると言っている。

古典ギリシャ語は類似した構文を用いるが, 定型の補語{finite complement}を伴った構文も持つ(しかし直接法に関しては接続法ではない)。

oíesthe khalkidéas tēn hēllada so:sein (Dem 9.74)
 you.know Chalcidean+PL+ACC the Greece save+FUT+INF
 ‘You know that the Chalcideans will save Greece’

Chalcideans がギリシャを救うだろうということをあなたは知っている.

élegon hótí Kú:ros . . . téthne:ke, (Xen. An. 2.1.3)
 they.said that Cyrus die+3SG+PLUP+INDIC
 ‘They said that Cyrus had died’

Cyrus が死んだと彼らは言った.

願望{wishing}と希望{hoping}の動詞の対照 or コントラストがある. スペイン語とイタリア語では両者は接続詞に接続法を足して現れるが(5.3.3), しかしラテン語では対格の構文は希望が可能であり, また対格の構文は希望に関する唯一の構文なのである.

sperabam tuum adventum appropinquare (Cic. Fam. 4.6.3)
 I.hoped your arrival come-near+PRES+INF
 ‘I hoped your arrival would be soon’

私はあなたの到着が早かったらと希望した.

これらの違いは, 希望が願望よりも実現化しやすいという事実を反映している—非現実としてマークされにくい.

報告された命令では, ラテン語は一般的に接続法に関する定型の補文{finite complement}を用いるが, IUBEO ‘I order’ では非定型の構文を用いる.

cum . . . eos. . . suum adventum expectare (Caes. B.G. 1.27)
 since them his arrival wait.for+PRES+INF
 iussisset
 he.had.ordered
 ‘since he had ordered them to wait for his arrival’

彼の到着まで待つように彼は彼らに命令したからだ.

このように IUBEO と IMPERO という二つの動詞のコントラストがある. 両者は ‘I order’ と訳される (概念的な目的語が一番目に目的語の中にあり, 二番目に与格の中にあるという点でさらなる相違点がある).

Eum iubet venire
 he+SG+ACC he.orders come+PRES+INFIN
 ‘He orders him to come’

彼は彼に来るように命令している.

Ei ut veniat imperat
he+SG+DAT that come+3SG+PRES+SUBJ he.orders
'He orders him to come'
彼は彼に来るように命令している。

ラテン語では構文の選択は上位語の動詞によって決まるが、イタリア語では以下の例のように多くの動詞に関して選択の自由がある。

Gli hanno ordinato di tacere
to.him they.have ordered PREP be.quiet+INFIN

Gli hanno ordinato che tacesse
to.him they.have ordered that be.quiet+PAST+SUBJ

'They ordered him to be quiet'
彼らは彼に静かにするよう命令した。

どちらかの構文を取る動詞の中には ABBAIARE 'bark' と RINGHIARE 'growl' である。

二つのラテン語の動詞の間に概念的な違いがあるのか、あるいは二つのイタリア語の間に違いがあるのかはまったく明確ではない。しかし Givón(1994:281-3)は、スペイン語におけるいくつかの動詞は定型あるいは非定型の構文を取りえ、一方その他は定型の構文のみを取るという事実に関する解説をしている。彼は二つのことを述べている。

第一に、彼は彼が拘束的な '操作動詞{manipulation verb}' と呼んでいるものを相互に比較し、また接続法よりも不定詞が強い操作を一定して表わすということを述べている。以下に用例を挙げる。

Le mandaron seguir-les
him they.ordered follow+INFIN-them
'They ordered him to follow them'

彼らは彼に彼らの後続くよう命令した。

le mandaron que les-siguiera
him they.ordered that them-follow+3SG+PRES+SUBJ
'They told him that he should follow them'

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した。
te prohibo cantar
you I.forbid sing+INFIN
'I forbid you to sing'

私はあなたが歌うことを禁じる.

te prohibo que cantes

you I.forbid that sing+2SG+PRES+SUBJ

‘I forbid you to sing’ (*‘I forbid you that you sing’)

私はあなたが歌うことを禁じる.

二番目は操作の段階があるということと、段階のある部分で接続法（‘転換点 {cut-off point}’）の義務的な使用の転換があるだろうということである。したがって両方の構文が上記の用例において動詞に関して用いられる一方、接続法のみが許容されている。

le dijeron que les-siguiera

him they.told that them-follow+3SG+PRES+SUBJ

‘They told him that he should follow them’

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した.

NOT

*le dijeron seguir-les

him they told follow+INFIN-them

話すことは命令よりもより弱い操作であると彼は示している。彼が例証している拘束的な動詞は次のようなものである。

Stronger, with either construction: MANDAR ‘order’, PROHIBIR ‘prohibit’, OBLIGAR ‘make’

Weaker, with subjunctive only: DECIR ‘tell’, PEDIR ‘ask’, QUERER ‘want’

どちらかの構文に関してより強いもの: MANDAR ‘order’, PROHIBIR ‘prohibit’, OBLIGAR ‘make’

接続法に関してのみより弱いもの: DECIR ‘tell’, PEDIR ‘ask’, QUERER ‘want’

彼はまた不定詞によって表わされたより強い操作の観点からバンツー諸語の Bemba 語で類似した状況があることを示している (Givón 1994:283; cf. Givón 1971:75). 彼は以下の用例のように、本動詞の目的語に関して非定型の構文と目的語に関して定型の構文、目的語を伴わない定型の構文の3つの構文を比較している。

n-à-mu-ebele uku-ya

I-REM-him-order INFIN-go

‘I told him to leave’

私は彼に離れるように話した.

n-à-mu-ebele (ukuti) a-y-e

I-REM-him-order (that) he-go-SUBJ

‘I told him that he should leave’

私は彼が離れるべきだと彼に話した.

n-à-ebele ukuti a-y-e

I-REM-order that he-go-SUBJ

‘I said that he should leave’

私は彼が離れるべきだと言った.

これは MANDAR と DECIR に関するスペイン語の文に類似しているが, しかし操作の強さの3つの段階に関して単独の動詞によって表わされる. 彼はまたさらなる強さに関する命令の他の動詞を考えており, 再び操作の強さの3つの段階を見出しているが, しかしより高い転換点を持っている.

n-à-mu-koonkomeshya uku-ya

I-REM-him-order INFIN-go

‘I forced him to leave’ (He left)

私は彼に発つよう強要した. (彼は出発した)

n-à-mu-koonkoomeshya (ukuti) a-y-e

I-REM-him-order (that) he-go-SUBJ

‘I ordered him to leave’ (He may or not have left)

私は彼に発つよう命令した.

(彼は発つかもしれないし, 発たないかもしれない)

n-à-koonkoomeshya ukuti a-y-e

I-REM-order that he-go-SUBJ

‘I ordered that he should leave’

私は彼が発つべきだと命令した.

ここで非定型の構文は, 遂行されている命令を与えるという意味を持つが (英語に翻訳される相当語句はない), しかしそこには再び3つの力の段階がある.

Givón もまた英語において ORDER と TELL に関する異なる可能性があることを指摘している.

They ordered him to follow them
 Not *They ordered him that he (should) follow them
 They told him to follow them
 They told him that he should follow them

彼らは彼らの後続くよう彼に命令した.

*

彼らは彼らの後続くよう彼に話した.

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した.

もちろんこれはスペイン語で異なる. 英語における ORDER は‘接続法’ (*should*-7.6 参照)を許容しない. なぜなら TELL が両者を許容する一方, ORDER はあまりにも操作動詞が強いゆえ不可能なのであると Givón は述べている. これはスペイン語と英語が操作の段階の問題であるという違いを示している. 以下の用例のように, スペイン語で操作性が高い動詞は両構文を許容し, 操作性が低い動詞は不定詞のみを許容する. 一方英語では操作性が高い動詞は不定詞のみを許容し, 操作性が低い動詞は両構文を許容する.

<i>English</i>		<i>Spanish</i>	
order	Infin.	mandar	Infin., Subj.
forbid	Infin.	prohibir	Infin., Subj.
make	Infin.	obligar	Infin., Subj.
tell	Infin., Subj.	decir	Subj.
ask	Infin., Subj.	pedir	Subj.

しかし英語における状況はこれよりもさらに複雑である. 上記のすべての例において, 動詞に続く名詞句は動詞の意味論的, 統語的に目的語である. 誰かが何かをするために誰かに命令する, 禁じる, させる, 話す, 頼む. しかし唯一目的語があるときのみ完全な従属節である動詞がある. したがって *I ordered John to come* に関して適当な意味は, 私はジョンに命令したである. つまり私はジョンに命令を与えたとなる. しかし *I wanted John to come* は, いかなる意味においても私はジョンを求めていなかった—私が望んだものは‘ジョンを来させること’であった. 今では英語にはこのような多くの動詞がある. それらは不定詞あるいは接続法のいずれかの構文を取る. 驚くことに, おそらく ORDER はそれらの中にあり, それは接続法において受動態が用いられるところで明らかに見られ得る.

He ordered the flag to be raised

He ordered that the flag be raised/should be raised

彼は旗が揚がるよう命令した.

彼は旗が揚がることを / 揚がることを命令した.

命令が旗に対して与えられたのではないことは明らかである. しかしこれは若干奇妙である. なぜなら PREFER と REQUIRE は両構文を許容し, WANT と EXPECT は不定詞の構文のみを許容し, 一方 SUGGEST と PROPOSE は接続法のみ許容し, TELL はここのすべてに当てはまらないからである.

I prefer/require the flag to be raised

I prefer/require that the flag (should) be raised

I want/expect the flag to be raised

*I want/expect that the flag (should) be raised

I suggest that the flag (should) be raised

*I suggest the flag to be raised

I propose that the flag (should) be raised

*I propose the flag to be raised

*I told the flag to be raised

*I told that the flag (should) be raised

私は旗が揚げられることを好む / 要求する.

私は旗が揚げられることを好む / 要求する.

私は旗が揚げられることを欲する / 期待する.

*

私は旗が揚げられることを提案する.

*

私は旗が揚げられることを提案する.

*

*

*

これらはスペイン語の文と直接比較することができない. なぜならこの構文のタイプではスペイン語は接続法を伴った定型の形式のみを許容するからである. しかし Givón の操作の段階は, すべての強い動詞が不定詞を許容し, SUGGEST や PROPOSE といった弱い動詞のみが許容しないという点で, 関与的であるのかもしれない.

しかしここで TELL に関する問題がある. なぜ TELL はここのすべてに当て

はまらないのか？なぜ **ORDER** のようにならないのだろうか？最も明白な理由は、**TELL** が補語を有するときに有情の目的語を常に求めるからである。人は常に話すべき誰かを必要とするのである。他の理由としては報告された命令よりも、報告された叙述に関して主に用いられるということかもしれない。これは以下の用例で明らかである。

I told them that I was coming

私は彼らに私が来たことを話した。

しかしこれもまた次の例に当てはまるかもしれない。

They told him that he should follow them

彼らは彼が彼らの後に続くべきだと彼に話した。

ここで **Should** は間接命令のなかの‘接続法’の *should* ではなく、モーダル動詞が間接的な叙述のなかで義務のために用いられたものである。それについての証拠は‘接続法’としての単純な形式がこの構文で用いられないということである。

!He told them that they follow him

！彼は彼らが彼の後に続くべきだと彼らに話した

これは‘彼は彼の後に続くことを彼らに話した’という意味を表せず、単に‘彼は彼らが彼の後に（実際に）続くということを彼らに話した’を意味している。

しかしイタリア語では動詞 **DIRE** ‘tell/say’ はいずれかの構文を取る多くの動詞の一つである。スペイン語の **DECIR** や英語の **TELL** のような制約を持たない。

非現実のより強い程度を表す接続法に関する傾向があるにもかかわらず、二つの構文の選択は明らかに概念的特徴によって動機づけされている。

7.4.2 直接話法

従属節において接続法に変わる他のものは、もとの発話の実際の語を報告するという直接話法の使用である。

直接話法はしばしば報告の叙述に関して用いられるが（接続法の使用は非常に一般的ではない—最後のセクションの冒頭のパラグラフを参照せよ）、しかし直接話法は報告の質問と命令に関しても用いられ得る（接続法の使用は一般的である）。

He said 'I'm coming'
I asked 'Are you coming?'
She said 'Come!'

彼は「ただいま」と言った。
私は「あなたは来つつあるのか」と尋ねた。
彼女は「来い!」と言った。

直接語法は間接語法の付属的な代替物として、あるいは報告を示す唯一の方法としてのいずれかでほとんどすべての言語に確かに見られる。直接語法のいくつかの例（報告の命令に関するすべて）は Kobon 語(New Guinea-Davies 1981:2), Yidiny 語 (Australia-Dixon 1977:524), Syrian Arabic 語 (Cowell1964:450)から挙げられる。

nipe ip hag-öp ne ñel ud-ag-ø QUOTE g-öp
3SG 1SG say-PERF+3SG 2SG firewood take-NEG-2SG a do-PERF+3SG
'He said to me "Do not take the firewood"'

彼は「薪を取るな」と私に言った。

damaringu bugi:n bana: bugi diga mamba
Damari+ERG tell+PAST water+LOC put+imp pour.water.on+IMP sour+ABS
'Damari told him "Put it in the water, pour water on it, it's bitter"'

Damari は「それに水を入れろ、それに水を注げ、それは苦い」と
彼に言った。

marra w-marrtēn ʔəlt-əllo lā təlsab bəttari
time and-time I.told-to.him not play+IMP in.the.street
'Time and time I've told him "Don't play in the street"'

たびたび私は「通りで遊ぶな」と彼に言ったものだ。

さらに興味深いことに、英語よりもさらに広く直接語法の構文を取り入れる言語がある。したがって Amharic 語の話しことば(Semitic, Ethiopia-Cohen 1936:363)では、畏怖の表現は、以下のように実際の語が話されなくても直接引用に続く「畏怖{fear}」の動詞に「言う{say}」の動詞を足すことによって表わすことができる。

mangadum aagaññaum bəyye əfarallaūh
the.road he.will.not.find.it I.saying I.fear
'I am afraid he won't find the road'

私は彼が道を探せないのではないかとおそれている。

同じ方法で無情名詞の目的語によって‘拒絶{refusal}’を表すことも可能である。

səga albasləmm ala
meat.I.will.not.cook said
‘The meat refused to cook’
その肉を料理しないように言った。

多くの言語は間接話法を持っていないと言われてきたが、しかしさらに正確に言えばいくつかの言語では直接話法が滅多に使われないかもしれない。例えば一般的にオーストラリア諸語は直接話法のみ用いるが、Ngiyambaa 語 (Australia-Donaldson 1980:280)の例を考察する。

ŋadhu-na ŋiyiyi girma-li ŋinu:
I+NOM-3ABS say+PAST wake-PURP you+OBL
‘I told her to wake you’

私は彼女にあなたを起こすよう言った。

ここで実際の語は‘彼を起こせ’であり、そのためこれは明確な直接話法ではない。実際にここでのように代名詞を変えるものである（また英語のようにいくつかの言語で時を表すマーカーのように他の直示的なもの）‘ダイクシスのシフト{deictic shift}’は間接話法の不可欠の特徴である。なぜなら英語は、代名詞、時制、時の代名詞といった4つのダイクシスが変わるという点において、二つの文を比較するからである。

He said ‘I’m coming tomorrow’
He said he was coming the next day

彼は「私は明日来る」と言った。
彼はその翌日来ると言った。

7.5 話し手の専心

間接話法についてなされるさらなるポイントがある。いくつかの言語は話し手が報告された発話が真実であることを信じるかどうか示すための工夫がある。英語では報告された叙述が二番目の話し手によって真実だと受け入れられても、時制の変化を包含するダイクシスのシフトはないかもしれない。

I said ‘I’m coming on Tuesday’

I said that I was coming on Tuesday

I said that I'm coming on Tuesday

私は「私は火曜日に来る」と言った。

私は私が火曜日に来るということを言った。

私は私が火曜日に来るということを言った。

三番目の例は話し手の来るという意図を示している。非常に明確な例は Jespersen(1909-49:IV,156)によって与えられている。

The ancients thought that the sun moved round the earth; they did not know that it is the earth that moves round the sun

古代人は太陽が地球の周りをまわると考えていた。つまり彼らは太陽の周りをまわるのが地球であるということを知らなかったのだ。

ここでのポイントは、*moved* に関して最初の命題は話し手によって受け入れておらず、一方 *moves* に関して二番目の命題は話し手によって真実として受け入れられていることが明らかであるということである。

これは明らかに概念的にモーダルな特徴として見做されている。また過去時制があるときにドイツ語では 5.2.2 で記されたように、ドイツ語の文語は間接話法で接続法を用いるにもかかわらず、直接法は話し手による信用を示すために用いられ得るという点で、文法的なムードが包含されている。

Er sagte, er schwimmt gern

he said he swim+3SG+PRES+IND with.pleasure

‘He says he likes swimming’

彼は彼が水泳が好きだと言っている.

次の用例は対立している.

Ich glaubte dass er wäre krank

I thought that he be+3SG+IMPF+SUBJ ill

‘I thought he was ill’

私は彼が病気だったと思った。

Ich glaubte dass er krank war
 I thought that he ill be+3SG+IMPF+IND
 'I thought he was ill'

私は彼が病気だったと思った。

しかしムードの選択もまた、文体や社会言語学的な要因に依拠している (Hammer 1983:265-8 参照)。英語のように時制の変化はなく、単にムードの変化があることに注意せよ。

同様に古典ギリシャ語は報告の過去時制動詞を伴って願望法{optative}のムードを用いるが、しかし元の時制（直接話法）を伴って、直接法も用いる場合がある。

e:peíle:s' hótí . . . badioíme:n (Ar. Pl. 88)
 I.threatened that go+1SG+FUT+OPT
 'I threatened that I would go'
 私は私が行くと脅した。

e:ngélthe autó:i hótí Mégara aphéste:ke (Thuc. 1.114)
 it.was.reported to.him that Megara revolt+3SG+PERF+IND
 'News came to him that Megara had revolted' (not 'has revolted')

Magara が背いたという知らせが彼に来了（‘背く’ではなく）。

以下の用例のように、おそらく話し手の専心{speaker commitment}のいくつかの指示に関して、同様な文のなかに両方の構文に関するいくつかの例がある。

élegon hótí Kú:ros mén téthne:ke,
 they.said that Cyrus on.the.one.hand die+3SG+PLUP+IND
 Ariaíos dé pepheugós . . . eíe: (Xen. An. 2.1.3)
 Ariaeus on.the.other having.fled be+3SG+PRES+OPT
 'They said that Cyrus had died, but that Ariaeus had fled'

彼らはCyrusが死んだと言ったが、しかしAriaeusは逃亡したと言った。

日本語(Kuno 1973:261)のようにいくつかの言語には直示的なシフトが時制に影響しないものがある。報告された発話は実際の発話の時制を保持している。しかし日本語は *no*, *koto*, *to* といった3つの異なる接続詞を有する(Kuno 1973:213-22)。 *to* よりも *no* あるいは *koto* の選択は命題の真実に対する話し手の専心の程度に依拠しているようである(Suzuki 1994, Kuno の議論を再検討し

たもの). Kuno(1973:216-17)によると, 以下の用例に接続詞の選択がある.

John wa Mary ga sinda to sinzinakatta
John Mary died that not-believed
'John did not believe that Mary was dead' (She might or might not have been)

ジョンはメアリーが死んだと信じなかった.

John wa Mary ga sinda koto o sinzinakatta
John Mary dead that not-believed
'John did not believe that Mary was dead' (She was)

ジョンはメアリーが死んだことを信じなかった.

この理由から 'to forget' は *to* と共起することができず, *koto* のみが共起し得る.

John wa Mary ga tunbo de aru koto/no (*to) o wasureteita
John Mary deaf is that had.forgotten
'John had forgotten that Mary was deaf'

ジョンはメアリーがつんぼであること/*の* (*と) を忘れていた.

対照的に '誤った考え {wrong notion}' は唯一 *to* と共起し得る (Suzuki 1994:526).

John wa Mary ga shinda to (*koto/no) o gokaishita
John Mary died that formed.a.wrong.notion
'John formed the wrong notion that Mary had died'

ジョンはメアリーが死んだと (*こと/*の*) を誤解した.¹⁾

同様に Kinyarwanda 語 (Bantu, Rwanda-Givón 1982:26-32, Givón と Kimenyi 1974 より引用) では, *ko*, *ngo*, *kongo* といった3つの接続詞があり, それぞれ (実際の) 話し手による異なる種類の専心を表している.

ya-vuze ko a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come
'He said that he'd come' (and I have no comment)

彼は来たと言った (私は何も言っていない).

ya-vuze ngo a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come
'He said that he'd come' (but I have direct evidence which makes me
doubt it)

彼は来たと言った（しかし私はそれを疑わしいと思う直接的な証拠を
持っている）。

ya-vuze kongo a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come
'He said that he'd come' (but I have indirect/hearsay evidence which
makes me doubt it)

彼は来たと言った（しかし私はそれを疑わしいと思う間接的 / 伝文の
証拠を持っている）。

‘後悔 {regret}’, ‘忘却 {forget}’ のような事實的 {factive} で非主張
{non-assertive} の補文化詞は, *ko*, つまり最も強い程度の専心のマーカーであ
り *ko* を要求する。

しかし類似した区別を行う他の言語は, Jacalteco の方言である Jacaltengo 語
(Mayan, Guatemala-Craig 1977:268) である。 *chubil* (‘事実の “that” に一致
する) と *tato* (‘期待された, 想像された, あるいは信用された事実を紹介する’)
には対立がある。両者は言われたことの信憑性あるいは信憑性のなさを示す言
語活動動詞と共に用いられ得る。

xal naj tato chuluj naj presidente
said he that will.come the president
'He said that the president is going to come'

大統領が来る予定だと彼は言った。

xal naj alcal chubil chuluj naj presidente
said the alcalde that will.come the president
'The alcalde said that the president is going to come'

大統領が来る予定だと市長は言った。

最初の用例は信憑性のない情報源を示しており, 二番目の用例は信憑性のあ
る情報源を示している。

いくつかの言語において, 報告されたことの真実性に関する話し手の疑いが,
例えば Polish 語, Czech 語, Mapun 語(Chadic, Nigeria)では小詞によって示さ
れる場合がある。 Polish 語と Mapun 語から例を挙げる。

Powiedział, że niby jest chory
he.said that BE+3SG DOUBT sick
'He said that he is sick, but I am not sure that it is true'

彼は自分が病気だと言ったが、しかし私はそれが本当だと確信していない。

wur sat mun ni din paa yol muan
3SG say 1PL that 3SG+COREF DOUBT go trip
'He told us that he went on a trip, but maybe he didn't go'

彼は旅行に行ったと私たちに話したが、しかしおそらく彼は行かなかった。

Mapun 語ではなく Polish 語では、小詞は本動詞の主語が一人称である場合に報告された叙述が嘘（話し手による）であることを示すために用いられる場合がある。

Powiedziałem, że niby jestem chory
I said that be+3SG DOUBT sick
'I said that I am sick, but I am not'
私は病気であると私は言ったが、しかし私は病気ではない。

Lega 語(Bantu, E.Zaire-Botne 1997:512-14)では若干異なり、報告{Reported}として一般的に用いられる小詞は叙述に対する疑いを表すために用いられる場合がある。

nkumgwágá (bónɔ), ámbo bazongo bé kulyágá merende
I.hear that whites QUOT eat frog
'I hear that Westerners eat frogs (though I find that unlikely)'
西洋人は蛙を食べると聞いている。(私はありそうにないことだと思うのだが)

それは叙述が話し手に関するとき、意見の不一致を表す。

bábolá bónɔ ámbo nne nekobákesá
they.tell that QUOT I tricked
'They say that I tricked them (though I take exception to it)'

彼らは私が彼らを騙したと言っている。(私はそれについて異議を唱えるが)

‘It surprises me that you say that’

‘It surprises me that you said that’

あなたがそれを言うことが私を驚かせている。

あなたがそれを言ったことが私を驚かせている。

Quirk *et al* (1985:1014)はこの使用を‘推定{putative}’として言及しており、またその使用は（それは）あり得る存在、あるいは存在が現れることとして認識される推定上の状況を言及すると示唆している。それらを比較せよ。

I’m surprised that he should feel lonely

I’m surprised that he feels lonely

彼が孤独を感じていることに私は驚いている。

彼が孤独を感じていることに私は驚いている。

彼らは最初のものは孤独であることを疑っており、一方二番目のものはそれを真実として受け入れているものであること示している。同様に彼らは意味が条件節の意味に接近している場合、非事実{non-factual}の基礎があると示唆している。

It’s a pity that they should be so obstinate

It’s a pity if they are so obstinate

彼らがとても頑固であることは残念だ。

彼らがとても頑固であることは残念だ。

should の他の使用は次のように条件文におけるものである。

If John should come, Bill will leave

Cf. If John comes, Bill will leave

ジョンが来るならビルは出発するだろう。

ジョンが来るならビルは出発するだろう。

ここで *should* の使用はある不確実性を表している（これは非現実{unreal}条件の例である 8.3 のトピックではない。If John came, Bill would leave.とは極めて異なる。8.3.4 参照）。

should のこれらの使用が‘接続法’と呼ばれるか否かはまったく重要ではない。それらは他の言語で接続法に関していくつかの類似点を持っており、一方で‘接続法’という術語は概して屈折の範疇を示すために用いられる。*Should* は形式的にモーダルな動詞の過去時制の形式に過ぎない。

7 接続法と非現実

この章では先の二つの章で述べられてこなかった、あるいは十分には述べられなかった接続法と非現実に関する多くの事柄について扱う。

7.1 類似点と相違点

直接法 / 接続法に関する異なる術語を使う決まりと、それらを異なる章で扱う決まりは数多の考察によるものである。

部分的には異なる伝統の結果によるものである。‘直接法’という術語と‘接続法’という術語はヨーロッパ諸語の古典語や近代語の記述で用いられた伝統的な術語であり、妥当ではないにもかかわらず、それらは他の言語について多くの研究者によって用いられてきた。Bybee *et al.*(1994:236)によると、膨大なコーパスの中で記された‘現実’と‘非現実’という術語の最初の使用は Capell and Hinch(1970)におけるオーストラリア諸語の Maung 語の記述にある。これらの術語はアメリカ先住民諸語や太平洋沿岸の諸語、特にパプアニューギニアの諸語における研究者の研究で好んで用いられてきた。しかしこれらの言語における研究は古典的な伝統を知らないということではないようなので、この決まりはおそらく調査された資料が表わす認識された相違点によるものであろう。

示唆されるかもしれない一つのあり得る違いは、ヨーロッパ諸語におけるムードは人称、数、時制、態が緊密に融合された形態的統語的な範疇であるということである。4つの範疇は独立してマークされるのではなく、語彙項目マーカーだけではなく、すべての文法的マーカーが同時に起こる形式なのである。それぞれの形式は Matthews(1991:174)が人称、数、時制、ムード、態の‘累積した具現形’と呼んでいるものである。そのような文法範疇の累積した具現形（通常、といっても常にではないが、語彙項目の累積した具現形）はもちろん‘屈折’と呼ばれている言語の本質的な特徴である。

‘現実’、‘非現実’として特徴付けされる言語におけるムードは 6.3.1 で例証されたように、しばしば単独の語あるいは個々の接辞と接語によってマークされる。しかし Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:352-3)に関する章で示されたように累積した具現形もまた見出される。ここでは (i) 人称——人称、二人称、三人称そして‘脱焦点化{defocussing}’、(ii) 文法的な関係(Palmer 1994 参照)の動作主、受動者、そして受益者、その他に (iii) 現実と非現実といった累積した具現形である接頭辞があることが記された。以下に例を挙げる(6.3.1 から再掲)。

	Agent	Patient	Beneficiary
Realis prefixes			
1st person	ci-	ku-	ku-
2nd person	yah?-	si-	si-
Irrealis prefixes			
1st person	ta-/ti-	ba-	ba-
2nd person	sah?-	sa?a-	sa?u-

上の表の受動者と受益者の三番目のペアの形式が同じものによって示されているように、屈折の特徴であるいくつかの融合{syncretism}もある。類似した特徴について Takelma 語と Alsea 語といった他の言語は 6.3.1 でも議論されたように、Takelma 語はラテン語と非常に類似した形態論的な体系を持っていると記された。

一つの類似点は概念的な非現実の特徴がすでに文中で他のところにマークされているという点において、接続法と非現実の両マーカはしばしば冗長である。しかしそこではまた大きな違いもある。接続法は概して従属節においてのみ冗長であり、そこでは従属させる動詞はイタリア語のように明確に概念的特徴を示している。

Gli hanno ordinato che tacesse
to.him they.have ordered that be.quiet+PAST+SUBJ
'They ordered him to be quiet'

彼らは彼に静かにするよう命じた。

接続詞 *che* を伴っている命令の動詞の後に接続法を使用することは義務的である。対照的に非現実のマーカは一般的に主節で現われるが、そこでは Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:356)における義務のマーカのように概念的に非現実である文法マーカと共起する。

kas-sa-náy?aw
OBL-3+AG+IRR-sing
'He should/is obliged to sing'

彼は歌わなければならない/歌う義務がある。

統語的に冗長性がある構文は非常に異なる。一見主節におけるそれらの機能が考慮されさえしているならば、接続法と非現実に関連する概念的特徴は異なって現れるかもしれない。なぜなら主節において接続法に関連する概念は疑問、

否定{denial},あるいは未来性(稀な場合を除いて)を含まないが,一方これらは一般的に非現実に関連している.しかし従属節でこれらの概念的特徴はしばしば接続法に関連しており,しばしば冗長的である—5.2.3, 5.2.4, 5.2.6 参照.

おそらく最も驚くべき特徴の一つは非現実と接続法が話し手と聞き手が了解している前提されたことを示すために用いられることである(再び従属節の事柄に関するものではあるが).したがって接続法は以下の例のようにスペイン語の従属節で用いられる.

Sp. Lamento que aprenda
 It. Mi dispiace che impari
 I regret that learn+3SG+PRES+SUBJ
 ‘I regret that he learns/is learning’

私は彼が学ぶ / 学んでいることを後悔している.

同様に非現実には Caddo 語(Oklahoma-Chafe 1995:357(6.6.7 参照))で‘称賛{admirative}’について想定されているものを示すために現れる.

hús-baʔa-sayi-k’awih-sa?
 ADM-1+BEN+IRR-name-know-PROG
 ‘My goodness he knows my name’

おや,彼は私の名前を知っている.

7.2 二元体の体系

本書で幾度も示されたことだが,基本的に(プロトタイプ的に)現実 / 非現実の違いは,直接法 / 接続法と現実 / 非現実によって与えられた対立 or で見られる対立によって描かれたように二元体である.しかし反例であるように見える例が明らかに存在し,これらが今考察されなければならない.

現実 / 非現実という対立の二元体は,それがたいてい確立されているにもかかわらず,モーダルな体系に対して決定的ではなく,モダリティの全体的な範疇のなかでモーダルな体系とムードが結び付いているという点において関与的である.例えば英語で無標の叙述{Declarative}とモーダルな動詞に関する構文の対立がある.同様に証拠的なものの体系に関して多くの言語では無標の形式とモーダルな体系を形成する数多のマークされた項目がある.これらの言語では現実と非現実の対立があることが示され得る.しかし Tuyuca 語で無標の形式が現れず,中央 Pomo 語ではまったく対照的な状況があるという事実によって示されるように,その分析は決定的なものではない(2.7.1 参照).

直接法 / 接続法の対立に関して,二つの問題がある.最初に指令{jussive}と

命令{imperative}に関する形式もまたあるということである。しかし指令と命令はそれらが時制についてマークしない（滅多にしない）という点で直接法と接続法のように完全に屈折されているわけではない。二番目の問題は古典ギリシャ語は他のふたつに付け加えて願望法{optative}を持っているということである。しかし接続法と願望法の違いはムードというよりも時制（‘モーダルな時制’）の一つであると論じられ得る(8.2 参照)。

現実 / 非現実というマーキングがある言語に関しては状況は幾分明確ではない。しかし例えば Caddo 語(6.1)のように結合のマーキングに関する言語のほとんどは二元体の対立がある。特に興味深いことは Amele 語であり、そこでは現実 / 非現実のマーキングは言語全体に拡張していないが、異なる主語を持った連結された節に制限されている。しかし重要なことはマークすることが必要とされる場合、それが二元体になるということである。若干問題なのは、現実と非現実としてマークされたものとマークされていない形式がある状況であるが(6.5.2)、しかしまたもや二元体のマーキングがあるという状況である。しかしいくつかの言語では‘現実’と‘非現実’としてラベル付けされる形式は、より広範囲な体系において単に二つの項目に過ぎないということが許容されなければならない(6.5.3)。しかしそこでも概念的特徴は本質的に他のところで現実と非現実に関連するものであると論じされ得るので、より広い体系の中に現実 / 非現実の対立がある。あるいはその代わりにそのような体系はムードよりもモーダル体系の観点から扱われ得る。

7.3 現実 / 非現実の類型論的な位置づけ

基本的な疑問は、ここでムードの観点（モーダルな体系にも適用しうるが）から例証されたように**現実と非現実**の相違点が類型論的な妥当性を持つ一貫して類似した範疇であるか否かということである。これは Bybee *et al.* 1994 によって議論されている (Bybee and Fleischman 1995b:9-10, Bybee 1998 も参照)。そこには 4 つの主な論点がある。

- (i) The distinction is rarely realized in a language as a simple binary morphological distinction.
- (ii) Irrealis and Subjunctive markers are often semantically redundant in that the meaning is carried by some other element in the context.
- (iii) There is great variation in the notional features marked by them, which makes it difficult to circumscribe a focal meaning for them.
- (iv) Some of the notional features appear to be wholly inappropriate.

- (i) 相違点は単純な二元体の形態論的な相違として稀に具現化する。
- (ii) 文中で他のいくつかの要素によって意味がもたらされるという点において**非現実**と**接続法**のマーカ―はしばしば意味的に冗長である。
- (iii) それら（**非現実**と**接続法**のマーカ―）によってマークされた概念的特徴には数多のバリエーションがあり、それは**非現実**と**接続法**の？焦点があった意味を描くことを困難にしている。
- (iv) 概念的特徴のいくつかは総じて不適切なものとして現れる。

「現実 / 非現実は、ある言語の中で二元体の形態論的な相違として稀に具現化する」(Bybee *et al.* 1994:237-8)という最初の論点は、「…基本的な区別は二元体的なものであるが、しかしこの方法でそれを表す言語はほとんどない」というパプア諸語について Foley が記述した解釈である。Foley は多くの言語が‘現実{real}から非現実{unreal}へと続く連続体に沿った数多の区別’をなすということを示し続けている。それにもかかわらず二元体の区別が見出されるという点において数多の言語があり、そしてそれらの多くは先の二つの章で詳細に例証されてきた。Roberts(1994:7-8)は二元体の区別がマークされているという点で言語の膨大なリストを供給し、さらに多くのものが Bugenhagen(1994)で見出されている。

二番目の論点は最初のもののように、むしろ大げさである。接続法と非現実の両マーカ―がしばしば冗長であるというのは紛れもない真実である。Bybee *et al.*(1994:10)は「**非現実**マーカ―が機能的に冗長である中で、いわゆる非現実マーカ―によってあるいは他の要因（語彙または形態的統語的な）によって、発話のモーダルな意味が明確に与えられるかどうかを数多の用例の中で決めることは難しい」と述べている。しかしこれがそうではないとした先の二つの章における多くの用例がある。したがって主節における接続法は概して直接法と対立する (5.5.1 参照)。従属節でさえそれらの間にしばしば選択がある。例えばイタリア語とスペイン語における命題に関するためらっていること {hesitancy} の程度による、あるいは命題は仮説的であるという程度による信用の動詞に関してである。同様に Mithun(1995:379)は‘現実’と‘非現実’の未来は区別可能であるので、非現実のマーカ―が冗長ではないということを示す非常に明確で興味深い例を南 Pomo 語から挙げている。現実に関しては、未来は確かに起こるものとして出来事が描かれていることを示しており、一方非現実のマーカ―は不確かなことを示している。用例は次のようなものである (6.6.1 から再掲)。

té·nta-lil wá·n-hi ?á· qó-be-w-?khe
town-to go-IMPF-SAME+IRR 1+AG toward-carry-PERF-FUT
‘I’ll go to town and bring it back’

私は町に行き、それを持ってくるつもりだ。

ʔá čhó-w-da má ʔbá-·-n-č̣i-w-ʔkʰe
 1+AG not-PERF-DIFF+SIM+REAL 2+AG suffer-DUR-REFL-PERF-FUT
 ‘When I am no longer here, you will suffer’

私がここにいなくなったら、あなたは苦しむだろう。

さらに重要なことに、結合マーキングがあるところのみ冗長さがありうる (6.4 参照). マーキングが非結合であるところでは、明らかに冗長ではなく、過去－現在と未来時制とを区別できる場合がある。

そして事実は最初の二つの議論を弱めるかあるいは否定するように思われる。三番目は扱いが多少難しい。なぜなら**非現実**あるいは**現実**として文法的に扱われているもの、特に現実 / 非現実の観点から扱われているムードの言語において、言語には非常に多様なバリエーションがあるということが認められなければならないからである。したがって Chung and Timberlake(1985:241)は「出来事が現実{actual} (現実{realis})のムードによって形態論的に表わされている) 対非現実{non-actual} (非現実のムードによって表わされている) として評価されることについて言語は明確に異なる」と述べている。Bybee *et al.*(1994)は‘定義された非現実と言語における形式の現実的な分布’の間に大変な誤りがあると述べている。確かに彼らは単独の文法マーカが‘すべての非現実の領域を区別するものとして適切に叙述されうる’という点において単独の言語を見出していなかった。しかし Givón(1994:323)が指摘しているように、Bybee *et al.*によって明確に求められている同一性の程度は極端な研究アプローチを表しており、他の一般的に認められている範疇に関して、広範囲で汎言語的なヴァリエーションがある。彼は受動態に関連する複雑性を例証し続けている。そして**現実 / 非現実**に関連する概念的特徴は、例えば時制やアスペクトの概念的特徴よりもさらに複雑で多様であるが、類型論的に妥当な範疇としてムードの認識を妨げるべきではないということを受け入れることが必要かもしれない。

Bybee *et al.*は Capell and Hinch(1970:67)によって分析された Maung 語(オーストラリア)において、否定命令は現実であり、肯定命令は非現実であるという事実について特に関心を寄せている。これには若干驚くかもしれないが、しかし概念的に両者は潜在的に非現実なのである。そこには恐らく現在の状況に関して歴史的な理由がある。つまりフランス語で‘太陽’と‘月’という単語はそれぞれ男性、女性でなければならないが、ドイツ語では女性と男性でなければならないというようなものである。類似した例はたくさんある – Palmer(1984:34-40)を参照。しかしバリエーションのほとんどの場合は現実あるいは非現実のどちらかとしてそれらを扱うことに関するいくつかの誘因があるという意味のなかで説明しうる。これは未来に関する記述でかなり明確であ

る一現実、つまり主張であり、それは時間の観点においての現在あるいは過去の叙述と異なっているだけであるか、もしくは非現実として見られなければならない。なぜなら現在や過去と違って未来は知られていないからである。

疑問と否定に関するバリエーションは同様に単純に説明が可能である—それらは質問、あるいは否定、あるいは主張された命題、あるいは単純に非主張として見られ得る(6.6.3 と 6.6.4 参照)。

Bybee *et al.*(1994:237)は実際に「もし誰かが否定、可能性、仮説、命令が共通して持つものについて考えるなら、それらすべてがいくつかの意味において現実または非現実である状況を叙述していると思いつくだろう」と述べていることも記されている。さらにそれらはまた主張の関連を許容しているように見える。これは区別に関する概念的な基礎が十分にあり得るという許可のように思われる。

四番目の議論は習慣的過去が Bargam 語(6.6.9 参照)において非現実として扱われているという事実に基づいている。Bybee *et al.*(1994:238)は「この二元体の区別が汎言語的であるので通常現実の典型的なタイプの一つであると考えられている(Foley 1986:158ff)過去のアスペクトが、いくつかの言語で非現実と考えられ得るならば、この二元体の区別は汎言語的に妥当ではない」としている。これは考えられるほど強い議論ではない。なぜなら否定、疑問、条件性などがあれば、過去はしばしば非現実としてマークされるからである。それが常に現実としてマークされている過去において単純な行動を唯一言及するものである。さらに 6.6.9 で議論されたように、過去の習慣は実際の出来事を言及するのではなく、単純に傾向を言及するのである。いくつかの言語において過去の習慣が非現実として扱われることは、それ自体まったく驚くことではない(Givón が 1994:322 で述べている)。それは非現実マーキングを説明するかもしれない過去の事実ではなく、習慣的な事実である。確かに Givón(1994:323)は習慣的なものは、現 j つのいくつかの特徴（より高い主張の確実性）と非現実のいくつかの特徴（明確な時制の言及の欠如；明確な証拠の欠如…）(6.6.9 参照)を兼ね備えた‘ハイブリッドなモダリティ’であると示している。

さらなるポイントは、証拠的なモーダル体系(2.2.3)を有する Kashaya 語(2.4)において習慣的過去の非現実のマーキングと証拠的な接尾辞の例が少なくとも他に一つあることである。英語における *would* の使用がこれに付け加えられるが、これは Chung and Timberlake(1986:221)によって Bargam 語の議論に関連してではなく、‘非現実ムード{non-actual mood}’に関して例証されている。Bybee *et al.*(1994:239)の回答は次のようなものである「*will*の未来に関する使用あるいは *would* の条件に関する使用が発達する数世紀前に、古期英語における *willan* ‘to want’ の過去時制はすでに習慣的過去として用いられていた…これら二つの *would* の関連性のない使用を取り上げることといくつか共通する意味を対照することは私たちが理解している言語的な範疇を改良するものでは

ない」しかしこれは彼らが考えそうなほど力強い議論ではない。なぜなら最初に古期英語の使用は *Bargam* 語の例に簡潔に与えられている説明である, ‘行動する傾向{tending to act}’として翻訳 or 解釈されている ‘wanting’ の観点から明確に説明される。第二に, 現代の形式は古期英語の意味よりも多くの意味を失っている, モーダルな助動詞が形成されたとき, なぜ習慣的な意味が残ったのかが問われるのが妥当であろう。妥当な解答は, それが意味論的に新しい助動詞に一致したからであるということである。意味の変遷を考えると, なぜいくつかは変わらなかったのかということをも問うことも重要である。*WILL* の使用は *Bybee et al.* が示唆していることほど関連しない。特にそれらは行動する傾向にあるという潜在的な非現実の意味を兼ね備えている。それは条件的未来(他の出来事の原因, *Palmer*(1990:98)参照)または習慣的なもののいずれかとしてきわめて容易に解釈される。*Roberts*(1994:23)もまた *Dyirbal* 語(*Dixon* 1972:55)における ‘未来時制’は同様に習慣的な行動に用いられ, したがって時制よりもモダリティの観点から見る方が良いと指摘している。したがって *would* に関する議論は誤りを立証しておらず, *Bargam* 語の習慣的過去の解釈でもなく, 高いレベルにおいて現実と非現実の観点におけるムードが妥当な類型論的範疇であるという見解でもない。

7.4 代替可能な従属節の構文

接続法がしばしば従属節において非現実性{irreality}を表すために用いられるということは 5 章で考察された。しかし代替可能なものであり, 接続法を持ったこれらのコントラストは興味深いものである。

7.4.1 非定型の節

接続法に関して代わりとなる対格と不定詞の構文の使用は 5 章で三回にわたって言及された一報告{report}(5.2.2)のセクション, 指令{directive}(5.3.1)のセクション, そして願望{wishes}, 畏怖{fears}など(5.3.3)のセクションで。

ラテン語は報告の叙述について ‘対格と不定詞’の構文を用いる。

Dicit se de Gallis . . . postulare triumphum (Liv. 36.40.3)
 he.says self from Gauls to.demand triumph
 ‘He says he claims a triumph from the Gauls’

彼はガウルスからの勝利を主張していると言っている。

古典ギリシャ語は類似した構文を用いるが, 定型の補語{finite complement}を伴った構文も持つ (しかし直接法に関しては接続法ではない)。

oíesthe khalkidéas te:n héliada so:sein (Dem 9.74)
 you.know Chalcidean+PL+ACC the Greece save+FUT+INF
 ‘You know that the Chalcideans will save Greece’

Chalcideans がギリシャを救うだろうということをあなたは知っている.

élegon hóti Kú:ros . . . téthne:ke, (Xen. An. 2.1.3)
 they.said that Cyrus die+3SG+PLUP+INDIC
 ‘They said that Cyrus had died’

Cyrus が死んだと彼らは言った.

願望{wishing}と希望{hoping}の動詞の対照 or コントラストがある. スペイン語とイタリア語では両者は接続詞に接続法を足して現れるが(5.3.3), しかしラテン語では対格の構文は希望が可能であり, また対格の構文は希望に関する唯一の構文なのである.

sperabam tuum adventum appropinquare (Cic. Fam. 4.6.3)
 I.hoped your arrival come-near+PRES+INF
 ‘I hoped your arrival would be soon’

私はあなたの到着が早かったらと希望した.

これらの違いは, 希望が願望よりも実現化しやすいという事実を反映している—非現実としてマークされにくい.

報告された命令では, ラテン語は一般的に接続法に関する定型の補文{finite complement}を用いるが, IUBEO ‘I order’ では非定型の構文を用いる.

cum . . . eos. . . suum adventum expectare (Caes. B.G. 1.27)
 since them his arrival wait.for+PRES+INF
 iussisset
 he.had.ordered
 ‘since he had ordered them to wait for his arrival’

彼の到着まで待つように彼は彼らに命令したからだ.

このように IUBEO と IMPERO という二つの動詞のコントラストがある. 両者は ‘I order’ と訳される (概念的な目的語が一番目に目的語の中にあり, 二番目に与格の中にあるという点でさらなる相違点がある).

Eum iubet venire
 he+SG+ACC he.orders come+PRES+INFIN
 ‘He orders him to come’
 彼は彼に来るように命令している.

Ei ut veniat imperat
he+SG+DAT that come+3SG+PRES+SUBJ he.orders
'He orders him to come'
彼は彼に来るように命令している.

ラテン語では構文の選択は上位語の動詞によって決まるが、イタリア語では以下の例のように多くの動詞に関して選択の自由がある.

Gli hanno ordinato di tacere
to.him they.have ordered PREP be.quiet+INFIN
Gli hanno ordinato che tacesse
to.him they.have ordered that be.quiet+PAST+SUBJ
'They ordered him to be quiet'
彼らは彼に静かにするよう命令した.

どちらかの構文を取る動詞の中にあるのは ABBAIARE 'bark' と RINGHIARE 'growl' である.

二つのラテン語の動詞の間に概念的な違いがあるのか、あるいは二つのイタリア語の間に違いがあるのかはまったく明確ではない. しかし Givón(1994:281-3)は、スペイン語におけるいくつかの動詞は定型あるいは非定型の構文を取りえ、一方その他は定型の構文のみを取るという事実に関する解説をしている. 彼は二つのことを述べている.

第一に、彼は彼が拘束的な '操作動詞{manipulation verb}' と呼んでいるものを相互に比較し、また接続法よりも不定詞が強い操作を一定して表わすということを述べている. 以下に用例を挙げる.

Le mandaron seguir-les
him they.ordered follow+INFIN-them
'They ordered him to follow them'

彼らは彼に彼らの後続くよう命令した.

le mandaron que les-siguiera
him they.ordered that them-follow+3SG+PRES+SUBJ
'They told him that he should follow them'

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した.

te prohibo cantar
you I.forbid sing+INFIN
'I forbid you to sing'

私はあなたが歌うことを禁じる.

te prohibo que cantes

you I.forbid that sing+2SG+PRES+SUBJ

‘I forbid you to sing’ (*‘I forbid you that you sing’)

私はあなたが歌うことを禁じる.

二番目は操作の段階があるということと、段階のある部分で接続法（‘転換点 {cut-off point}’）の義務的な使用の転換があるだろうということである。したがって両方の構文が上記の用例において動詞に関して用いられる一方、接続法のみが許容されている。

le dijeron que les-siguiera

him they.told that them-follow+3SG+PRES+SUBJ

‘They told him that he should follow them’

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した.

NOT

*le dijeron seguir-les

him they told follow+INFIN-them

話すことは命令よりもより弱い操作であると彼は示している。彼が例証している拘束的な動詞は次のようなものである。

Stronger, with either construction: MANDAR ‘order’, PROHIBIR ‘prohibit’, OBLIGAR ‘make’

Weaker, with subjunctive only: DECIR ‘tell’, PEDIR ‘ask’, QUERER ‘want’

どちらかの構文に関してより強いもの: MANDAR ‘order’, PROHIBIR ‘prohibit’, OBLIGAR ‘make’

接続法に関してのみより弱いもの: DECIR ‘tell’, PEDIR ‘ask’, QUERER ‘want’

彼はまた不定詞によって表わされたより強い操作の観点からバンツー諸語の Bemba 語で類似した状況があることを示している (Givón1994:283;cf. Givón 1971:75). 彼は以下の用例のように、本動詞の目的語に関して非定型の構文と目的語に関して定型の構文、目的語を伴わない定型の構文の3つの構文を比較している。

n-à-mu-ebele uku-ya
I-REM-him-order INFIN-go
'I told him to leave'
私は彼に離れるように話した。
n-à-mu-ebele (ukuti) a-y-e
I-REM-him-order (that) he-go-SUBJ
'I told him that he should leave'
私は彼が離れるべきだと彼に話した。
n-à-ebele ukuti a-y-e
I-REM-order that he-go-SUBJ
'I said that he should leave'
私は彼が離れるべきだと言った。

これは MANDAR と DECIR に関するスペイン語の文に類似しているが、しかし操作の強さの3つの段階に関して単独の動詞によって表わされる。彼はまたさらなる強さに関する命令の他の動詞を考えており、再び操作の強さの3つの段階を見出しているが、しかしより高い転換点を持っている。

n-à-mu-koonkomeshya uku-ya
I-REM-him-order INFIN-go
'I forced him to leave' (He left)
私は彼に発つよう強要した。(彼は出発した)
n-à-mu-koonkoomeshya (ukuti) a-y-e
I-REM-him-order (that) he-go-SUBJ
'I ordered him to leave' (He may or not have left)
私は彼に発つよう命令した。
(彼は発つかもしれないし、発たないかもしれない)
n-à-koonkoomeshya ukuti a-y-e
I-REM-order that he-go-SUBJ
'I ordered that he should leave'
私は彼が発つべきだと命令した。

ここで非定型の構文は、遂行されている命令を与えるという意味を持つが(英語に翻訳される相当語句はない)、しかしそこには再び3つの力の段階がある。

Givón もまた英語において ORDER と TELL に関する異なる可能性があることを指摘している。

They ordered him to follow them
 Not *They ordered him that he (should) follow them
 They told him to follow them
 They told him that he should follow them

彼らは彼らの後続くよう彼に命令した.

*

彼らは彼らの後続くよう彼に話した.

彼らは彼が彼らの後続くべきだと彼に話した.

もちろんこれはスペイン語で異なる. 英語における ORDER は‘接続法’ (*should* 7.6 参照)を許容しない. なぜなら TELL が両者を許容する一方, ORDER はあまりにも操作動詞が強いゆえ不可能なのであると Givón は述べている. これはスペイン語と英語が操作の段階の問題であるという違いを示している. 以下の用例のように, スペイン語で操作性が高い動詞は両構文を許容し, 操作性が低い動詞は不定詞のみを許容する. 一方英語では操作性が高い動詞は不定詞のみを許容し, 操作性が低い動詞は両構文を許容する.

<i>English</i>		<i>Spanish</i>	
order	Infin.	mandar	Infin., Subj.
forbid	Infin.	prohibir	Infin., Subj.
make	Infin.	obligar	Infin., Subj.
tell	Infin., Subj.	decir	Subj.
ask	Infin., Subj.	pedir	Subj.

しかし英語における状況はこれよりもさらに複雑である. 上記のすべての例において, 動詞に続く名詞句は動詞の意味論的, 統語的に目的語である. 誰かが何かをするために誰かに命令する, 禁じる, させる, 話す, 頼む. しかし唯一目的語があるときのみ完全な従属節である動詞がある. したがって *I ordered John to come* に関して適当な意味は, 私はジョンに命令したである. つまり私はジョンに命令を与えたとなる. しかし *I wanted John to come* は, いかなる意味においても私はジョンを求めていなかった—私が望んだものは‘ジョンを来させること’であった. 今では英語にはこのような多くの動詞がある. それらは不定詞あるいは接続法のいずれかの構文を取る. 驚くことに, おそらく ORDER はそれらの中にあり, それは接続法において受動態が用いられるところで明らかに見られ得る.

He ordered the flag to be raised

He ordered that the flag be raised/should be raised

彼は旗が揚がるよう命令した。

彼は旗が揚がることを / 揚がることを命令した。

命令が旗に対して与えられたのではないことは明らかである。しかしこれは若干奇妙である。なぜなら PREFER と REQUIRE は両構文を許容し, WANT と EXPECT は不定詞の構文のみを許容し, 一方 SUGGEST と PROPOSE は接続法のみ許容し, TELL はこのすべてに当てはまらないからである。

I prefer/require the flag to be raised

I prefer/require that the flag (should) be raised

I want/expect the flag to be raised

*I want/expect that the flag (should) be raised

I suggest that the flag (should) be raised

*I suggest the flag to be raised

I propose that the flag (should) be raised

*I propose the flag to be raised

*I told the flag to be raised

*I told that the flag (should) be raised

私は旗が揚げられることを好む / 要求する。

私は旗が揚げられることを好む / 要求する。

私は旗が揚げられることを欲する / 期待する。

*

私は旗が揚げられることを提案する。

*

私は旗が揚げられることを提案する。

*

*

*

これらはスペイン語の文と直接比較することができない。なぜならこの構文のタイプではスペイン語は接続法を伴った定型の形式のみを許容するからである。しかし Givón の操作の段階は, すべての強い動詞が不定詞を許容し, SUGGEST や PROPOSE といった弱い動詞のみが許容しないという点で, 関与的であるのかもしれない。

しかしここで TELL に関する問題がある。なぜ TELL はこのすべてに当て

はまらないのか？なぜ **ORDER** のようにならないのだろうか？最も明白な理由は、**TELL** が補語を有するときに有情の目的語を常に求めるからである。人は常に話すべき誰かを必要とするのである。他の理由としては報告された命令よりも、報告された叙述に関して主に用いられるということかもしれない。これは以下の用例で明らかである。

I told them that I was coming

私は彼らに私が来たことを話した。

しかしこれもまた次の例に当てはまるかもしれない。

They told him that he should follow them

彼らは彼が彼らの後に続くべきだと彼に話した。

ここで **Should** は間接命令のなかの‘接続法’の *should* ではなく、モーダル動詞が間接的な叙述のなかで義務のために用いられたものである。それについての証拠は‘接続法’としての単純な形式がこの構文で用いられないということである。

!He told them that they follow him

！彼は彼らが彼の後に続くべきだと彼らに話した

これは‘彼は彼の後に続くことを彼らに話した’という意味を表せず、単に‘彼は彼らが彼の後に（実際に）続くということを彼らに話した’を意味している。

しかしイタリア語では動詞 **DIRE** ‘tell/say’ はいずれかの構文を取る多くの動詞の一つである。スペイン語の **DECIR** や英語の **TELL** のような制約を持たない。

非現実のより強い程度を表す接続法に関する傾向があるにもかかわらず、二つの構文の選択は明らかに概念的特徴によって動機づけされている。

7.4.2 直接話法

従属節において接続法に変わる他のものは、もとの発話の実際の語を報告するという直接話法の使用である。

直接話法はしばしば報告の叙述に関して用いられるが（接続法の使用は非常に一般的ではない—最後のセクションの冒頭のパラグラフを参照せよ）、しかし直接話法は報告の質問と命令に関しても用いられ得る（接続法の使用は一般的である）。

He said 'I'm coming'
I asked 'Are you coming?'
She said 'Come!'

彼は「ただいま」と言った。
私は「あなたは来つつあるのか」と尋ねた。
彼女は「来い!」と言った。

直接話法は間接話法の付属的な代替物として、あるいは報告を示す唯一の方法としてのいずれかでほとんどすべての言語に確かに見られる。直接話法のいくつかの例（報告の命令に関するすべて）は Kobon 語(New Guinea-Davies 1981:2), Yidiny 語 (Australia-Dixon 1977:524), Syrian Arabic 語 (Cowell1964:450)から挙げられる。

nipe ip hag-öp ne ñel ud-ag-ø QUOTE g-öp
3SG 1SG say-PERF+3SG 2SG firewood take-NEG-2SG a do-PERF+3SG
'He said to me "Do not take the firewood"'

彼は「薪を取るな」と私に言った。

damaringu bugi:n bana: bugi diga mamba
Damari+ERG tell+PAST water+LOC put+imp pour.water.on+IMP sour+ABS
'Damari told him "Put it in the water, pour water on it, it's bitter"'

Damari は「それに水を入れろ、それに水を注げ、それは苦い」と
彼に言った。

marra w-marrtēn ʔəlt-əllō lā təlsab bəṭṭari
time and-time I.told-to.him not play+IMP in.the.street
'Time and time I've told him "Don't play in the street"'

たびたび私は「通りで遊ぶな」と彼に言ったものだ。

さらに興味深いことに、英語よりもさらに広く直接話法の構文を取り入れる言語がある。したがって Amharic 語の話しことば(Semitic, Ethiopia-Cohen 1936:363)では、畏怖の表現は、以下のように実際の語が話されなくても直接引用に続く「畏怖{fear}」の動詞に「言う{say}」の動詞を足すことによって表わすことができる。

mangadum aagaññaum bəyye əfarallaūh
the.road he.will.not.find.it I.saying I.fear
'I am afraid he won't find the road'

私は彼が道を探せないのではないかとおそれている。

同じ方法で無情名詞の目的語によって‘拒絶{refusal}’を表すことも可能である。

səga albasləmm ala
meat.I.will.not.cook said
‘The meat refused to cook’
その肉を料理しないように言った。

多くの言語は間接話法を持っていないと言われてきたが、しかしさらに正確に言えばいくつかの言語では直接話法が滅多に使われないかもしれない。例えば一般的にオーストラリア諸語は直接話法のみ用いるが、Ngiyambaa 語 (Australia・Donaldson 1980:280)の例を考察する。

ŋadhu-na ŋiyiyi girma-li ŋinu:
I+NOM-3ABS say+PAST wake-PURP you+OBL
‘I told her to wake you’

私は彼女にあなたを起こすよう言った。

ここで実際の語は‘彼を起こせ’であり、そのためこれは明確な直接話法ではない。実際にここでのように代名詞を変えるものである（また英語のようにいくつかの言語で時を表すマーカーのように他の直示的なもの）‘ダイクシスのシフト{deictic shift}’は間接話法の不可欠の特徴である。なぜなら英語は、代名詞、時制、時の代名詞といった4つのダイクシスが変わるという点において、二つの文を比較するからである。

He said ‘I’m coming tomorrow’
He said he was coming the next day

彼は「私は明日来る」と言った。
彼はその翌日来ると言った。

7.5 話し手の専心

間接話法についてなされるさらなるポイントがある。いくつかの言語は話し手が報告された発話が真実であることを信じるかどうか示すための工夫がある。英語では報告された叙述が二番目の話し手によって真実だと受け入れられても、時制の変化を包含するダイクシスのシフトはないかもしれない。

I said ‘I’m coming on Tuesday’
I said that I was coming on Tuesday
I said that I’m coming on Tuesday

私は「私は火曜日に来る」と言った。
私は私が火曜日に来るということを言った。
私は私が火曜日に来るということを言った。

三番目の例は話し手の来るという意図を示している。非常に明確な例は Jespersen(1909-49:IV,156)によって与えられている。

The ancients thought that the sun moved round the earth; they did not know that it is the earth that moves round the sun

古代人は太陽が地球の周りをまわると考えていた。つまり彼らは太陽の周りをまわるのが地球であるということを知らなかったのだ。

ここでのポイントは、*moved* に関して最初の命題は話し手によって受け入れておらず、一方 *moves* に関して二番目の命題は話し手によって真実として受け入れられていることが明らかであるということである。

これは明らかに概念的にモーダルな特徴として見做されている。また過去時制があるときにドイツ語では 5.2.2 で記されたように、ドイツ語の文語は間接話法で接続法を用いるにもかかわらず、直接法は話し手による信用を示すために用いられ得るという点で、文法的なムードが包含されている。

Er sagte, er schwimmt gern
 he said he swim+3SG+PRES+IND with.pleasure
 ‘He says he likes swimming’

彼は彼が水泳が好きだと言っている.

次の用例は対立している.

Ich glaubte dass er wäre krank
I thought that he be+3SG+IMPF+SUBJ ill
'I thought he was ill'

私は彼が病気だったと思った。

Ich glaubte dass er krank war

I thought that he ill be+3SG+IMPF+IND

'I thought he was ill'

私は彼が病気だったと思った。

しかしムードの選択もまた、文体や社会言語学的な要因に依拠している (Hammer 1983:265-8 参照)。英語のように時制の変化はなく、単にムードの変化があることに注意せよ。

同様に古典ギリシャ語は報告の過去時制動詞を伴って願望法{optative}のムードを用いるが、しかし元の時制（直接話法）を伴って、直接法も用いる場合がある。

e:peílers' hótí . . . badioíme:n (Ar. Pl. 88)

I.threatened that go+1SG+FUT+OPT

'I threatened that I would go'

私は私が行くと脅した。

e:ngélthe autó:i hótí Mégara aphéste:ke (Thuc. 1.114)

it.was.reported to.him that Megara revolt+3SG+PERF+IND

'News came to him that Megara had revolted' (not 'has revolted')

Magara が背いたという知らせが彼に來た（‘背く’ではなく）。

以下の用例のように、おそらく話し手の専心{speaker commitment}のいくつかの指示に関して、同様な文のなかに両方の構文に関するいくつかの例がある。

élegon hótí Kú:ros mén téthne:ke,

they.said that Cyrus on.the.one.hand die+3SG+PLUP+IND

Ariaíos dé pepheugó:s . . . eíe: (Xen. An. 2.1.3)

Ariaeus on.the.other having.fled be+3SG+PRES+OPT

'They said that Cyrus had died, but that Ariaeus had fled'

彼らはCyrusが死んだと言ったが、しかしAriaeusは逃亡したと言った。

日本語(Kuno 1973:261)のようにいくつかの言語には直示的なシフトが時制に影響しないものがある。報告された発話は実際の発話の時制を保持している。しかし日本語は *no*, *koto*, *to* といった3つの異なる接続詞を有する(Kuno 1973:213-22)。 *to* よりも *no* あるいは *koto* の選択は命題の真実に対する話し手の専心の程度に依拠しているようである(Suzuki 1994, Kuno の議論を再検討し

たもの). Kuno(1973:216-17)によると, 以下の用例に接続詞の選択がある.

John wa Mary ga sinda to sinzinakatta
John Mary died that not-believed
'John did not believe that Mary was dead' (She might or might not have been)

ジョンはメアリーが死んだと信じなかった.

John wa Mary ga sinda koto o sinzinakatta
John Mary dead that not-believed
'John did not believe that Mary was dead' (She was)

ジョンはメアリーが死んだことを信じなかった.

この理由から 'to forget' は *to* と共起することができず, *koto* のみが共起し得る.

John wa Mary ga tunbo de aru koto/no (*to) o wasureteita
John Mary deaf is that had.forgotten
'John had forgotten that Mary was deaf'

ジョンはメアリーがつんぼであること/*の* (*と) を忘れていた.

対照的に '誤った考え {wrong notion}' は唯一 *to* と共起し得る (Suzuki 1994:526).

John wa Mary ga shinda to (*koto/no) o gokaishita
John Mary died that formed.a.wrong.notion
'John formed the wrong notion that Mary had died'

ジョンはメアリーが死んだと (*こと/*の*) を誤解した. ¹⁾

同様に Kinyarwanda 語 (Bantu, Rwanda-Givón 1982:26-32, Givón と Kimenyi 1974 より引用)では, *ko*, *ngo*, *kongo* といった3つの接続詞があり, それぞれ (実際の) 話し手による異なる種類の専心を表している.

ya-vuze ko a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come
'He said that he'd come' (and I have no comment)

彼は来たと言った (私は何も言っていない).

ya-vuze ngo a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come

‘He said that he’d come’ (but I have direct evidence which makes me doubt it)

彼は来たと言った（しかし私はそれを疑わしいと思う直接的な証拠を持っている）。

ya-vuze kongo a-zaa-za
he+PAST-say that he-FUT-come

‘He said that he’d come’ (but I have indirect/hearsay evidence which makes me doubt it)

彼は来たと言った（しかし私はそれを疑わしいと思う間接的 / 伝文の証拠を持っている）。

‘後悔 {regret}’, ‘忘却 {forget}’ のような事實的 {factive} で非主張 {non-assertive} の補文化詞は, *ko*, つまり最も強い程度の専心のマーカーであり *ko* を要求する。

しかし類似した区別を行う他の言語は, Jacalteco の方言である Jacaltengo 語 (Mayan, Guatemala-Craig 1977:268) である。 *chubil* (‘事実の “that” に一致する’) と *tato* (‘期待された, 想像された, あるいは信用された事実を紹介する’) には対立がある。両者は言われたことの信憑性あるいは信憑性のなさを示す言語活動動詞と共に用いられ得る。

xal naj tato chuluj naj presidente
said he that will.come the president
‘He said that the president is going to come’

大統領が来る予定だと彼は言った。

xal naj alcal chubil chuluj naj presidente
said the alcalde that will.come the president
‘The alcalde said that the president is going to come’

大統領が来る予定だと市長は言った。

最初の用例は信憑性のない情報源を示しており, 二番目の用例は信憑性のある情報源を示している。

いくつかの言語において, 報告されたことの真実性に関する話し手の疑いが, 例えば Polish 語, Czech 語, Mapun 語 (Chadic, Nigeria) では小詞によって示される場合がある。 Polish 語と Mapun 語から例を挙げる。

Powiedział, że niby jest chory
 he.said that BE+3SG DOUBT sick
 ‘He said that he is sick, but I am not sure that it is true’

彼は自分が病気だと言ったが、しかし私はそれが本当だと確信していない。

wur sat mun ni din paa yol muan
 3SG say 1PL that 3SG+COREF DOUBT go trip
 ‘He told us that he went on a trip, but maybe he didn’t go’

彼は旅行に行ったと私たちに話したが、しかしおそらく彼は行かなかった。

Mapun 語ではなく Polish 語では、小詞は本動詞の主語が一人称である場合に報告された叙述が嘘（話し手による）であることを示すために用いられる場合がある。

Powiedziałem, że niby jestem chory
 I said that be+3SG DOUBT sick
 ‘I said that I am sick, but I am not’
 私は病気であると私は言ったが、しかし私は病気ではない。

Lega 語(Bantu, E.Zaire-Botne 1997:512-14)では若干異なり、報告{Reported}として一般的に用いられる小詞は叙述に対する疑いを表すために用いられる場合がある。

nkumgwágá (bónɔ), ámbo bazongo bé kulyágá merende
 I.hear that whites QUOT eat frog
 ‘I hear that Westerners eat frogs (though I find that unlikely)’
 西洋人は蛙を食べると聞いている。(私はありそうにないことだと思うのだが)

それは叙述が話し手に関するとき、意見の不一致を表す。

bábolá bónɔ ámbo nne nekobákesá
 they.tell that QUOT I tricked
 ‘They say that I tricked them (though I take exception to it)’

彼らは私が彼らを騙したと言っている。(私はそれについて異議を唱えるが)

7.6 英語における接続法

英語には接続法について考えられてきた3つの構文がある。

ひとつは *If I were rich* における *were* の使用であるが、これは非常にマージナルである。なぜならそれは条件文に限られているからであり、しかしまた *were* についての使用が厳密には普通であるからである。他のすべての動詞に関して、*came, liked, walked* などといった一つの過去時制の形式がちょうどあるが、これもまた条件文においては次の *I were, you were, they were* などのように *were* に当てはまる。その意味で *were* は非常に不規則である。不規則なものは他のすべての過去時制の形式に関する単数において *was* の使用がある。なぜなら他の動詞は単数と複数の異なる形式を有していないからである。

二番目の構文は I demand that he come tomorrow. のような文における単純な形式に関するものである。この使用はアメリカ英語の書き言葉で残っているようだが、英語では稀になりつつあり、特にイギリス英語においてそうである。文法家はその消滅を嘆いているが、しかし他の言語における接続法のように二番目の構文は形式を区別しない。つまりそれは単に動詞の単純な形式に過ぎない。そしてその動詞の単純な形式は英語において様々な機能を持っている。特に不定詞と命令において、その構文が単純で屈折していない形式の一つの機能を表していると認めるのではなく、その構文を‘接続法’と呼ぶことによって得られるものは何もない。

三番目の可能性は *It's odd that you should say that* のような *should* の使用である。これは明らかにモーダルな動詞の使用であり、接続法と比較されるようなものである。しかし形式的にこれはモーダルな動詞の過去時制であって、この章の接続法のような異なるパラダイムではない。(類似した理由によって、英語には厳密には未来時制がない—Huddleston(1995)参照)

should と接続法の驚くべき類似性は、例えば 5.2.5 のイタリア語の用例とその英語の訳において、命題が前提されている構文で用いられていることである。

mi sorprende che tu dica questo
me it.surprises that you say+2SG+PRES+IND that
'It surprises me that you say that'
'It surprises me that you should say that'

あなたがそれを言うことが私を驚かせている。

あなたがそれを言うことが私を驚かせている。

should は現在あるいは過去を言及し得るということが付け加えられなければならない。上記の二番目の英語の文は、以下の二つのうち一つと同じである。

‘It surprises me that you say that’

‘It surprises me that you said that’

あなたがそれを言うことが私を驚かせている。

あなたがそれを言ったことが私を驚かせている。

Quirk *et al* (1985:1014)はこの使用を‘推定{putative}’として言及しており、またその使用は（それは）あり得る存在，あるいは存在が現れることとして認識される推定上の状況を言及すると示唆している。それらと比較せよ。

I’m surprised that he should feel lonely

I’m surprised that he feels lonely

彼が孤独を感じていることに私は驚いている。

彼が孤独を感じていることに私は驚いている。

彼らは最初のものは孤独であることを疑っており、一方二番目のものはそれを真実として受け入れているものであること示している。同様に彼らは意味が条件節の意味に接近している場合、非事実{non-factual}の基礎があると示唆している。

It’s a pity that they should be so obstinate

It’s a pity if they are so obstinate

彼らがとても頑固であることは残念だ。

彼らがとても頑固であることは残念だ。

should の他の使用は次のように条件文におけるものである。

If John should come, Bill will leave

Cf. If John comes, Bill will leave

ジョンが来るならビルは出発するだろう。

ジョンが来るならビルは出発するだろう。

ここで *should* の使用はある不確実性を表している（これは非現実{unreal}条件の例である 8.3 のトピックではない。If John came, Bill would leave.とは極めて異なる。8.3.4 参照）。

should のこれらの使用が‘接続法’と呼ばれるか否かはまったく重要ではない。それらは他の言語で接続法に関していくつかの類似点を持っており、一方で‘接続法’という術語は概して屈折の範疇を示すために用いられる。*Should* は形式的にモーダルな動詞の過去時制の形式に過ぎない。

8 モーダルとしての過去

過去時制がしばしばモーダルな機能を有することは 1.4.4 で言及された。‘非現実性{unreality}’を表すための過去時制の形式のこの使用を議論している一連の文献が実際にある。

8.1 ‘現実{real}’と‘非現実{unreal}’

話し手による信用の欠如の程度を示しているという点で、‘非現実性{unreality}’は非現実{irrealis}とこの意味で概念的に共通しているが、しかしいくつかの理由で異なる特徴として扱われるのがよい。第一に非現実性は意味によって異なってマークされている、第二に非現実性はムードとモダリティの体系の両方において非現実{irrealis}のマーカーと共に起する。つまり実際に‘現実{real}’と非現実{unreal}はこの意味においてさらなる違いをマークし、さらに広いモダリティの領域の中で他のパラメータをマークする。当然のことながら、非現実性の機能はしばしば非現実{irrealis}のものとは極めて異なる。

8.2 モーダルな時制

‘非現実性{unreality}’は十分な術語ではない。なぜならそれは‘非現実{irrealis}’に類似しすぎており、また不幸なことに‘現実{real}’、非現実{irrealis}という術語は‘非現実の条件{unreal conditional}’を言及するために伝統的な文法において用いられてきた(8.3 参照)。その術語の代わりに‘モーダルな過去’、そしてそれに関与する‘モーダルな現在’、‘モーダルな時制’が用いられるであろう。

8.2.1 モーダルな動詞

より弱く、仮定的な判断{judgements}の形式や指令{directives}を定めるモーダルの過去時制の形式の使用については 2.1.5, 3.2.3 で議論された。そこにはここで‘モーダルな過去’と呼ばれるものが明らかにある。

MAY と WILL の仮定的な認識的判断（推測 {Speculative} と想定 {Assumptive}）の過去時制の形式の例は次のようなものである。

He might be there (Cf. He may be there)

He would be on holiday now (Cf. He will be on holiday now)

彼はそこにいるかもしれない。(Cf. 彼はそこにいるかもしれない)

彼は今頃休暇だろう。(Cf. 彼は今頃休暇だろう)

MUST は過去時制の形式を持っていないが, *ought to* や *should* がその隙間を埋めているようである.

He ought to/should be there by now (Cf. He must be there by now)

彼は今ここにいるに違いない. (Cf.彼は今ここにいるに違いない)

should は形式的に SHALL の過去時制形式であるが, しかしそれは仮定的な認識的必要性 (推定 {Deductive}) を表し, したがって概念的に MUST のモーダルな過去の形式の一つである.

拘束的なモーダル{deontic modals}に関して, WILL についてのみ一対一の対応がある.

I'd do that for you (Cf. I'll do that for you)

私はあなたのためにそれをしましょう.

(Cf.私はあなたのためにそれをしましょう)

しかし一方, *may* と *can* は許可を与え, 対応する過去時制の形式である *might* と *could* は通常示唆を与えるのに用いられる.

You might/could ask your father

あなたはあなたの父親に尋ねてみるほうがいい.

Ought to と *Should* は再び MUST に関して使うことができる.

You ought to/should come tomorrow (Cf. You must come tomorrow).

あなたは明日来るべきだ. (Cf.あなたは明日来なければならない)

約束{commisive}の SHALL は一致するモーダルな過去の形式を持たない.

これらの例外のために, 多くの研究者は *might*, *could*, *should* は MAY, CAN, SHALL の過去時制の形式ではないと議論されてきた. しかし時制の観点からの関係は2つの方法で論証される. 第一に '時制の連続' の法則によって, 現在時制の形式は報告の過去時制動詞の後で過去時制に変わる. これは本動詞だけではなくモーダルなものにも適用される.

'I am coming'

He said that he was coming

‘私は来つつある’

彼は彼が来つつあると言った.

‘He may be there’

She said that he might be there

‘彼はそこにいるかもしれない’

彼女は彼がそこにいるかもしれないと言った.

‘You may come in’

He said that I might come in

‘あなたは入ってもよい’

彼は私が入ってもいいと言った.

‘I’ll do it for you’

She said that she’d do it for me

‘私はあなたのためにそれをするだろう’

彼女は彼女が私のためにそれをするだろうと言った.

第二にこれらの過去時制の形式は, 8.3 のテーマである非現実の条件{unreal conditional}において現在時制の形式に対して, 厳密に同等な関係と共に用いられる.

時制のこの使用はモーダルな動詞に限られていない. それはまた以下のように, 丁寧さ{polite}, 仮定{tentative}, 要求{requests}, 質問{questions}においても見出される.

I wanted to ask you a question

Did you want to speak to me?

私はあなたに質問したい.

あなたは私と話したかったか?

しかし Bybee(1995:506)が指摘しているように, WANT は概念的にモーダルである. この時制の用法は動詞の他のタイプでは見出されない.

8.2.2 ギリシャ語の願望法

接続法に加えて古典ギリシャ語は願望法というムードを有する. その機能の一つは願望{wishes}の表現のなかにある.

ó: paí génoio patrós eutukhésteros (Soph. Aj. 550)
O child become+2SG+AOR+OPT of.father luckier
'My child, mayst thou be luckier than thy father'

わが子よ, あなたの父親より幸運であれ.

それはまた英語の might よりも示唆に関してホメロスの時代においても用いられている.

táut' eípois Akhilé:i
these say+2SG+AOR+OPT to.Achilles
'You might tell Achilles this'

あなたはアキレスにこれを言うかもしれない.

古典ギリシャ語には明らかに3つのムードがあるため, これは現実と非現実の二元体の種類に対する議論であるように思えるが, しかし実際には願望法は接続法のモーダルな過去として見られ得るのである.

形態論的にこれには証拠がある. まず接続法は現在時制に対して類似性を有しており, 一方願望法は未完了相に対して類似性を有している. 以下の形式のようなものである (一人称, 中動態).

- | | |
|----------------------|----------|
| ● Present indicative | lúomai |
| ● Subjunctive | lúo:mai |
| ● Past indicative | elúome'n |
| ● Optative | lúoime:n |

- ・ 現在直接法
- ・ 接続法
- ・ 過去直接法
- ・ 願望法

さらに重要なことに, 識別は伝統的に '一次的な{primary}' 時制と '歴史的な{historic}' 時制の間でなされるが, それは若干複雑であり, 本質的に現在と過去時制の識別であり, これは統語的な関係である (以下参照). 現在と未完了相の時制はそれぞれが一次的なものと歴史的なものであるが, しかしそれらは直接法においてのみ異なる. つまりそこにはそれらのペアに関連する唯一の接続法とひとつの願望法の体系があるのである. 同様なことが完了相と過去完了{pluperfect}に当てはまり, それらは現在と時制ではなくアスペクトにおける完了相, 過去完了に関しては完了相の過去を区別するものとして見られ得る (伝

統的な術語は誤りである。現在と未完了相は現在と未完了相の過去として見る方がよい。そして完了相と過去完了は現在そして完了相の過去として見る方がよい。そしてこれらの時制に関して、接続法と願望法もまた時制において異なり、接続法は現在であり、願望法は過去であるということが議論され得る。

<i>Imperfect</i>			
<i>Indicative</i>		<i>Subjunctive</i>	
Present	Past	Present	Past
'present indicative'	'imperfect indicative'	'present subjunctive'	'present optative'
<i>Perfect</i>			
<i>Indicative</i>		<i>Subjunctive</i>	
Present	Past	Present	Past
'perfect indicative'	'pluperfect indicative'	'perfect subjunctive'	'perfect optative'

古典ギリシャ語は時制の区別がある中で完了相と未完了相のアスペクトを有しているという示唆は新しくない。しかし未完了相と完了相として同じパラダイムに属している形式的に二つの他の範疇があるということが一般的には認識されてこなかった。これらはアオリストと未来であり、したがって2つではなく4つのアスペクトがあるということが議論され得る（‘アスペクト’は最も適切な術語ではないが）。4つの‘アスペクト’があるという議論の理由は各々が自らの不定詞と分詞{participle}（時制に関して変化しない）を有し、そしてそれらは接続法と願望法を有するという事実が付け加えられる。

しかしアオリストと未来に関していくつか異なる点がある。アオリストは形態論的に現在と過去の形式を区別しないが、しかしそれは接続法と願望法の両方を有する。しかし統語的にはアオリストの直接法は一次的なもの{primary}あるいは歴史的なもの{historic}のいずれかでありえ、したがって一次的なもの（現在）の接続法と歴史的なもの（過去）の願望法を持っていると言われ得る。

Aorist

Indicative		Subjunctive	
Present	Past	Present.	Past
'aorist' ('primary')	'aorist' ('historic')	'aorist subjunctive'	'aorist optative'

The future has only an optative, so that the pattern would seem to be:

Future

Indicative		Subjunctive	
Present	Past	Present	Past
'future indicative'	none	none	'future optative'

未来は願望法のみを持ち、以下のようなパターンが見られるだろう。

しかし接続法の欠如は接続法に関する未来の密接な結びつきによる（それと両者は概念的に非現実であるという事実によるもの）と考えられている。

一次的なものの{Primary} / 歴史的なもの{Historic}に関する統語的な議論と、モーダルな過去としての願望法に関する議論は、上位節にある動詞が歴史的なもの{Historic}であるならば、従属節のいくつかのタイプにおいて接続法の代わりに願望法が要求される。これは以下のように目的の節に関して明確である。

tón kakón deí kolázein hín' ameínon
the bad it.is.necessary to.punish in.order.that better
e:1 (Plat. Legg. 944D)

be+3SG+PRES+SUBJ

'We must punish the bad man to make him better'

私たちは悪い男を更生させるために罰さなければならない。

épempsa hó:s púthoito

I.sent that learn+3SG+AOR+OPT

'I sent him that he might learn'

彼が勉強するかもしれないから、私は彼を送った。

最初の例では、本動詞(*dei*)は現在{present}と一次的なもの{primary}であり、従属節の動詞は接続法の中にある。二番目の例では、本動詞はアオリストと歴史的なもの{historic}であり、従属節の動詞は願望法の中にある。

願望法はまた、元の発話において現在時制の形式を報告することに用いられる。

élegon hóti pantós áksia légoi seúthe:s (X. An. 8.3.13)
 they.said that of.all worthy say+3SG+PRES+OPT seuthes
 ‘They said that Seuthes’s words were all-important’

彼らは Seuthe の言葉はとても重要だと言った。

元の語は現在の直接法を含んでいた(*légei*, ‘says’). 英語は同様に, were が元の are を報告する訳を示すように, 報告の過去時制の動詞の後ろに過去時制を用いる。

同様に願望法は, 歴史的な本動詞の後で報告された原因のために用いられる。そこでラテン語は接続法を用いる (5.2.2 参照)。

oístha epainésanta autón tón Agamémnona ho:s basileúste te
 you.know praise+AOR+PART he the Agamemnon as king both
 eie: ágathos, kraterós t aikhme:té:s (Xen. Symp. 4.6)
 be+3SG+PRES+OPT good, mighty and warrior
 ‘You know he praised Agamemnon because (he said) he was both a
 good king and a powerful warrior’

あなたは彼がアガメムノンを称賛していたことを知っていた。なぜなら彼はよい王であり, 力のある戦士の両方であったからだ (彼が言った)。

したがって願望法を他のムードとして認識する必要はなく, 直接法と接続法の区別をする必要もない。それはモーダルな過去の接続法として見做され得る。

8.3 現実と非現実の条件

非現実性{unreality}について最も注目され, また最も広範囲な過去時制の使用は条件文の中にある。数多の言語において明確な識別は現実{real}と非現実{unreal}の条件の間でなされ得る。非現実の条件は話し手が条件節{protasis} (‘if 節’) において表わされる条件に対する否定的な態度のいくつかの種類を示すところで用いられる。いくつかの言語ではこれは時制のみでマークされるが, その他の言語では時制とムードの組み合わせでマークされる。

8.3.1 時制によるマーキング

英語では (Palmer 1990:169 参照) 以下のものの間に対立がある。

If John comes, Bill will leave

If John came, Bill would leave

もしジョンが来るならビルは発つだろう。

もしジョンが来るならビルは発つだろう。

これらは現実{*real*}と非現実{*unreal*}の条件文の例である。概念的にその違いは非現実の条件に関して、話し手は条件節{*protasis*} (ジョンの来訪) で示された出来事の可能性{*likelihood*}についていくらかの疑いを示しているということである。一方現実の条件に関して、可能性{*possibility*}は単に開かれたままである。形式的にはそれらの違いは両方の節における時制のマーキングにある。つまりは現実の条件節は現在時制の動詞を持ち、非現実の条件節は条件節と主節の両方で過去時制の動詞を持つのである。現実を非現実に変えるためには、*comes* は *came* によって代われ、*will* は *would* によって置き換えられる。

以下のように過去において非現実の条件に一致するものがある。

If John had come, Bill would have left

ジョンが来たならば、ビルは発つただろう。

ここで過去は二度マークされており、一度は過去の時について、もう一度は非現実性に関してマークされている。マーカは過去時制の *had*, *would*, *HAVE* を持っている。なぜなら英語における *HAVE* の機能は完了相のアスペクトと過去の時 (詳細は Palmer 1990:170 参照) の両マーカであるからである。

原因と効果という観点から、他の条件にひとつの出来事の出現を示すため、‘予言{*predictive*}’ と呼ばれる場合があるこのタイプの条件は、常に帰結節 (現実と非現実の両方) でモーダルな動詞を要求する。

If John comes, Bill can leave

If John came, Bill would leave

If John had come, Bill might have left

もしジョンが来るならビルは発つことができる。

もしジョンが来るならビルは発つだろう。

もしジョンが来たならビルは発つたかもしれない。

非予言的な条件節とは、*if John came, Mary left* のようなものであり、もし条件文が真であるなら、原因と結果があるということを必然的に示唆しない帰結節であるということを示しているに過ぎない。そのような文の時制またはモダリティに関しては規制はない。

非現実性{*unreality*}に関する時制のこの使用の例は、他の言語において見出

され得る。したがって古典ギリシャ語の未完了相の直接法は、現在非現実条件と小詞 *án* も含む帰結節の両方の節において用いられる。

ei toúto epoíeis, he:mártanes án
if this do+2SG+IMPF+INDIC err+2SG+IMPF+INDIC án
'If you were doing this, you would be wrong'
もしあなたがこれをすれば、あなたは悪かっただろう。

過去非現実の条件に関しては未完了相の代わりにアオリストを用いる。

ei toúto epoíe:isas, hé:martes án
if this do+2SG+AOR+INDIC err+2SG+AOR+INDIC án
'If you had done this you would have been wrong'
もしあなたがこれをしたなら、あなたは悪かっただろう。

しかし明確に未来を指示するものがある場合、現実の条件は条件文{protasis}の中で接続法（あるいは未来）を使い、帰結文{apodosis}の中で未来を使う。そして非現実の条件は両者において願望法を用いる。

ei toúto epoíe:is, hamarté:seis
if this do+2SG+PRES+SUBJ err+2SG+PRES+FUT
'If you do this, you will be wrong'
もしあなたがこれをするなら、あなたは悪いだろう。
ei toúto epoioíe:is, hamartánois án
if this do+2SG+PRES+OPT err+2SG+PRES+OPT án
'If you did this, you would be wrong'
もしあなたがこれをするなら、あなたは悪いだろう。

ムードがここで求められるにも拘わらず、現実{real}と非現実{unreal}の違いは接続法と願望法によってマークされている。そして本質的に 8.8.2 の観点から、その違いはそれでも時制の一つである。

エチオピア・セム諸語の Tigre 語と Tigrinya 語, Eritrea 語の口語（個人的な調査による）には非現実をマークするための類似した時制の使用がある。Tigre 語は過去時制に付け加えて、両方の節において小詞 *wa* を持っている。

London wa-gəsko, wa-mətko
London COND-go+1SG+PERF COND-die+1SG+PERF
'If I went to London, I would die'

もし私がロンドンに行ったなら、私は死んだだろう。

Tigrinya 語は条件文{protasis}において現在（未完了相）を持つが，しかし帰結文{apodosis}では過去（完了相）を持つ．

'əntä təḥarm-o, mə-mote
if hit+2SG+IMPF-him COND-die+3SG+PERF
'If you hit him, he would die'
もしあなたが彼を殴れば，彼は死ぬだろう．

近隣のクシ語である Bilin 語 (Palmer 1957) では，非現実もまた過去時制によってマークされているが，しかしまったく異なる方法である．この言語において，動詞は膨大なパラダイム（人称，性，数に関する屈折）を有するが，しかしこれらのパラダイムは，A と B といった二つのタイプの中で母音の質とトーンのパターンという特徴の観点からクラス分けされ得る．動詞のクラスに関しては以下に例証した．母音の後にすぐ付く語根は A における高いトーンなしの開母音であり，しかし B の母音は閉母音で高いトーンである．

A		B	
jəbāk ^w	he buys	jəbík ^w	he bought
jəbāx ^w	which he buys	jəbék ^w	which he bought
jəbāt	(says) that he buys	jəbét	(says) that he bought

これらの例が示しているようにパラダイムの多くは，B は過去の時を言及し，A は現在の時を言及するというように組をなしている．条件（条件文と帰結文の両方で用いられる）に関して二つの形式がある．これらは形式においてきわめて異なるが，しかし現実の条件に関して用いられるパラダイムはタイプ A であり，非現実の条件に関して用いられるパラダイムは B である（語根の後の母音とトーンを比較せよ）．

jəbän	'will buy/if he buys'
jəbínädik	'would buy/if he bought'

8.3.2 時制とムードによるマーキング

非現実の条件はしばしばムードと過去時制の両方によってマークされる．現在における非現実の条件について，ラテン語は未完了相の接続法を両方の節で用いる．

Si hoc faceres, errares
if this do+2SG+IMPF+SUBJ err+2SG+IMPF+SUBJ
'If you did/were doing this you would be wrong'

もしあなたがこれをしたら / していたら, あなたは悪いだろう。

しかし古典ギリシャ語のようにラテン語は, 明確な未来指示と共に非現実の条件に関する形式の異なるセットを持っている—それは両方の節において現在の接続法を有する。

Si hoc facias, erres
if this do+2SG+PRES+SUBJ err+2SG+PRES+SUBJ
'If you did/were to do this you would be wrong'

もしあなたがこれをしたら / していたら, あなたは悪いだろう。

ドイツ語は若干複雑である。ドイツ語は条件文{protasis}において未完了相の接続法を有するが, しかし実際に‘条件{conditional}’の時制は, しばしば未来をマークするモーダルの WERDEN の未完了相の接続法によって形成される。以下に例を挙げる。

Wenn ich ihm heute schriebe, bekäme
if I to.him today write+1SG+IMPF+SUBJ get+3SG+IMPF+SUBJ
er den Brief morgen
he the letter tomorrow

Wenn ich ihm heute schriebe, würde
if I to.him today write+1SG+IMPF+SUBJ be+3SG+IMPF+SUBJ
er den Brief morgen bekommen
he the letter tomorrow to.get

'If I wrote to him today, he would get the letter tomorrow'

もし今日私が彼に手紙を書いたら, 彼は明日手紙を受け取るだろう。

スペイン語もまた‘条件の時制{conditional tenses}’を使い, また未完了相の接続法あるいは条件文{protasis}における条件のいずれかを持っているが, しかし条件あるいは帰結文における条件の接続法を持っている。

Si yo tuviese/tuviera bastante dinero,
 if I have+1SG+IMPF+SUBJ/have+1SG+COND enough money,
 comprara/compraría otro automóvil
 buy+1SG+IMPF+SUBJ/buy+1SG COND+SUBS other car
 'If I had enough money, I would buy another car'

もし私が十分なお金を持っていたなら、私は他の車を買っただろう。

しかし英語やドイツ語とは異なりスペイン語はモーダルな動詞を必要としないが、しかしもっと正確に言えば、その（概念的に非常に類似した）未来時制と過去を伴ったこれとの合成を必要としないのである。

過去における非現実の条件に関して、ラテン語は単純に未完相の代わりに過去完了とさらなる遠過去のマーカーを使用するが、しかし接続法??

si hoc fecisses, errasses
if this do+2SG+PLUP+SUBJ err+2SG+PLUP+SUBJ
'If you had done that you would have been wrong'

もしあなたがあれをしたなら、あなたは悪かっただろう

ドイツ語は英語のようにさらなる過去時制を付け加えるために‘have’の形式(HABEN)を用いる（予想されるように‘過去完了の接続法’と‘条件の完了相’と呼ばれるものを生じている）。

Wenn ich ihm heute geschrieben hätte,
 if I to.him today written have+1SG+IMPF+SUBJ
 hätte er den Brief morgen bekommen
 have+SG+IMPF+SUBJ he the letter tomorrow got

Wenn ich ihm heute geschrieben hätte,
 if I to.him today written have+1SG+IMPF+SUBJ
 würde er den Brief morgen bekommen haben
 be+SG+IMPF+SUBJ he the letter tomorrow got to.have

'If I had written to him today, he would have got the letter tomorrow'

私が今日彼に手紙を書いたなら、彼は明日受け取っていただろう。

同じ方法で、スペイン語における過去の非現実の条件は単に HABER(*hubiese* と *habría*)の添加?追加?を含む.

8.3.3 モダリティと非現実性の相互作用

恐らく当然に、モダリティと（条件の）非現実性{unreality}にはいくつかの相互作用がある。これはラテン語で最も顕著だが、しかし英語の用例を最初に考察することによって最も容易く説明される。

以下のように *could have* の使用には違いがあることが議論されている。

He could have jumped six feet, if he'd trained hard

He could have jumped six feet, if he'd wanted to

もし彼が練習を厳しくしたなら、彼は6フィート飛ぶことができた。

もし彼が望むなら、彼は6フィート飛ぶことができた。

最初の例は厳しい練習が6フィート飛ぶ能力をもたらしたことを述べており、一方二番目の例は、その能力はすでに備わっていたので、能力ではなく望んだことが6フィート飛ぶことをもたらしたことを述べている。言い換えれば、*could have* は「私は」「私はできた」を示している。Austin(1956:163[1961:164])は *I could have* は‘過去の直接法’あるいは‘過去の条件’のいずれかでありえ、ラテン語の *potui* (‘I was in position to’) あるいは *potuissem* (‘I should have been in a position to’) のいずれかと同等である場合があることを示唆している。

明確な過去完了の接続法の例は以下のようなものである。

quod certe	si essem	interfectus, accidere
which certainly	if be+1SG+IMPF+SUBJ	killed to.happen
non potuisset		(Cic. Sest. 22.49)
not can+3SG+PLUP+SUBJ		

‘Which certainly could not have happened if I had been killed’

もし私が殺されていたならば、どちらの事態が確かに起こらなかっただろうか？

対照的に完了相の直接法の使用は次のようなものである。

deleri	totus exercitus potuit,	si fugientis
be.destroyed whole army	can+3SG+PERF+IND	if those.fleeing
persecuti	victores essent	(Liv. 32, 12.6)
pursue+3PL+PLUP+SUBJ	victors	(discontinuous with persecuti)

‘The whole army could have been destroyed, if the victors had pursued those who were fleeing’

もし勝者が逃げていたものを追ったなら、すべての敵は滅ぼされえただろう。

その意味はすべての敵が壊滅されること（勝者が敵を滅ぼすことができる立場にあるということ）が可能だったということであり、可能で ということではない。Handford(1947:132) ‘論理的に好ましい{logically preferable}’ というものの観点から選択を見ている。

この現象は LICITUM ESSE ‘be allowed’, MALLE ‘prefer’, DEBERE ‘ought’, OCCASIO ESSE ‘be a chance’ (Handford 1947:131)のような、概念的にモーダルな他の表現に関して見出される。最後の例は以下のようなものである。

quem si interficere voluisset, quantae quotiens
whom if to.kill wish+3SG+PLUP+SUBJ how.many how.often
occasiones fuerunt (Cic. Mil. 38)
occasions be+3PL+perf+IND

‘If he had wished to kill him, how many chances, how often, there were!’

もし彼が彼を殺したかったなら、

同じ特徴は英語の *could* のように現在の非現実条件に関して見出せる。

He could jump six feet, if he trained hard

He could jump six feet, if he wanted to

もし彼が練習を厳しくしたなら、彼は6フィート飛ぶことができた。

もし彼が望むなら、彼は6フィート飛ぶことができた。

ラテン語の未完了相の接続法の現在の直接法 LICITUM ESSE についても同様である。

licitum est si velles (Pl. Trin. 566)
allowed be+3SG+PRES+IND if wish+2SG+IMPF+SUBJ
‘You could if you wished’

もしあなたが望むなら、あなたはできた。

他の例において、時制の異なる組み合わせがあるが、しかし

idque si nunc memorare hic velim . . . vere
and.that if now to.remember this wish+1SG+PRES+SUBJ truly
possum (Ter. Hec. 471)
can+1SG+PRES+IND

‘If I now chose to recall this, I could do so with truth’

もし私がいまこれを撤回することを選ぶなら, 私は
si ita sententia esset . . . tibi servire
if thus opinion be+3SG+IMPF+SUBJ to.you to.serve
malui (Pl. Miles 1356)
prefer+1SG+perf+IND

‘If it were your view, I would have preferred to serve you’

もしそれがあなたの考えなら, 私はあなたに仕えたかっただろう.

eum contumeliis onerasti quem patris loco, si ulla in te
him with.insults you.loaded whom of.father in.place if any in you
pietas esset, colere debebas (Cic. Phil. 2.38.99)
affection be+3SG+IMPF+SUBJ to.honour ought+2SG+IMPF+IND

‘You loaded with insult the man whom, if you had any affection in you,
you ought to have honoured as a father’

もしあなたがあなたに

しかしいくつかの例に関して, ‘論理的な’説明は妥当ではない.
Handford(1947:132)は(少なくとも POSSE に関して)「ラテン語の権威のムー
ドの選択はほとんど個人の好みや一時の気まぐれ, _____によるものであ
る」と述べている. 彼は以下の例を引用している.

non potuit . . . fieri sapiens, nisi
not can+3SG+PERF+IND become wise unless
natus esset (Cic. Fin. 2.31.103)
born be+3SG+IMPF+SUBJ

‘He could not have become wise, if he had never been born’

もし彼が生まれなかったら, 彼は賢くなりえなかっただろう.

連続した二つの節において, 過去完了の接続法と完了相の直接法(帰結節に
おける)の間に対立がある一節がある. 最初のものは次のようなものである.

in qua quid facere potuissem, nisi tum consul
in which what to.do can+1SG+PLUP+SUBJ unless then consul
fuissem?

be+1SG+PLUP+SUBJ

‘What could I have done in that (crisis) if I had not then been consul?’

もし私がそのとき執政官でなかったら、私が

二番目のものは次のようなものである。

Consul autem esse qui potui,
consul however to.be who can+1SG+PERF+IND

nisi eum vitae cursum tenuissem? (Cic. Sest. 22.49)

unless that of.life course hold+1SG+PLUP+SUBJ

‘But how could I have been consul, if I had not held to that manner of
life?’

もしそのとき私が生活の作法を維持していなかったら、しかしかに
私は執政官でありえただろうか？

確かに‘論理的な’説明は二番目の文を説明していない。なぜなら生活の作法は執政官になるという能力が原因であったからである。しかし Cisero は実際に執政官になり得たし、これは直接法の選択という理由によるかもしれない。

Guilio Lepschy (私信による) はイタリア語に類似したもの(まったく同じではないが)があると指摘している。未完了相の直接法 *potevo* (=ラテン語の *potui*) は、もし以下のようにすでに能力が立場にあるという暗示があるならば、

(動詞‘to have’に過去分詞を足した条件の形式によって形成された)‘過去の条件’よりも好ましいかもしれない。

Potevi dir-me-lo!

can+2SG+IMPF+IND tell-me-it

‘You might have told me!’

あなたは私に言ったかもしれない！

(‘過去の条件{past conditional}’である *Avresti potuto dirmelo* は若干自然な文ではないようだ) 同じことが過去の非現実の条件である条件節に当てはまる。したがって未完了相の直接法は最初の例で可能であるが、しかし二番目の例ではほとんど不可能である。

potevo farlo se mi aiutavano
can+1SG+IMPF+INDIC do-it if me you.had.helped
'I could have done it if you had helped me'

もしあなたが私を助けてくれたなら、私はそれができたのに。

avrei potuto farlo se fossi stato più vecchio
can+1SG+PAST.COND do-it if I.had been more old
'I could have done it if I had been older'

もし私が年長だったなら、私はそれができたのに。

ここで本質的なポイントは最初の用例に関しては、私は能力があり、それを果たすために助けを必要としたに過ぎないという含意があるが、しかし二番目の用例は、私は能力がないが、もし私が（不可能だが）年長であったなら、果たせたのにという含意がある。

しかしラテン語の用例は、直接法の使用がモーダルな特徴がすでに備わっている能力で会ったという含意があるときにより使われるようであるにもかかわらず、‘論理的な’説明が常にあるわけではないということを示している。説明はより単純であるだろう。つまり、モーダルな表現が非現実{irrealis}であるので、その表現をさらに非現実なものとしてマークすることは、剰余的であるかもしれないのである。

実際に英語には Bybee(1995:506)が指摘しているように、概念的なモーダルの表現が以下のようにモーダルな動詞の代わりに非現実の条件の帰結文において用いられることは可能であるという点において、いくつか支持がある。

If I saw Judy	{	I wanted to I was gonna I was supposed to I intended to	}	tell her the news
---------------	---	--	---	-------------------

(しかし Bybee はこれらのうちいくつかは ‘_____ 文法化’ ではないと認めている)

8.3.4 未来の可能性

すべての言語が現実と非現実の条件の区別をするわけではない。Akatsuka(1985:627)によると、これは日本語や中国語、韓国語、モンゴル語、Semai 語、タイ語のように東アジアの言語に多くある。日本語からの例は以下

に挙げる.

musoko ga ikite i-tara ii noni naa!
son SUB alive be-if good though EXCL
‘If my son is alive, I’ll be so happy’
‘If my son were alive, I’d be so happy’

息子が生きていたらいいのになあ！

いくつかの言語は現実と非現実の区別をするが、しかしさらなる区別もする。そして東 Agau 語(Ethiopian Cushitic-Hetzron 1969:25)では、条件節と帰結節の両者に関して特定の条件のパラダイム（人称，数，性をマークする）があるが，しかし時制（未完了相と完了相）は条件節では

Hetzron は6つの‘主な組み合わせ{main combination}’を例証している。現実の条件に関して，条件の未完了相は条件節で用いられ，規則的な未完了相は帰結節で{definite}あるいは{indefinite}

’an desúni óncyé yégcé
I study+1SG+cond.IMPF work find+1SG+IMPF.INDEF
‘If I study I shall find work’

もし私が勉強するなら私は仕事を見つけるべきだ。

’an desúni óncyé yégcáyácé
I study+1SG+cond.IMPF work find+1SG+IMPF.DEF
‘If I study I shall find work’

もし私が勉強するなら私は

非現実の条件に関して条件の未完了相あるいは条件の完了相のいずれかは条件節で用いられ，条件の{indefinite}あるいは条件の{definite}は帰結節で用いられる。4つの可能性が与えられている。

'an desúni yizágá desésíy^{wà}
I study+1SG+COND.IMPF my.relative study+3SG+COND.INDEF
'If I study my relative would (probably) study'

'an desúni yizágá desáwšíy^{wà}
I study+1SG+COND.IMPF my.relative study+3SG+COND.DEF
'If I study my relative would (certainly) study'

'an desášúni yizágá desésíy^{wà}
I study+1SG+COND.PERF my.relative study+3SG+COND.INDEF
'If I had studied, my relative would (probably) have studied'

'an desášúni yizágá desáwšíy^{wà}
I study+1SG+COND.PERF my.relative study+3SG+COND.DEF
'If I had studied, my relative would (certainly) have studied'

もし私が勉強するなら、私の家族は（おそらく）勉強するだろう。
もし私が勉強するなら、私の家族は（確実に）勉強するだろう。
もし私が勉強したなら、私の家族は（おそらく）勉強しただろう。
もし私が勉強したなら、私の家族は（確実に）勉強しただろう。

当然のことながら、英語には条件の節に関して *should* の使用(7.6 参照)と *were to* というさらに二つの可能性がある。8.3.1 で与えられた（ここでは（）で括られている）次の二つの文が比較される場合がある。

If John should come, Bill will leave
If John were to come, Bill would leave
(If John comes, Bill will leave)
(If John came, Bill would leave)

もしジョンが来るなら、ビルは発つだろう。
もしジョンが来ることになっているなら、ビルは発つだろう。
（もしジョンが来るなら、ビルは発つだろう）
（もしジョンが来たなら、ビルは発つただろう）

最初の文の *will* と二番目の選択は現実と非現実の条件がそれぞれあることを明確に示している。それらは帰結節(John's coming)を言及する出来事の大いなる可能性

を示しているという点においてのみ括弧で括られた文と異なる。これは現実 / 非現実のコントラストに関する組み合わせにおいて、可能性の表現の 4 つの程

度を与えている。

Suwahili 語(Bantu-Saloné)に類似した状況があり, そこで Saloné が‘未完了相’と呼ぶものは, 現実の条件の通常のマーカーである。これは以下のように時制ーアスペクトマーカーの場所に現れる接中辞である。

Mtumwa a-ki-taka ku-ondoka-na minyaro . . .
 slave SUB-IMPFV-want INFIN-leave-RECIP shackles
 i-na-m-lazimu a-fany-e mapambano
 SUB-PRES-OBJ-necessary SUB-do-SUBJ struggle
 ‘If a slave wants to rid himself of his shackles, he must struggle’

もし奴隷が足かせから逃れることを望むなら, 彼はもがくに違いない。

しかし_____時制ーアスペクトのマーキングを伴った動詞に後続されている *ikiwa* あるいは *iwapo* という形式は, その組み合わせが満たさないかもしれないということを示唆するために用いられるのかもしれない。

ikiwa walawezi wote wa-na-fikiria hivyo ni-ta-jiuzili la
 if settlers all SUB-PRES-think this.way 1SG-FUT-resign but
 yuko kalika kundi la-wachache
 he in group of.few
 ‘If all the settlers think that way, I shall resign, but he is in the minority’

もしすべての居住者がそのように考えるなら, 私は辞職すべきだが, しかし彼は少数派である。

しかし *ikiwa* は接中辞-ki-を含み, そして文字通りに‘if it is’ (*iwapo* は所格のマーカーを伴う類似した形式である) であるということが記されなければならない。‘If it is the case that...’という観点の訳は, 通常他の誰かによってなされた叙述に対する疑いの程度を示唆しているということは驚くべきことではない。

8.4 願望

願望{wishes}もまた過去時制の形式を用いる。そして願望はしばしば非現実の条件の条件節として厳密に同じ線に沿って用いる。したがって古典ギリシャ語は未来と現在, 過去を表すために願望法{optative}, 未完了相, アオリストを用いる (8.3.1 で条件を比較せよ)。それらは *ei gár* によって示され, *ei* が条件の接続詞 (‘if’) であることは偶然の一致ではない。

ei gár genoíme:n téknon, antí souí
oh that become+1SG+AOR+OPT son, instead.of you
nekrós
corpse

(Eur. *Hipp.* 1410)

‘O that I might be a corpse, my child, instead of you!’

私の息子よ、お前の代わりに私が死体にならん。

ei gár tosaúte:n dúnamín eíkhon
oh that such strength have+1SG+IMPF+INDIC
‘Had I such strength’

(Eur. *Alc.* 1072)

私がそのような力をもっていたなら。

ei gár m’ hupó gé:n . . . hé:ken
oh that me below earth send+3SG+AOR+INDIC
‘Would he had sent me under the earth’

(Aesch. *P. V.* 152)

私を生き埋めにするぐらいのことを彼がしてくれていたならばなあ。

同様にラテン語はしばしば *utinam* を伴って現在, 未完了相, 過去完了の接続法を使用する。

Atque utinam ipse Varro incumbat in
but that self Varro apply.self+3SG+PRES+SUBJ in
causam
cause

(Cic. *Att.* 3. 15)

‘But if only Varro would apply himself to the cause’

しかし Varro が理想に自分を当てはめさえすれば。

Modo valeres!
only be.well+2SG+IMPF+SUBJ
‘If only you were well’

(Cic. *Att.* 11.23)

あなたさえ元気であれば。

Utinam ne . . . tetigissent litora puppes
that not touch+3PL+PLUP+SUBJ shores ships
‘Would that the ships had not touched the shore’

(Catull. 64. 171)

船が岸につかなかったならばなあ。

古典ギリシャ語のように英語は時々条件の接続詞, つまり *if only* を含む表現を用いる. より一般的には語彙動詞の *WISH* を用いる. 条件{conditional}に関して, 過去時制の形式が用いられるが, 未来に対する願望については *would* または *could* が通常も用いられる.

If only/I wish John would/could speak tomorrow

If only/I wish John had spoken yesterday

ジョンが明日話さえすればなあ/ 話せさえすればなあ.

ジョンが昨日話したらなあ.

未来の条件における *would* と *could* の使用はいくつかの意図性のある (つまり能力のある) 動作主があり, なぜなら願望は通常そのような手段?があるからである.

現在に関する願望について, *I wish John liked curry* のような条件に関して過去時制の形式が用いられる. これもまた, *If only / I wish John spoke tomorrow* といった条件に関して控え目な願望であることを説明していない. なぜならこのことはジョンが明日話すであろうことに関連しているのではなく, ジョンが明日話すことに関連しているのである. その際の意味はジョンが話すということが計画されているということである. 他の言語が願望を表すには様々な方法がある. Fula 語について Arnott(1970:299)は以下の例を挙げている.

njuutaa balde
be.long+2SG+SUBJ in.days
‘May you live long!’

あなたが長生きしますように!

Serrano 語(Hill 1967:88)で小詞は同じ目的のために用いられる. そして Huichol 語において, ‘願望{desiderative}’の小詞とともに用いられる(Grimes 1964:60-1).

8.5 ロシア語の‘接続法’

過去時制が接続法に関連するという点で他の方法がある. 例えばロシア語では, しばしば‘接続法{subjunctive}’と呼ばれるものが, 小詞-by に過去時制を足したものである. この方法は接続法が他の言語で用いられるところで幾度も使われている. 例えば‘欲望{desire}’, ‘要求{demand}’, ‘主張{insist}’といった動詞の後で用いられる (一方, 対格 / 与格と不定詞の構文は‘命令{order}’と共に用いられ, ‘示唆{suggest}’はいずれかの構文を取る).

Ja zhelaju/trebuju/nastaivaju chto-by ona ushla

I desire/demand/insist that-by she go+F.SG+PAST

‘I desire/demand/insist that she should go’

私は彼女が行くことを望む / 要求する / 主張する.

On poprosil/prikazal emu/emu uiti

he asked/ordered him/to.him go+INFIN

‘He asked/ordered him to go’

彼は彼に行くように頼んだ / 命令した.

On predlozhil chto-by my ushli

he suggested that-by we go+PL+PAST

‘He suggested we should go’

彼は我々が行くべきだと示唆した.

On predlozhil nam uiti

he suggested to.us go+INF

‘He suggested we should go’

彼は我々が行くべきだと示唆した.

それはまた、思考などの否定の動詞の後に用いられる。そこでロマンス語は接続法を用いる (5.2.2 参照).

Ja ne dumaju chto-by on byl glup

I not think that-by he be+M.SG+PAST stupid

‘I don’t think he’s stupid’

私は彼がばかだと思わない.

イタリア語と比較せよ.

Non credo che sia Corelli

no I.think that be+3SG+PRES+SUBJ Corelli

‘I don’t think that it’s Corelli’

私はそれが Corelli だと思わない.

ロシア語もまた目的の節でこの‘接続法’を用いるが、他のタイプはしばしば本来の接続法に関連している.

chtó-by niktó ne znal ob étom, nado
 that+by no.one not know+3M.SG+PAST about this necessary
 molchát'
 be.silent
 'So that no one may know, we must keep silent'

人は知らないかもしれないので、我々は沈黙しなければならない。

このロシア語の‘接続法’は過去時制と非現実性{unreality}のつながりを再び示しているようである。

8.6 解説

8.3 では非現実{unreal}の条件を示すために用いられる過去時制の形式に関する多くの言語からの用例があった。さらなる例を見出すのは容易である。Steele(1975:200)は Garo 語(Tibeto-Burman), Chipewyan 語(N. America, Athabaskan)と古 Marathi 語(India, Indo-Iranian)について言及している。James(1982:376)は例証された古アイルランド語に西ヨーロッパの言語加え、またバンツ諸語である Tonga 語と Haya 語、さらに北部のアメリカ言語である Cree 語(Algonquian)と Nitinaht 語(Wakashan)について言及している。Steele もまた、おそらく多少推測的だが、Uto-Aztecan 語(N. America)は、非現実{irrealis}の概念と過去が組み合わさった再構形の *ta* という形態素を持つと論じている。*ta* の反映形として見做され得る形態素において、これに関する証拠は語族の中の言語で見出されている。

当然、過去時制のモーダルな機能は、現在あるいは非現在という過去の形式を区別する時制の体系を持っている言語においてのみ現われ得る。現実{Realis} / 非現実{Irrealis}の範疇の中で時間の関係を扱うパプアニューギニアの言語(例えば Amele 語—6.4 参照)のような言語ではそれは現れない。Bhat(1999:144)は‘アスペクトの卓立{aspect prominent}’あるいは‘ムードの卓立{mood prominent}’であるそれらとを区別するように‘時制の卓立{tense prominent}’の特徴として、非現実の条件{unreal conditionals}に関する過去時制の使用を考察している。しかしそれは‘ムードが卓立した’言語に現れないということが明白であるにもかかわらず、‘アスペクトが卓越した’言語に関して、条件で用いられる範疇は現在と過去時制に密接に関連している範疇である完了相と未完了相に制限されていると言われなければならない。Bhat は Gujarati 語から例を挙げている。

tuN wəkhətsər awe to apNe bəhar jəiej
you on.time come+PERFV then we out might.go
'If you come on time, we might go out'

あなたが時間通りに来るなら、私たちは外出するかもしれない。

e saurN kam kərlo hOt to prəphesər
he good work do+IMPFV then professor become
'If he were doing good work, he would (have) become a professor'

彼がいい仕事をしたなら、彼は教授になるかもしれない
(なったかもしれない)。

厳密にはその関係は文法的な過去時制に関してよりも過去の時間に関連しているマーカーに関するものであるようである。

明らかで重要な疑問は、‘なぜ過去時制（あるいはさらに厳密に言えば、過去の時と関連する形式）はモダリティのこのタイプを表現するためにそんなに広く用いられるのか？’ 未来はしばしばモダリティの類に見られ(Lyons 1977:816), 非現実としてしばしば扱われているのに、なぜ未来は代わりに用いられないのか？

過去と非現実の関係は度々記されてきたが、しかし解説はおおむね堂々めぐりのようである。例えば Joos(1964:121-2)は時間や現実性において本質的に共通した特徴は遠隔性であると示唆している。同様に James(1982:396)は‘現実性からの遠隔性’について述べており、Langacker(1978:855)は‘遠隔{distal}’というラベルを用いている。しかしこれは極めて異なる二つの意味を一つのラベルに与えたに過ぎないかもしれず、したがって同じ形式かもしれない。

Steele(1975:217)は‘分離という意味論的な根源{semantic primitive of disassociative}’に関して論じており、そして過去の時間は現在の時間から分離され、現実性は非現実性から分離される。特に関連性があるのは丁寧な要求に対して過去時制を用いるという Steele の解釈である。

Would you pass the salt?
cf. Will you pass the salt?

塩をまわしてくれますか？
cf. 塩をまわしてくれますか？

彼女は、過去時制は依頼から話し手を抽出すると示唆している。しかしなぜだろうか？過去の使用は意図性が現実を拡大しないという可能性を残したままであるというものであるが、しかし過去は意図性が現在に拡大するかもしれない

いということを含意するのかもしれない。したがって *I want to speak to you* は注意を必要とする。一方 *I wanted to speak to you* は過去の欲望のみを示し、聞き手が‘私は今時間がない’というような弁解をする可能性を残したままにしている。彼女はまた、過去における意図は通常達成されず、また達成されなかった意図は‘特別な種類の非現実’であるという Hale(1969:22)の示唆を記している。

これらの考えに沿った議論は Bybee(1995:506-8)によって詳細に、説得力をもたてられている。彼女は WANT のようなモーダルな動詞に関して (すなわち概念的にモーダルな動詞)、動作主と主たる述部にはより根拠などが弱い関係があると示唆している。*I wanted to* は‘欲望が遂行されたという文脈と欲望が遂行されなかったという文脈の両方’で用いられ得る。さらに‘モーダル’のような状態動詞の過去形は‘状態は発話の瞬間の以前に存在するが、それらは状態が現在において存在するか否かを述べているのではないということ’を主張する。曖昧さには二つの領域がある。‘(i) 示された出来事は完了されたか否か’そして‘(ii) モダリティは効果を残しているか否か’ということである。以下のように過去の時におけるモーダルについて主たる出来事の完了のいくつかの条件が満たされないという可能性がある。

I wanted to help you (but didn't)

私はあなたに助けてほしかった (しかし助けてもらえなかった)。

そして彼女は次のように過去の‘丁寧さ’の使用を考えている。

I wanted to ask you a question

私はあなたに質問したいのだけれども。

彼女が示唆していることは、このことが満たされない条件があるかもしれないということであり、またこれは聞き手が質問されることを欲しているかどうかという問題を含んでいる。モダリティはもはや効力がないという含意を残したままであると彼女は付け加えてもよかった。これはさらに重要なようである。というのは、私はまだ質問したいということが必ずしも事実ではないということを示唆することによって、私はその質問が答えられるべきであるという私のこだわりを大いに弱めているのである。

この説明は以下の文のように拘束的なモーダルの CAN と WILL を解いている。

I could do that for you

I would do that for you

私はあなたのためにそれができる。

私はあなたのためにそれをしよう.

ここで現在時制の形式の *can* と *will* の使用は提案というよりも指示? 命令? 助言として取られるかもしれない. なぜなら *can* は次のように用いられる場合があるからである (母が子供に対して).

You can stay in your room until you behave

あなたはあなたが行儀よくするまであなたの部屋にいられる.

同様に *will* は以下のように助言することに用いられる場合がある.

You will do as I say

あなたは私が言う通りにしなさい.

対照的に上記で与えられた理由について, 過去時制の形式は単に提案か示唆として解釈され得る.

ここで以下のことを通常言えないということは思いだす価値がある (3.3.2 参照).

***I ran fast and could catch the bus**

***I asked him and he would come**

というのは, 上記で議論されたように過去時制のモデルは出来事が完了しなかったことを示唆する場合がある. したがって完了した明白な含意があるときには適切ではない.

幾分類似した説明は示唆に関する *might* と *could* の使用で与えられる. さらに認識的な *might* も使われる. しかしそれはすべての過去時制とモデルな形式を完全に説明しているわけではないだろう. 例えば *should* の使用 **SHALL** よりも **MUST** の ‘非現実{unreal}’ の形式として説明しているわけではない.

さらにこの説明は非現実の条件における過去時制の動詞の使用に適用できるようには思われない. 特に古典ギリシャ語と **Tigre** 語(8.2.1)におけるように, モデルな動詞がないときにおいてはそうである. **Bybee** は「彼女がもしジュディに会えば, 彼女はジュディにニュースのことを伝えるかもしれない」に対する **Bybee** の分析を広げようと試みている. **Bybee** が言うには両方の節における過去は…条件の関係が過去の時間において当てはまったということを示している. **then** の節におけるモデルティはその関係がまだ効力があるということを示している (Cf. マイクが彼女に会ったら, 彼は彼にニュースのことを言うかもしれない). これは完全に納得できない. なぜなら, なぜ過去時制の形式が非現実のものとして解釈されうるかということをそれは説明しているにも拘わらず,

なぜ過去時制の形式が最初に使われなければならないのかということを説明していないからである。なぜなら条件の関係は過去の時間において当てはまるということだが、実際には真ではないからである。

最後に、そして不幸なことに、否定的にこのセクションにおいてロシア語の接続法における過去時制の使用を説明するものは何もないということを言わなければならない。

言語におけるすべてのものが合理的に説明できるものではない！

1) 原文のまま.

1) 原文のまま.

NOTE ON THE TEXT

In addition to the usual conventions for the use of italics, quotation marks and asterisks, the following notation is used:

In the text:

<i>Initial capitals</i>	major typological categories
SMALL CAPITALS	verbs, including modals
'single quotation marks'	terms by the authors quoted

In the inset examples

SMALL CAPITALS	grammatical categories and language forms where the grammatical category is not established
- hyphen	morphemic boundary in the language material and corresponding division in the gloss
+ plus sign	combined categories in the gloss represented by a single element in the language material

To a large extent, the transcriptions, glosses and translations used in the glosses are those of the original authors, except that

- (i) no distinction is made between affixes and clitics;
- (ii) where both a phonemic or phonetic and a morphophonemic representation (showing morpheme boundaries) are given by the author, either the morphophonemic version will be given or the morphophonemic form will be given and followed by the phonemic representation;
- (iii) the abbreviations used for the names of the categories are standardized for consistency – see list on next page.

ABBREVIATIONS

1	first person
2	second person
3	third person
ABS	absolute
ABL	ablative
ABSOL	absolutive
ACC	accusative
ADM	admirative
AFF	affirmative
AG	agent
AOR	aorist
APP	apparent
ASS	assertion/assertive
ASSUM	assumed/assumptive
AUD	auditory
AUX	auxiliary
BEN	benefactive
CARIT	caritative
CATEG.ASS	categorical assertion
CAUS	causative
CERT	certain
CIRC	circumstantive
CL	classifier
CM	conjugation marker
CNTF	counterfactual
CNTR.ASS	counterassertion
CO.AG	co-agency
COMPL	complementizer
COMPLET	completive
COMPUL	compulsional

CONCESS	concessive
COND	conditional
CONJ	conjecture
COOP	cooperative
COP	copulative
COREF	coreferential
CUST	customary
DAT	dative
DEB	debitive
DEC	declarative
DED	deduced
DEF	definite
DEFOC	defocus
DEM	demonstrative
DES	desiderative
DIFF	different event
DIR	direct case
DS	different subject
DUB	dubitative
DUR	durative
EF.INF.	emphatic first-hand information
EMPH	emphatic
ERG	ergative
EV	evidential
EXCL	exclamative
EXPECT	expectational
FACT	factual
F.INF	first-hand information
FOC	focus
FREQ	frequentative
F.SG	feminine singular
FUT	future
FUT.INT	future intention
GEN	generic
GEN.COND	generic conditional
GEN.KNOW	general knowledge
HAB	habitual
HAB.P	habitual past
HORT	hortative
HR.EV	heard evidence

HSY	hearsay
HYPOTH	hypothetica;
IGNOR	ignorative
IMM.PAST	immediate past
IMP	imperative
IMPERS	impersonal
IMPF	imperfect
IMPFV	imperfective
INC	incompletive
INCH	inchoatived
INCL	inclusive
IND	indicative
INDEF	indefinite
INDIR	indirect
INF/INFER	inference/inferential
INFIN	infinitive
INFREQ	infrequentative
INT	interrogative
INTEN	intensifier
INTR	intransitive
IRR	irrealis
IRRELEV	irrelevance
JUSS	jussive
LING.EVID	linguistic evidence
LOC	locative
M.E.	multiple event
M.SG	masculine singular
MOD	modal
NEG	negative
NOM	nominative
NONFEM	non-feminine
NONFUT	non-future
NONVIS	non-visual
OBJ	object
OBL	obligative
OPT	optative
PART	participle
PAT	patient
PER	period
PERF	perfect

PERFV	perfective
PERM	permission/permissive
PERS.AG	personal agency
PERS.EXP	personal experience
PL	plural
PL.EXC	exclusive plural
PLUP	pluperfect
POSS	possessive
POT	potential
PRED	predicate
PREDICT	prediction
PREP	preposition
PRES	present
PROG	progressive
PROH	prohibitive
PUNCT	punctual
PURP	purpose, purposive
QUES, Q	question
QUOT	quotative
REAL	realis
RECIP	reciprocal
RED	reduplication
REFL	reflexive
RELEV	relevance
REL.FUT	relative future
REM	remote
REP	report, reported, reportive
REP.DEP	report in dependent clause
REP.IND	report in independent clause
RESP	responsive
RESP.SCEP	sceptical response
SAME	same event
SCEP	sceptical
SEC	second-hand
SEE.EV	seen evidence
SEMEL	semelfactive
SENS.EVID	sensory evidence
SEQ	sequential
SG	singular
SIM	simultaneous

SIMULAT	simulative
SM	subject marker
SPEC	speculated
SS	same subject
STAT	stative
SUB	subject
SUBJ	subjunctive
TOD.PAST	today's past
TOP	topic
UNCERT	uncertain
VIS	visual
YEST.PART	yesterday's past

References

- Akatsuka, Noriko. 1985. Conditionals and the epistemic scale. *Language* 61: 625–39.
- Aksu-Koç, Ayhan A. and Slobin, Dan I. 1986. A psychological account of the development and use of evidentials in Turkish. In Chafe and Nichols 1986: 159–67.
- Anderson, J. 1971. *The grammar of case: towards a Vocalist theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Andrews, J. Richard. 1975. *Introduction to Classical Nahuatl*. Austin: University of Texas Press.
- Arnott, D. W. 1970. *The nominal and verbal system of Fula*. Oxford: Clarendon Press.
- Asher, R. E. 1982. *Tamil*. (*Lingua Descriptive Series* 7.) Amsterdam: North Holland.
- Austin, J. L. 1956. Ifs and cans. *Proceedings of the British Academy* 42: 109–32. Reprinted in Austin 1961: 153–80.
1961. *Philosophical papers*. Oxford: Clarendon Press.
- Austin, Peter. 1981. *A grammar of Diyari, South Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bar-Hillel, Y. 1970. *Aspects of language*. Jerusalem: Magnus.
- Barnes, J. 1984. Evidentials in the Tuyuca verb. *International Journal of American Linguistics* 50: 255–71.
- Bavin, Edith. 1995. The obligation modality in Western Nilotic languages. In Bybee and Fleischman 1995a: 107–33.
- Bhat, D. N. S. 1999. *The prominence of tense, aspect and mood*. (*Studies in language companion series* 49.) Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.
- Bliese, L. F. 1981. *A generative grammar of Afar*. (*Publications in linguistics* 65.) Arlington: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington.
- Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Holt; (1935) London: Allen and Unwin.
- Boas, Franz (ed.). 1922. *Handbook of American Indian languages* (Vols. I and II). Washington: Government Printing Office.
- 1933–8. *Handbook of American Indian languages* (Vol. III). Columbia: Columbia University Press.
- Bolinger, Dwight L. 1968. Postposed main phrases: an English rule for the Romance subjunctive. *Canadian Journal of Linguistics* 14: 3–33.

1978. Yes-No questions are not alternative questions. In Hiz 1978: 87–105.
- Botne, Robert. 1997. Evidentiality and epistemic modality in Lega. *Studies in language* 21: 509–32.
- Bromley, H. M. 1981. *A grammar of Lower Grand Valley Dani* (Pacific Linguistics C 63.) Canberra: Department of Linguistics, Australian National University.
- Brown, Keith. 1991. Double modals in Hawick Scots. In Trudgill and Chambers 1991: 74–103.
- Bruce, L. 1984. *The Alamlak language of Papua New Guinea* (Pacific Linguistics C 81.) Canberra: Department of Linguistics, Australian National University.
- Buckley, Eugene. 1988. Temporal boundaries in Alsea. *Papers from the sixteenth meeting of the Berkeley Linguistic Society* 16: 10–22.
- Bugenhagen, Robert D. 1994. The semantics of irrealis in the Austronesian languages of Papua New Guinea. In Reesink 1994: 1–39.
- Butt, J. and Benjamin, C. 1988. *A new reference grammar of modern Spanish*. London: Edward Arnold.
- Bybee, Joan. 1985. *Morphology: a study of the relation between meaning and form* (Typological studies in language 9.) Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
1995. The semantic development of past tense modals in English. In Bybee and Fleischman 1995a: 503–17.
1998. ‘Irrealis as a grammatical category’. *Anthropological Linguistics* 40: 257–71.
- Bybee, Joan and Fleischman, Suzanne (eds.). 1995a. *Modality and grammar in discourse* (Typological studies in language 32.) Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 1995b. Modality in grammar and discourse: an introductory essay. In Bybee and Fleischman 1995a: 1–14.
- Bybee, Joan L., Pagliuca, William and Perkins, Revere D. 1991. Back to the future. In Traugott and Heine 1991 Vol. II: 17–58.
- Bybee, Joan L., Perkins, Revere D. and Pagliuca, William. 1994. *The evolution of grammar: tense, aspect and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Capell, A. and Hinch, H. E. 1970. *Maung grammar: texts and vocabulary*. The Hague and Paris: Mouton.
- Chafe, Wallace. 1986. Evidentiality in English conversation and academic writing. In Chafe and Nichols 1986: 261–72.
1995. The realis–irrealis distinction in Caddo, the Northern Iroquoian languages, and English. In Bybee and Fleischman 1995a: 349–65.
- Chafe, Wallace L. and Nichols, Joanna. 1986. *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, N. J.: Ablex.
- Chung, Sandra and Timberlake, Alan. 1985. Tense, aspect and mood. In Shopen 1985 Vol III: 202–58.
- Coates, Jennifer. 1983. *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Cohen, M. 1936. *Traité de langue amharique*. Paris: Institut d’ethnologie.

- Cole, P. 1982. *Imbabura Quechua*. (*Lingua Descriptive Series* 5.) Amsterdam: North Holland.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cormack, Annabel and Smith, Neil. Forthcoming. Modals and negation in English.
- Cowell, M. W. 1964. *A reference grammar of Syrian Arabic*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Craig, C. G. 1977. *The structure of Jacaltepec*. Austin and London: University of Texas Press.
- Croft, William. 1995. Modern syntactic typology. In Shibatani and Bynon 1995: 85–144.
- Curme, G. O. 1905. *A grammar of the German language*. London: Macmillan; (1960 rev. edn) New York: Frederick Ungar.
- Davidson-Nielsen, Niels. 1990. *Tense and mood in English: a comparison with Danish*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Davies, J. 1981. *Kobon*. (*Lingua Descriptive Series* 3.) Amsterdam: North Holland.
- De Haan, Ferdinand. 1997. *The interaction of modality and negation: a typological study (Outstanding dissertations in linguistics)*. New York: Garland Publishing.
- Deibler, E. W. 1976. Semantic relationships of Gahuhu verbs. *Studies in Linguistics* (Norman, Oklahoma, Summer Institute of Linguistics) 48.
- Delancey, Scott. 1986. Evidentiality and volitionality in Tibetan. In Chafe and Nichols 1986: 203–14.
- Derbyshire, D. C. 1979. *Hixkaryana*. (*Lingua Descriptive Series* 1.) Amsterdam: North Holland.
- Dixon, R. M. W. 1972. *The Dyirbal language of North Queensland*. Cambridge: Cambridge University Press.
1977. *A grammar of Yidj*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Donaldson, T. 1980. *Ngiyambaa: the language of the Wangaaybuwan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ehrman, M. 1966. *The meaning of the modals in present-day American English*. The Hague: Mouton.
- Foley, William A. 1986. *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frachtenberg, Leo. 1920. Yakonan (Alsea) grammar. Unpublished Ms. in the Franz Boas collection of the American Philosophical Society Library, Philadelphia.
1922. Coos. In Boas 1922 Vol. II: 297–429.
- Frajzyngier, Zigmunt. 1985. Truth and the indicative sentence. *Studies in Language* 9: 243–54.
- Frawley, William. 1992. *Linguistic semantics*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Friedman, Victor A. 1981. Admirativity and confirmativity. *Zeitschrift für Balkanologie* 17: 12–28.
1986. Evidentiality in the Balkans: Bulgarian, Macedonian, and Albanian. In Chafe and Nichols 1986: 168–87.

- Fries, C. C. 1927. The expression of the future. *Language* 3: 87–95.
- Gary, J. O. and Gamel-Eldin, S. 1982. *Egyptian colloquial Arabic*. (*Lingua Descriptive Series* 6.) Amsterdam: North Holland.
- Giridhar, P. P. 1994. *Mao Naga grammar*. Mysore: Central Institute of Indian languages.
- Givón, Talmy. 1971. Dependent modals, performatives, factivity, Bantu subjunctives and what-not. *Studies in African Linguistics* 2: 61–81.
1982. Evidentiality and epistemic space. *Studies in Language* 6: 2349.
1994. Irrealis and the subjunctive. *Studies in Language* 18: 265–337.
- Givón, T. and Kimenyi, A. 1974. Truth, belief and doubt in Kinyarwanda. *Papers from the fifth annual conference on African Linguistics* (*Studies in African Linguistics, Supplement* 5): 95–113.
- Gordon, Lynn. 1986a. *Maricopa morphology and syntax*. (*University of California Publications in linguistics* 108.) Berkeley: University of California Press.
- 1986b. The development of evidentials in Maricopa. In Chafe and Nichols 1986: 75–88.
- Grimes, J. 1964. *Huichol syntax*. (*Janua Linguarum, Series Practica* 11.) The Hague: Mouton.
- Hale, K. 1969. *Papagolči-m*. Cambridge, Mass.: Massachusetts Institute of Technology (mimeo).
- Hall, R. A. 1964. *Introductory linguistics*. Philadelphia and New York: Chilton Books.
- Halliday, M. A. K. 1970. Functional diversity in language as seen from a consideration of mood and modality in English. *Foundations of Language* 4: 225–42.
- Hammer, A. E. 1983. *German grammar and usage*. (Reprinted edition with corrections and Supplement.) London: Edward Arnold.
- Hamp, E. P. 1982. Latin *ut/ne* and *ut* (. . . non). *Glotta* 60: 115–20.
- Handford, S. A. 1947. *The Latin subjunctive: its usage and development from Plautus to Tacitus*. London: Methuen.
- Hardy, H. K. and Gordon, L. 1980. Types of adverbial and modal constructions in Tolkapaya. *International Journal of American Linguistics* 46: 183–96.
- Haugen, E. 1976. *The Scandinavian languages: an introduction to their history*. London: Faber and Faber.
- Hensarling, G. 1982. Evidentials in Kogi. Ms.
- Hetzron, Robert. 1969. *The verbal system of Southern Agaw*. (*University of California Publications, Near Eastern Studies* 12.) Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Hewitt, B. G. 1979. *Abkhaz*. (*Lingua Descriptive Series* 2.) Amsterdam: North Holland.
- Hill, K. C. 1967. *A grammar of the Serrano language*. Unpublished dissertation, University of California, Los Angeles.
- Hiz, H. (ed.) 1978. *Questions*. Dordrecht: Reidel.
- Hockett, C. F. 1968. *A course in modern linguistics*. New York: Macmillan.

- Hoijer, Harry. 1931/83. Tonkawa: an Indian language of Texas. In Boas 1938–8: 1–148.
- Hooper, J. B. 1975. On assertive predicates. In Kimball 1975: 91–124.
- Hope, E. R. 1974. *The deep syntax of Lisu sentences: transformational case grammar* (*Pacific Linguistics*, B 34.) Canberra: Department of Linguistics, Australian National University.
- Horton, A. E. 1949. *A grammar of Luvale*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- Huddleston, Rodney. 1976. Some theoretical issues in the description of the English verb. *Lingua* 40: 331–83.
1995. The case against a future tense in English. *Studies in Language* 19: 399–446.
- Huisman, R. D. 1973. Angaataha verb morphology. *Linguistics* 110: 43–54.
- Jacobsen., William H. 1986. The heterogeneity of evidentials in Makah. In Chafe and Nichols 1986: 3–28.
- James, D. 1982. Past tense and the hypothetical: a cross-linguistic study. *Studies in Language* 6: 375–403.
- Jarvella, R. J. and Klein, W. (eds.). 1982. *Speech, place and action: studies in deixis and related topics*. New York: Wiley.
- Jespersen, O. 1909–49. *A modern English grammar*. 7 vols. Heidelberg: Karl Winter; Copenhagen: Einar Munksgaard.
1924. *The philosophy of grammar*. London: Allen and Unwin.
- Johnston, Raymond Leslie. 1980. *Nakanai of New Britain. The grammar of an Oceanic language*. (*Pacific Linguistics*, B 70.) Canberra: Department of Linguistics, Australian National University.
- Joos, M. 1964. *The English verb: form and meanings*. Madison and Milwaukee, Wisc.: The University of Wisconsin Press.
- Kastovsky, D. and Szwedek, A. (eds.). 1986. *Linguistics across historical and geographical boundaries: in honour of Jacek Fisiak*. The Hague: Mouton de Gruyter.
- Kayne, R. S. 1975. *French syntax: the transformational cycle*. Cambridge, Mass., and London: MIT Press.
- Kimball, P. (ed.). 1975. *Syntax and semantics* 4. New York: Academic Press.
- Kiparsky, P. and Kiparsky, C. 1971. Fact. In Steinberg and Jakobovits 1971: 345–69.
- Klein, F. 1975. Pragmatic constraints in distribution: the Spanish subjunctive. *Papers from the 11th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*: 353–65.
- Koshal, S. 1979. *Ladakhi grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Kuno, S. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass., and London: MIT Press.
- Lakoff, R. T. 1968. *Abstract syntax and Latin complementation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Langacker, R. W. 1978. The form and meaning of the English auxiliary. *Language* 54: 853–82.
- Langdon, Margaret. 1970. *A grammar of Diegueño: the Mesa Grande dialect*. Berkeley: University of California Press.

- Lavandera, B. R. 1978. *Analysis of semantic variation: the Spanish moods*. (Mimeo.)
- Leman, Wayne. 1980. *A reference grammar of the Cheyenne*. (Occasional Publications in Anthropology, Linguistics Series 5.) Museum of Anthropology, University of Northern Colorado, Greeley, Colorado.
- Lepschy, A. L. and Lepschy, G. 1977. *The Italian language today*. London: Hutchison.
- Leslau, W. 1941. *Documents Tigrinya*. Paris: Klincksieck.
1945. *A short grammar of Tigre*. (Publications of the American Oriental Society Offprint Series 18.) New Haven, Conn.: American Oriental Society.
- Levinsohn, S. H. 1975. Functional perspective in Inga. *Journal of Linguistics* 11: 1–37.
- Lewis, G. L. 1967. *Turkish grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- Li, C. N. and Thompson, S. A. 1981. *Mandarin Chinese: a functional reference grammar*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- Lichtenberk, Frantisek. 1983. *A grammar of Manam*. (Oceanic Linguistics Special Publication 18.) Hawaii: University of Hawaii Press.
1995. Apprehensional epistemics. In Bybee and Fleischman 1995a: 293–327.
- Lightfoot, D. 1979. *Principles of diachronic syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Loeweke, E. and May, J. 1980. General grammar of Fasu (Namo Me). *Work Papers in Papua New Guinea Linguistics* 27: 5–106.
- Lowe, I. 1972. On the relation of the formal and sememic matrices with illustrations from Nambiquara. *Foundations of Language* 8: 360–90.
- Lunn, Patricia V. 1995. The evaluative function of the Spanish subjunctive. In Bybee and Fleischmann 1995: 419–49.
- Lyons, J. 1968. *Introduction of theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
1977. *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
1982. Deixis and subjectivity: *loquor ergo sum?* In Jarvella and Klein 1982: 101–24.
- Malone, Terrell. 1988. The origin and development of Tuyuca evidentials. *International Journal of American Linguistics* 54: 119–40.
- Matthews, G. H. 1965. *Hidatsa syntax*. The Hague: Mouton.
- Matthews, P. H. 1991. *Morphology* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Merlan, F. 1982. *Mangarayi*. (Lingua Descriptive Series 4.) Amsterdam: North Holland.
- Miller, Amy. 1990. *A grammar of Jamul Digueño*. Ph.D dissertation, University of California, San Diego.
- Mithun, Marianne. 1986. Evidential diachrony in Northern Iroquoian. In Chafe and Nichols 1986: 89–112.
1995. On the relativity of irreality. In Bybee and Fleischman 1995a: 367–88.
1999. *The languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moore, R. W. 1934. *Comparative Greek and Latin syntax*. London: Bell.
- Munro, Pamela. 1976. *Topics in Mojave syntax*. New York: Garland Press.

- Muslin, Ilana. 1997. Direct speech and evidentiality in Macedonian. *Papers from the thirty-third regional meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS 33), Papers from the main session*: 287–330.
- Newmark, Leonard, Hubbard, Philip and Prifti, Peter. 1982. *Standard Albanian: a reference grammar for students*. Stanford: Stanford University Press.
- Okell, John. 1969. *A reference grammar of colloquial Burmese*. 2 vols. London: Oxford University Press.
- Osborne, C. R. 1974. *The Tiwi language*. (Australian aboriginal studies 55, Linguistic series 21.) Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Oswalt, Robert L. 1986. The evidential system of Kashaya. In Chafe and Nichols 1986: 29–45.
- Palmer, F. R. 1957. The verb in Bilin. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 19: 131–59.
1962. Relative clauses in Tigrinya. *Journal of Semantic Studies* 7: 36–43.
1974. *The English verb*. London and New York: Longman.
1979. *Modality and the English modals*. London and New York: Longman.
1983. Review of Coates 1983. *Australian Journal of Linguistics* 3: 287–93.
1984. *Grammar* (2nd edition). Harmondsworth: Penguin.
1986. *Mood and modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
1987. *The English verb* (2nd edition). London and New York: Longman.
1990. *Modality and the English modals* (2nd edition). London and New York: Longman.
1994. *Grammatical roles and relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
1995. Negation and the modals of possibility and necessity. In Bybee and Fleischman 1995a: 453–71.
1997. Negation and modality in the Germanic languages. In Swan and Westvik 1997: 133–49.
- Parks, Douglas. R. 1976. *A grammar of Pawnee*. (Garland studies in American Indian linguistics.) New York: Garland Publishing.
- Perkins, Michael R. 1982. The core meaning of the English modals. *Journal of Linguistics* 18: 245–73.
- Picallo, M. Carme. 1990. Modal verbs in Catalan. *Natural language and linguistic theory* 8: 285–312.
- Plank, F. 1984. The modals story retold. *Studies in Language* 8: 305–64.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sidney, Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London and New York: Longman.
- Rastorgueva, V. S. 1963. *A short sketch of Tajik*. (Indiana Research Center in Anthropology, Folklore and Linguistics Publication 28. *International Journal of American Linguistics* 29.)
- Reesink, Ger. P. (ed.) 1994. *Topics in descriptive Austronesian linguistics*. (Samaan 11.) Leiden: Vakgroep Talen en Culturen van Zuidoost-Azië en Oceanië, Rijksuniversiteit Leiden.

- Rivero, M.-L. 1975. Referential properties of Spanish noun phrases. *Language* 51: 32–48.
1977. Specificity and existence: a reply. *Language* 53: 70–85.
- Roberts, John R. 1990. Modality in Amele and other Papuan languages. *Journal of linguistics* 26: 363–401.
1994. The category 'irrealis' in Papuan medial verbs. *Notes on Linguistics* 67: 5–41.
- Robins, R. H. 1952. Noun and verb in universal grammar. *Language* 28: 289–98.
- Rojas, N. 1977. Referentiality in Spanish noun phrases. *Language* 53: 61–9.
- Ruwet, N. 1967. *Introduction à la grammaire générative*. Paris: Plon.
- Saloné, Sukari. 1983. The pragmatics of reality and unreality in conditional sentences in Swahili. *Journal of pragmatics* 7: 311–24.
- Sapir, Edward. 1922. The Takelma language of Southwestern Oregon. In Boas 1922 Vol. II: 7–296.
- Schlichter, Alice. 1986. The origins and deictic nature of Wintu evidentials. In Chafe and Nichols 1986: 46–59.
- Schubiger, M. 1965. English intonation and German modal particles: a comparative study. *Phonetica* 12: 65–84.
- Searle, J. R. 1983. *Intentionality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Semeonoff, A. H. 1958. *A new Russian grammar* (12th revised edition). London: Dent.
- Shell, O. A. 1975. Cashibo modals and the performative analysis. *Foundations of Language* 13: 177–99.
- Shibatani, Masoyoshi and Bynon, Theodora (eds.). 1995. *Approaches to language typology*. Oxford: Clarendon Press.
- Shipley, William F. 1964. *Maidu grammar*. (University of California Publications in Linguistics 41.) Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Shopen, Timothy (ed.). 1985. *Language typology and syntactic description*. 3 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silva-Corvalán, Carmen. 1995. Contextual conditions for the interpretation of 'poder' and 'deber' in Spanish. In Bybee and Fleischman 1995a: 67–105.
- Steele, S. 1975. Past and irrealis: just what does it all mean? *International Journal of American Linguistics* 41: 200–17.
1997. The future of typology. *Papers from the 32nd Regional meeting. The Chicago Linguistic Society (CLS), Papers from the panels* 33: 287–330.
- Steele, Susan, with Alemajian, Adrian and Wadsworth, Thomas. 1981. *An encyclopedia of AUX: a study in cross-linguistic equivalence*. (Linguistic Inquiry Monograph 5.) Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Steere, Edward. 1943. *A handbook of Swahili language as spoken at Zanzibar* (4th edition revised by A. B. Hellier) London: The Sheldon Press.
- Steinberg, D. D. and Jakobovits, L. A. (eds.). 1971. *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Suzuki, Satoko. 1994. Is that a fact? Reevaluation of the relationships between factivity and complementizer choice in Japanese. *Proceedings of the twentieth annual meeting of the Berkeley Linguistic Society (BLS 20)*: 521–31.

- Swan, Toril and Westvik, Olaf Jansen. 1997. *Modality in Germanic languages; historical and comparative perspectives*. (Trends in linguistics: studies and monographs 99.) Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Sweetser, Eve. E. 1982. Root and epistemic modals: causality in two worlds. *Proceedings of the eighth annual meeting of the Berkeley Linguistic Society (BLS 8)*: 484–507.
1990. *From etymology to pragmatics; metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Terrell, Tracy and Hooper, Joan B. 1974. A semantically based analysis of mood in Spanish. *Hispania* 57: 484–94.
- Thiagarayan, K. 1981. Modal systems of English and Tamil. Unpublished dissertation, University of Madras.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *International Journal of American Linguistics* 55: 31–55.
- Traugott, E. C. and Heine, B. (eds.) 1991. *Approaches to grammaticalization*. 3 vols. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Trudgill, Peter and Chambers, J. K. (eds.) 1991. *Dialects of English; Studies in grammatical variations*. London: Longman.
- Tucker, A. N. and Mpaayei, J. T. O. 1955. *A Maasai grammar*. London: Longman.
- Watkins, Laurel. 1998. *A grammar of Kiowa*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- West, D. 1983. *Wojokeso sentence, paragraph and discourse analysis*. (Pacific linguistics B28.) Canberra: Department of Linguistics: Australian National University.
- Willett, Thomas. 1988. A cross-linguistic survey of the grammaticalization of evidentiality. *Studies in Language* 12: 51–97.
- von Wright, E. H. 1951. *An essay in modal logic*. Amsterdam: North Holland.